



ザグレウス

は
憩
う



Z a γ ρ ε ύ ς

ザグレウスは憩う
...散文

《イ短調のプレリュード》、モーリス・ラヴェル。
Prelude in A minor, 1913, Joseph-Maurice Ravel

《in the sea of the pluto》連作：I

Zagreus
ザグレウス



序

...あるいは、日差しとはむしろ、こうやって眼差しにふれていなければならないのだ、と。
そんな、頼んでもいない諭しを自分勝手に撒き散らして仕舞うだけの、ただ呆然としてやるほかないやさしい午後の日差しがその瞬間、ふれた。
その時、まぶたを開いた一瞬に。

光。あくまでも淡い逆光として。そして、光はすでに周囲を無造作にさわり散らしていたのだ。眼に映るもののすべて、さらには眼差しにだけでなく肌にも、視界の外、寝室に投げ込まれた雑多なあらゆるもののすべてにも。なにかにもが、光のなかにその形態をくまどられ、色彩を曝し、精妙な翳りの中にみずから浮び上がらせ、それら、瑞々しいそれら自身の存在を、にもかかわらずなにかを語りかけるわけでもないままに、ただ、すべてはそれぞれの固有の現状を誰にというわけでもなく見せ付けているしかない。

ベッドに横たわった私は。あっている私をその内側に孕みこんで垂れ下がった蚊帳の白さは。あるいはその先の、ハンガーにかけられたままのふたりの衣類のたぐいさえもが。壁に塗られた薄い緑色のペンキの剥き出しの沈黙。蚊帳のこまかな網目のやわらかい白濁を通して垣間見られるそれら。そして朝、私が不意に抱え込んで仕舞った前触れのない倦怠感、の、ような。

それ。それら、散乱する心の微細な惑い。開け放たれたままのドアからいつか忍び込んだ白い猫が、冬物を詰め込んだままに、床に放置されたダンボールに投げ棄てられた私のスウェットの上で憩っていた。

猫は、そこは

ここに

そここそわたしの存在するべき場所だ...

...と。

だれにも主張しないままに、ただ、みずからが曝すすべてをただ当たり前の、当然のこととして、その承認を誰にも求めない根拠のない自覚をだけ自分勝手に見い出して、曝されていたもの。私の目醒めに気付いた猫は声を立てて、彼女は自分の毛を舐めた。雌。身を振って、そして、私のかたわらに、私の腕にしがみついて寝ていたフエが目覚めて仕舞えば、猫は追い払われるに決まっていた。...大変よ。

ひどいわ。...もう、

なんてことなの！...猫がいるのよ。

...ねえ。なんて...

なんてことなのでしょう...と、あるいはこの世の惨事をその

全身で呪うかのように。...なぜ？

と、

どうして、

君は猫が

嫌いななの？

蝶ちょがいま、空の一番ひくいところ、地表すれすれを飛んでいました

だって、...と、

いつだったかフエは言った。一瞬、

何を言われたのかわからずに、まるで

未知な言語にでも唐突に触れて仕舞ったような顔をして、そして

想いあぐね、眉間に

皺を寄せ、自分自身では探し出しきれない言葉に

想い惑い、...猫は、

猫なのよ。

寝室のベッドの傍らに、フエは寝ていた。ふしだらなまでに赤裸々に苦悶を曝し、もはや私の体にしがみつきもしないで身を複雑にまげて、背を向け、...苦しいの。

ねえ、わかって。お願い。わたし苦しくて、

たまらないの。...

光あるうち光の中を歩め

...そんな。言葉もない苦悶を曝す。一日に、暇さえあれば一秒でもかたっぱしから眠らなければ、あるいは、より単純に言えば、単に惰眠をむさぼらなければ気がすまない彼女は、

そして、やがて私の魂は復活したのだろう

苦悶。

その、

曝されたままの褐色の素肌にもわずかの隈もなく、通風孔から差し込んだ光はその色彩を好き放題に目醒めさせて、やわらかい鬚りにくまどられたその素肌のつくりだすかすかな隆起と陥没の

いますよ

わたしは

Xâu...

Mèo...

...Anh à

Xâu...xâu...xâu...

...ってか、ごめん

聴こえた？

僕の声...ごめん

聴こえちゃった？

Tai sao

Em ghét mèo ?

Anh à...

Vi...

Tai sao ?

Vi là...

Mèo là

mèo

なにが？

ねえ

なにが？

苦しいの？

なにが？

中に、そして、フエはひとりで

寝ている。

私は瞬く。

横たわったまま

見あげられた眼差しの、空間のその

放置された真ん中に、

私は

しずかに血を流す。

光の中に、それだけが自分勝手に翳り、なにに対しても無関係に、もはや人体の形態をさえとどめられないままに、浮んだ空中にそのかたちを投げ棄てて、それ。

一度も見た記憶がない、あまりにも新鮮なその老人らしき形態の、それ、あるいはその崩れた、形態の残骸にすぎない単なる翳り。

開かれた穴ぼこのどこが

口で、どこが目で、どこが

鼻なのかは

知らない。色彩のない

翳りは

三つの穴ぼこからあざやかにすぎた

鮮血を

垂れ流すのだが、しずかに

流れ出す色彩。...美しい、と、

そう言ってやらなければ仕方がない。

色彩。どうしようもなく、ただ、その赤い色彩の、色彩そのものの鮮度をしか感じさせない、それ。...私。それは、あるいは、私の魂。...光。

振り返れば、月は傾いた

光がすべてのものを孕みこんで、私たちのすべてをあまねく救済しようとしていた。私は、その、いつでもあふれかえていた光にさえ倦んで、神々の

光。

寝返りを打っても

離れはしないその

救済の

光の無残な

横溢に、

もはや

最初から遁れ獲るすべはない。私は

ぼくは

見た

夢の中に無邪気に

笑ったきみを

いつだったか

時には

むしろ、ひとりで

月の

翳りの中で

わたしは、いつか

花を見る

それ

ブーゲンビリア

風に揺れる

無数のむらさき色に近い紅の花々を

咲き乱れさせる、その

それ

ブーゲンビリア

色彩。どうしようもなく、ただ、その赤い色彩の、色彩そのものの鮮度をしか感じさせない、それ。...私。それは、あるいは、私の魂。...光。

振り返れば、月は傾いた

光がすべてのものを孕みこんで、私たちのすべてをあまねく救済しようとしていた。私は、その、いつでもあふれかえていた光にさえ倦んで、神々の

こんにちは

はい

そうです

おはよう

いいえ

違います

私は犬ではありません

こんばんは

フエの
髪をなげた。私には、決して
共有することの出来ないフエの
眠り。彼女に固有の。彼女の、
彼女のためだけの、
そして、
意識されない限り、彼女自身には決して
知られることのない、彼女の
眠り。やがて
そらされた眼差しの捉えない至近距離の空間に、
私が血を
流し続けていることは、すでに
知っている。私、あるいは、
フエ、
私たち、それ。
色彩をなくした騒りは、
私たちを見つめ続けた。その、
なにものをも
見い出せはしない眼差しのうちに。私は
その髪をなげていた。眠るフエのかたわらに座りこんで。その
指先が
フエの頬にふれた瞬間に、
フエはなじるような音声を、喉に
立てた。...やめて。
まだ、
私は
眠っているのよ。
...と、
沈黙
ただ、容赦もない苦悶を曝し、一瞬でも早く、その
無際限な

おやすみ
あなたはサウジアラビア人ですか？
...じゃ
さよなら
わたしはパキスタン人です
元気？
いま、ひま？
大丈夫？
おひさしぶり
苦しいの？
きみは
なにが
苦しいの？
きみは
ここに
わたしは
ここに
言葉さえ
なく
なにを
見ているの？
なにを
見てるの？
何が
見えていたの？
きみの
眼差しの中には
沈黙を曝すしかないのだ
苦悶それ自体からの解放をだけ願っていることが、もはや彼女の存在理由にほかならない、そん

な気配をあからさまに全身に

...知ってる？

顔しながら。

昨日、シュレーディンガーの猫は、ひとりですでに

午前6時。空は

チベットで熊に咬みつこうとしたはずだった

すでにその

あくまでも

夜の明けのあざやかな崩壊の色彩を刻み獲ずに、もはや

海王星のダイヤモンドの海の中で

なしくずしの、昼間の時間へとしずかに

焼身自殺を図るその

空の色彩固有の時間に従って、

直前に

留めようもない雪崩れとしてその

雨が干上がった、木星の

色彩を

広大な砂漠地帯に

青く破壊させていくしかない悲惨さをだけ

最期の微笑を与えてやりながら

それは曝していたに違いない。いずれにせよ、昨日の朝、老人が死んだ。

...死と苦痛の翼がいつか、私の肩にふれた事など、すでに知っている

フエの、父方の祖父にあたる人間だった。九十歳を超えていた。正確な年齢など、もはや家族の
だれもが数えるのを忘れて仕舞っていた。長老の死は、穏かなものだったと家族の人間たちは、
そのだれもが言っていたらしかった。フエに。一匹の蚊が彼の身体に注ぎ込んだ出血熱の高熱と
、容赦のない身体破壊が、彼の長い生を終には破綻させた。病院に担ぎ込まれて無数の注射と点
滴だけを打たれながら、ほんの三日ばかりで老人は死んでいった。Vüヴーというその老人には、
私だって親しくしてはいた。

世界は、ひとつ

言葉も通じない異国の人間だからと言うわけではなくて、

ぼくらは、ひとつ

私には悲しいという心情もなかった。老人の死は、結局は

永遠に、ぼくらは

いつか

自由な空に羽撃くよ

当然のことにはすぎなかった。それは

無様な人間たちを殲滅したあとで

薄情なのか、世の中のどうしようもない道理を知っているということなのか。とはいえ、喪失感
のようなものに、フエが鮮明に襲われているに違いない事はたやすく見て取れた。

私は

もう

彼女を慰めた。昨日の夜に。いつもの愛し合う時間のまえにも、

なにも

その最中にさえも。

言わなくていいよ。もう

何の

しってるから。君に

言葉をかけたわけでも、何の

もう

仕草さをしたわけでさえなかったにしても。日本語学校の

君の口の中に、顎の骨格をへし折りそうなほどに

授業が終って、家に

いっぱい

帰ったとき、フエは

ブーゲンビリアの花々が、やがては肛門から

もう

突き出て仕舞ったほどに

会社から帰っていた。夜の

ぶち込まれて、花々が

九時半すぎ、開け放たれたままの

種子を撒き散らしていたことには、もう

シャッターをくぐると、

ふたつめの居間で洗濯機を回していて、目が

合った瞬間に、

言った。...死んだわ。

誰が？

おじいさん。

私を見つめる彼女の眼差しに、

あきらかに戸惑いがあった。一瞬呆気にとられて、そしてすぐさまそれを羞じた、...と。

そんな。...知っていたくせに。...と。もう

すでに。その、

彼がいつ

死ぬのかなど。そんなこと、と、私は、彼がどうやって死ぬのか、とっくに知っていたくせに。

その意識が、...すでに、と。かろうじて捉えた最期の風景さえも。...と、私は、もう、...と、

わめき散らす前に

知っているくせに、と、彼女を

せめて

あえて、なじる気にさえもならないで私は、

左右前後の確認くらいはしなければならない

つぶやく。

「おじいさん？」

...だれ？

ヴーさんよ。...わたしの、だいすきな...

そのとき、

私が何と言ったのか

わからない。あー...、と、そんな

音。

あ...

あ

あ

同意したのか、何なのか。なにを意味したのか、自分でも分からない音声を、私の喉は立てていて、...ね？

わたし

悲しいの

...ね？雪。

...思い出していた。

わたしたちのだけれども

認識していたに違いない

なに？

と

私の

心は

つぶやいた

あなたの肛門から生まれた海が、そのとき

昇った朝の太陽にやがて

さよならを言いました

いま

何時？...もう

起きなくちゃ

見えますか？

この

世界のすべて。あるいは

見て仕舞いましたか？

もう、その

眼差しで

Aaa.....aa.....a.....

あー...

あ...ーあ

あー...

Anh...

em

buôn

Tuyết

不意に、私は

思い出していたのだった。私が

見い出す私の

最期の風景。

...じゃ。さよなら。またね

雪が、そして

雪の降りしきる海を

見るのだった。私は

すでに、鮮明に

記憶していた。《破滅の日》の数年後の、世界の崩壊したあとの異常気象の3月に、ベトナム、ダナン市。この熱帯の

町を

お前、馬鹿？

不意に襲った寒波。...知っていた。在り獲ない雪が降ったその日に、もうこれで、...と、君をもしもやさしく抱き締めてあげられさえしたならば

僕は

人々は

その涙は流れなくて済んだのか？

君の哀れな家畜

想っていたのかもしれない。世界は、もう

...と。壊れちゃったな。

...もう。

こんなところに

もう

雪が降っちゃうなんて。

すべて

異常な、在り獲ない

終っちゃったな

容赦もない寒波。とはいえ、

すでに

氷河期をさえ

いつか

かつて

もう

経験したこの数億年の土壌の中では、なにも、決して絶対に起こり獲もしないことなどでは在り獲なかった。ほんのちいさな事故にすぎなかったに違いない。ほんの数万年地表にしがみついたにすぎない人間たちにとっては残酷な、最期の決定的な脅威にほかならかなかつたには違いない。私を追った彼らから逃げ出して、ミーケー・ビーチにまでやっと辿り着いた私は、その、もはやこれ以上は逃げようもない海岸線をしばらく彷徨って、やがては倒れこむしかなかった。高熱が、もはや私の自由を奪った。終に。

奪われるのだった。すでに

奪われようとし、

た、...る、て。

する。

し、...

て、する。

た。と、あるいは、私は留保なき犯罪者だった。あの少女を殺して仕舞ったのだから。あるいは、世界をさえも。人々は、決して私を許しはしないはずだった。いつか巢食った新手の出血熱さえも、もはや私の身体を破壊することにだけ、その営みの、自分にもたらされた時間のすべてを費やしていた。宿り主が死んで仕舞えば、それら小さな生命体など、為すすべもなく雪の中に自壊していくしかないというのに。

なぜ、だれもが、そしてなにもかにもが私を殺そうとしているのだろう？

雪は ...あ
昨日の朝から ...綺麗
降り止まなかった。体中が 君が、不意に
冷えていた。 僕に微笑んだ、その奇跡の
瞬間を
寒さによるふるえなのか、出血熱の
もはや俺、永遠にメモリー完了
発熱によるふるえなのか、もはや私には判断さえ出来なかった。不意に、思った。...見ろよ。
フエに。

Nhinh đi
傍らには、もはやいないフエに。...見なよ。
Tuyết
これが雪だよ。
rơi
翳る。
ở
見たがってたろ？
dây
眼差しのわずかな先に。
Tuyết
これが、...
em
その少女。
muốn
雪だよ。

nhìn
色彩をなくした少女の残骸が。あった。そのとき、私の眼差しの中に。雪が覆った砂浜に横たわ
った、疲れ果てた私に覆い被さるように、その身体を左側に奇妙にゆがめて、振るように、そ
して、彼女によって流されるもの。左側に、水平に、どこまでも流されていく彼女の
好き
血。
好き
夕オ Thảo、彼女は
好きすぎてもう時間さえ
確かに、

止まっちゃったの
美しかった。私が殺して仕舞った少女。空は白かった。さまざまな在り様のうちに白濁して、い
くつもかさなりあった雲の群れがたがいなときに雪崩れさえおこしてその崩壊を曝しながら、あ
ざやかに、そして上空に存在したいくつもの気流の層が無造作に、それら層を成す雲のそれぞれ
に固有の速度を与えて、すでに、みずからの速度のままに、動き、ゆがみ、崩れ、結ばれ、流れ
、掻き消え、色彩。
...我等に生き残り獲る道を教えよ
眼差しを染めた白というほかにすべのない色彩の中に、目醒めた翳りの色彩の喪失と、相反し
た鮮血のあざやかさに眼さえも眩んだ気がした。...悲しい。

Em buồn
フエは言った。
Anh...
...ねえ。
Tại sao em
どうして？
buồn ?
わたし、どうして
Tại sao ?
悲しいの?...と、
あるいは君の葬儀のとき、私はむしろ青空に薔薇を投げつけよう
「悲しいです。」...と。
ふざけきった青空を眼醒めさせる為に

言った

かなしじえっ

フエの眼差しはむしろ、悲しげないかなる色彩をさえ帯びることもなく私を見つめていたにすぎなかった。媚を含んで微笑まれたかのように。その祖父の死を私に告げた瞬間には。彼女は、あまりにも悲しいのだった。私の眼差しが彼女の眼差しにふれていた。その黒眼は、かすかにふるえ続けていた。過剰な潤み、涙に近い、そんな潤みなど一切うかべさせずに、それでもフエは泣いているのだろうか、と、私は思った。...あ、と。

声になりそうになる寸前のわずかな一瞬の、そんな、それ。つまりはそんな刹那、あまりにも不意に。

間歇的な、ときに想い出したように顕れた黒眼のふるえ。私は

語り獲ないものは

まばたき、私の眼差しは

ただ

彼女を慰める。私が

沈黙それ自体が弔うがままに

彼女を

任せよ

慰めている事は、彼女だって知っている。...ね？

と、ただ、そんな、意味を結ばない音声の断片が、その眼差しに浮んでいた。

...ね。

見よ

そのとき、

いずこを？

でしょ？

我らの罪を

雪が降る朝の、夕オ。私に首を絞められながら。その最期のときに。

葉を、理沙を、彼女たちをさえ殺しはしなかったのに。いかに感情がもつれようとも。あるいは、理沙はいっそのこと殺されて仕舞うことをさえ願っていたかも知れなかったにもかかわらず、

...てか

なぜ、

...さ

君を

...ねえ

殺して仕舞うのだろう、と、

空が

むしろおびえていた私を

晴れています

慰めていたに違いなかった。夕オは。その

今日も

眼差しに

こんなにも

浮んだだけの色彩で。...ね？

時には、あざやかに

フエが瞬く。その瞬間に、潤った気配さえも曝していなかったまぶたから、一気に涙は零れ落ちていた。想い残すことなくもはや、滂沱の涙、と、

あふれ出る

そう呼んでやるべき容赦もない大量の

熱い涙を

涙が。その

拭い去るのは、だれ？

温度さえも、それは

あなただったのか。あるいは

私の

むしろ

眼差しの中に

私でこそあったのか

感じさせて、慰める。私は、眼をそらせもしない眼差しの中に、そして、私はかけてやるべき言葉を探そうとはするものの、そのもの、なにも見つかりはしないことなどすでに知っている

。寝室のドアを開けると、右手のほう、ふたつめの居間のほうから漏れ込んだ朝の光が差し込んで、薄い明るさの中に空間はおぼろげにその、それぞれの物体の形態を曝していた。朝の光。違和

感があった。フエは未だに寝ていて、私が起きたばかりなのなら、空間は暗くてあるべきだった。シャッターを開けるものなど、私とフエ以外にはだれもないはずなのだから。居間のシャッターを開けたものは誰なのか。息を忍ばせるほどでもない。そのまま居間の方に行くと、なんの気もなくソファに座り込んでいた彼は、自分の部屋から引っ張り出してきたスーツを着こんで、履きなれないソックスに足を通していた。アンAnh、と、後れてその名を思い出した私に、彼は一度だけ視線を投げてみせたが、姉とはすこしも似ていない彼。かすかに微笑み、なにか、ベトナム人のその男はベトナム語で言った。私には聴き取れもせず、彼が何を言ったかは分かっている。服くらい着ろよ、と、そう言ったに違いなかった。私はいつものように、素肌を曝したままだった。アン、...妹も母も父も亡くしたフエの、たったひとりの弟。彼はそのままにこりともせず、ひとりで自分勝手に身支度を調べて、葬儀。

...確かに。

フエと私も、これからあの老人のところに行かなければならないのだった。むしろ、時間は遅れていた。どうせ、フエの身支度は手間取るのだから。

私は自分の体を隠すこともなく立ったまま、アンの身支度を見遣り、アンはコロンを振りかければすぐに、シャッターを出て行く。その瞬間に、振り向いて、

君にあげるよ

私に

いつか

屈託もなく微笑み、一度だけ

ぼくの命で作った

手を

薔薇の造花のイミテーションを

振った。表に止めていたバイクが噴かされて、アンは一足さきに祖父ヴーの許に行く。姉が連れ込んだ、素っ裸で自分の家のなかを好き勝手にぶらついている外国人のふしだらさをアンがどう想ったかは知らない。私はひとりで鼻に、声を

ひょっとしら

立てて

ぼくは、生まれ変わったら

笑った。

たんぼぼになるかもね

シャワーを浴びた後で、そのまま

きみに踏みつけられて、殺されたその無残を極めた

正面の

可憐で黄色いちいさな花の残骸に

木戸を引き開ける。晴れていた。雲さえない晴れた色彩の停滞する中に、風が作った翳りのゆらぎだけが地面に揺らぐ。上方の風にふれたココナッツの葉の。

嘘を嫌悪する人ほど

ゆらめく

むしろ

淡い翳り。

嘘つきが多い

ブーゲンビリアは、咲き乱れていることしか知らない。

ほら

咲いていた。その樹木の下に埋められたミーの死んだ肉体を、あるいは

ね

養分のひとつとしてでも吸い上げながら？あるいは、

ほうら

一週間前の彼女の新鮮なそれが、自然の無数の

ね

生命体によって、そこまで解体されているものなのかどうか、私には

ほうら

わからない。

ほら

せめて

ね

こんな日にでも、吊ってやることくらい、必要だった気がした。

どうやって？

想った。吊うとはいったい、なんなのか。

語れ

すべて神話とは

むらさき色に近いあざやかな紅彩の、濃い咲き乱れた色彩の花々の下、その

人々よ。そして

見もしなかった事件をまざまざと

土の中で、

君の固有の

語ってみせることが出来た或る稀有な人の残した

身体が

屈辱を

あまりにも貴重な

腐り落ちようとも

君の

残滓にすぎない。だから

解体されようとも

固有の

ぼくは

なにをしようとも、もはやそれは

悔恨を

君を不意に抱き締めた。時に

単なる

君の

君の心を傷付けて仕舞っても

肉体の

固有の

残骸に過ぎない。たんぱく質の集合体。魂は...それら、無際限に転生を繰り返すそれらはすでに不在だった。何を弔えばいいのだろうか？仮に転生などなにもなく、ただ滅びるにすぎなかったとしても。あるいは神の許、天国に召されたとしても。因果の果てに地獄に堕ちたとしても。煉獄に留まって、ただ最期の審判の裁きのときを待っていたとしても。それでなければ尊い解脱の果ての仏の世界のどこかで、蓮の花の上に不意に目醒めて戸惑っていたとしても、それともいわゆる霊体になって地上に留まり、暗い恨みの醒めやらない持続のなかに、その存在を焼かれながらたたずんで、ただひたすらに、だれかを呪い憎んでいたとしても、あるいはいずれにしてもなんにしても、魂、それがすでに、もはや、あの在りし日のミーと同一では在り獲ない変化を経験して、その差異においてしかもはや在り獲ないのならば、

僕は

だれも、

翼

あの

君を

ミーを

自由な空に

吊ることなど

連れて行ってあげるよ

できはしないはずだった。いかにしても。不在のものを不在のものそれ自身のために吊ることなどできない。ならばなぜ、私たちは死者を弔うのか。その死者自身に対しては、弔いなど一切無効な、単なる弔うものの自己満足に他ならないなど、誰の目にもすでに明らかであるにもかかわらず。人々は、なぜ、墓標を

...バカにするな

地に

ぼくは

穿ち続けなければならないのか。無数に、

かつて、立派な

死んだものの

蛆虫だった

頭数の分だけ。その下の留保なき不在など、いかにしても論理的に当たり前であるにほかならないにもかかわらず。

あれ？

私の

きみ

未だに

だれ？

水滴を含んだままの素肌が、庭のかすかな風に、至近距離に吹きかけられたような涼気を感じていた。あの日、町の住人たちに買収された《盗賊たち》は、ミーをかわるがわるに強姦して、その肉体を殴打し、体中を破壊したあとで、想うがままに、そして彼らは自分が痛めつけているミ

一がすでに死んで仕舞ったことにさえなかなか気付かないまま、その、もはや自分勝手なパーティの情性に過ぎない暴力を加え続けてさえた。いつ、ミーが事切れたのか、そんなことは、その惨状を眼差しのもとに見つめ続けていた私さえ、鮮明には気付き獲はしなかった。いつか、私の眼差しはすでに彼が、あるいは彼女が、すでにこの世には生存してはいないことに気付いていた。もはや、ぴくりとも、意識をもっては、あるいは意志のかすかな残存をでも曝しては、動こうとはしない単なる筋肉痙攣を激しく繰り返すだけのミーの四肢に。上に

手を差し伸べよう

すみません

乗った男のひとりに、

君に

天国行きの

なぶられるがままに、その

なぜなら

新幹線の

壊れて仕舞った体躯を揺らして、剃りあげられた

君は

指定席、できれば

ミー髪の毛。まるで、

まさに

喫煙席を

何かの刑罰に処された徒刑囚の末路が曝されていたようにさえ、そして

美しい。在り獲ないほどに、いま

一億五千の五百乗枚

私の

君は

いただけますか？

眼差しは

美しい。ただ

せめて

ミーの亡骸を

ひたすらに

直行便をお願いします

見つめていた。

《盗賊たち》のだれかが、スマホから、ハウス系のダンスミュージックにアレンジされた、この国の伝統歌謡を垂れ流していた。踊って見せていた。彼らが焦がれていたものが、いま、彼らの手の内にあったのは事実だった。彼らはそれを破壊した。命ぜられたままに。私は気付いていた。彼らは、最後に、その焦がれていたものに、終に、手を、ようやくにして、あるいは、とうとうふれ獲たのだった。ミーはもはや留保なく、

天国に墮ちろ

彼らのものだった。彼らは、

地獄に駆け上れ

ミーを我が物にした歓喜につつまれ、わなないた歓呼に全身を装われているに違いなかった。たとえ彼らがそれぞれに意図もなく曝してしまった一瞬の沈黙が、すべて偶然かさなり合って不意に、容赦なく、空間のすべてが沈黙に墮ちた一瞬が、...と。

その刹那にあってさえも。それは間違いではなかった。彼らの罵るような嬌声と、適当に流され続ける音楽と、ときにささやかれる声すらも、それら、無数の音響が連なって、響き渡った音響、単なる轟音の喜びあふれかえった無骨な塊りにしか過ぎなかった、その...それ。すくなくとも、それは、この、それらが聴き取られた、私。この、私の、それ。この、耳...その中では

。私に何度目かに気付いた背の低い肥満しかけた男が、ブーゲンピリアの木陰に立って笑いながら、私に手を振っていた。...どう？

私の眼差しは、もう

元気かい？

悲しみになど振り向かない

背後で、彼らの立てる夥しい物音の群れに眼を醒ましたフエは立ち尽くして、...知っていた。私たちは、ミーがそうなることなど。いくつもの、なんども繰り返して見た夢の中で。その鮮明な兆しの中で。自分の死と、宿命をさえも。生まれ変わった後の世のあらましさえも。すべて。フエも、知らないわけがなかった。なぜなら、彼女は、...あるいは、私は。言葉を失ったままフエは、そして、彼女を振り向き見た私に彼女は言った。

...どうして？

と。彼女は、そしてもはやフエはただ

疲れ果てた表情をだけその

眼差しいっぱい

曝して。

私は

自分の

指先で、頬に

張り付いている私の、なにかに駆られたような

微笑をなげた。私は微笑み続けていた。ときに、不意に

失笑の音をさえ唇と鼻に漏らしながら。

フエの眼差しは、私をとがめだてさせせずに、いつか、

悲しげな、なにをも喜んではない微笑をこぼれさせて、

行って来なさいよ。...と。

ささやく。

「あなたも、彼らと遊んできなさいよ。」

彼女は。言葉もなく、その

悔恨の灼熱の涙だけがこの俺の頬を伝うのだ

眼差しの気配のうちに。

私たちは見つめあい、おたがいに、言葉を失ったわけでもなくそれぞれに沈黙し、背後で、誰かが声を上げながら戯れに、わざと下手糞にしたダンスを踊り始めたのは知っている。

その日、

戸締りはしなかった。彼らに

任せた。私たちは

寝室に引き籠もり、私は

フエの体臭をかぐ。髪の毛の匂いを、...悲しい？

フエが、

つぶやく。私の...ねえ？

耳元に、

声を立てて。そして

覆い被さった彼女の身体の、押し付けられる皮膚が曝す汗ばんだ触感を、肌がふれあった全面に感じ取って私は、

花々。

見い出す。何度目かに。

私たちは、...花々。

Tai sao ?

あなたはなぜ、

You can smailin'

笑ってるの？

たのしいの？

いま

しあわせなの？

あなたは

俺がなぜ屈辱に塗れているのか、その理由を

元気かい？

Khỏe không ?

元気かい？

ほら、いま

みんなは楽しい

この

世界の、その

すべての場所で

あなた...

ね？

Anh

buồn nhĩ ?

...老眼鏡が必要でしたか？

あなたの役立たずで

使い物にもならないふざけた二つの

出来損ないの眼に
愛し合う。

ペンローズ階段を昇らせる為には
花。...ブーゲンビリア。
フエが私の指先をくわえ込み、それは、そして。
...咲き乱れる花々。

見えますか？
私が彼女の頬をなぜようとして差し出した左の人差し指。
匂い立つ花の色、その
瞬く。

色彩が
撒き散らされた花々が停滞していた。空間の中に。はるか向こうにまでも、どこまでも、ただひたすらに無際限に。もはや限度などありはしないと宣告し、冷酷に言い放ったようなそれら、花々の拡がり。無造作な、その、もはや海のような花々の群れの拡がり、浮んだひとりの少女が
私の口から蔓が伸びてきて
指先を伸ばした。

鼻の先に咲いてしまったその花の色彩こそは
上の方に。
まさに純白
仰向けに

かつてチマブーエさえもが嫉妬したに違いない
その身を浮かべた花々の上、見上げられたそこにはなにもありはしないというのに。見あげれば、どこまでも拡がり、どこまでも延びていく空間の無窮だけが、その眼差しのうちに曝されていることなど、私はすでに知っていた。

空間を捻じ曲げろ、と
見たこともない少女が
アイザック・ニュートンがささやく
天を

そんな八月の桜
指差す。...彼女は、美しいのだろう？果てもない無窮の延長。...美しい？存在の限界に、終には...きみは。ふれ獲ない永遠の拡がり。...ねえ。
と、私が微笑みながら、話しかけて仕舞いそうになるのはなぜだったのだろう？その少女と、終に出会ったあとで、私は彼女を穢して、破壊し、殺して仕舞うというのに。異常な、気圧配置の下で、降り止まない熱帯の雪の日に。なぜ、彼女は私を見つめようともせず、なにも見えはしない上方にだけ、その眼差しを棄て置いて仕舞うのだろう。...ここだよ。
と。

ほら
やさしい
僕は、と。想う。

咲いています
光に
ここにいるよ。
花が

つつまれながら
そんな必要は
ここにも

ぼくたちは
ない。ささやきかける必要など。彼女に。花々に素肌を曝した少女はすでに知っていた。私の存在も、何もかも。いまだに、その眼差しに私が彼女に曝した姿を見出しもしないままに。つぶやく。...悲しい？
泣かないで

Anh
声を立てて。そして
もう
buồn nhỉ？

フエは
いとしい人よ
私の耳元に唇をつけて、そして、舌はふれて、やがて、歯が軽く咬んでみせれば、聴こえた。フエが、私の耳元に不意に立てて仕舞った短い笑い声の、その吐息を吹きかけてすぐに羞じた音。息遣い。音になる以前の、かすかな気配。感じられていたフエの体内の心細い触感に、あるいは、そして私のそれはかならずしも何かの興味を感じていたわけでもなく、生き物の惰性としての

硬さをだけかろうじて獲得していた。フエを抱きながら、私は彼女を想う。ブーゲンビリアの樹木に凭れて、《盗賊たち》の饗宴を見つめ続けていたあの女、ミーの女だった、その、色づいた、肥満しかけた豊満な女は、無様なほどに露出のきつい悪趣味なポルノ・ダンサーのそれのような青いドレスに身をつつんだまま、その眼差しのなかに何を見ていたのだろうか。

眼の前で、崩壊させられていく自分の愛した...愛する...て、いる。て、...いた?...る、その男の姿に。あるいは、彼女固有の条件はそのほかの《盗賊たち》と同じだったには違いない。彼らだって、みんなミーを愛していたのだから。啞然として立ちつくしていた私の存在に、最初に気付いたのはその女だった。

...あら

なにかに耳元で呼ばれたかのように、不意に

ごめんなさい

顔を上げて、自然、見あげられた眼差しに、彼女は

お化粧ならもうすこしで

立ちつくした私を

終わるところよ

捉えて、私が

...綺麗でしょ？

想わず噴き出して笑って仕舞ったのをさえ見ていたに違いなかった。その表情を

...やだ

人々の叫喚の中に時に

派手な笑顔に崩しながら、彼女は

見つめちゃやだ

私は彼等の固有の

煽っていた。無言のうちに、

溶けちゃうよ

それぞれの孤独と孤立を感じ取るのだった

人々、周囲に散らばる高揚した《盗賊たち》、あるいは、高揚してもはや単なるひとつのでたらめな塊りにさえなかつた気配の、ただただ部厚いだけの束なり、その発熱そのものを。...もっと。

愛して

むしろ、ぼくの

と、もっと。...と。

ねえ、もっと。わたしだけを

眼差しの中で

もっとしなさい、と。

命尽きるまで

君は花

ね？

愛して下さらない？

綺麗に咲いた僕だけの

女が屈託もなく笑い声を立て、その眼差しに邪気はない。もっと。

そんなに見つめたら

...と、そう...

頭の中に

...ほら。

肛門の穴が開いちゃうよ

もっと。激しい苦痛をいま、まさに、彼に、彼にだけ、彼にこそ、もっとあげなさいよ。そいつに。もっと。凄惨な痛み、もっと、残酷な破壊、もっと。決定的な屈辱と汚辱。そして、もっと、なんども殺してあげなさい。なんども、もっと。なんども、気が遠くなるほどに、もっと、なんども。

...いい？

なんども

ね、

繰り返し

...もっとよ。

僕たちは家畜のようにケツを振って僕等の至高の愛をささやく

私を見出した彼女の眼差しが、...でしょ？

つぶやく。その、否定し難く鮮明な気配として。...じゃない？

彼女は、そのとき繰り返され続けている饗宴のさなかに、彼女の最愛のミーへの愛が終に完成したことに目舞いさえたに違いない。ミーの崩壊は、とりもなおさず彼女たちの愛の時間の終焉で、つまりは終に完成して仕舞ったのだった。ふたりの愛し合った事実そのもの、その固有の経験そのものが、樹木にもたれたまま、突っ立って、無意味に息を切らせさえしながら、彼女の眼差

しには明らかな高揚と、醒めた嘲笑とがあった。だれもが笑っていた。好き放題に声を立てて。
嘲笑ってやるしかなかった。何を？

ミーを？

ほら

それをも含めて。その

花が咲く

眼差しが捉え、皮膚が感じ取り、

ぼくたちが

耳にふれるものの、それら

愛した、その

ことごとくのすべてに。

花が

たとえ沈黙していてさえも捲き起こる哄笑の無際限な連なりが、ずっと、耳に木魂し続けている
気がした。...おもしろい？

Vui không ?

背後に言ったフエの

俺の存在とはむしろ、余りにも容赦のない苦痛そのものに他ならない

声を、私は

血を流す

振り向きはしなかった。その、不意に

俺は

漏らした失笑にすぎない声に、私は彼女の終に微笑んで仕舞った顔を見たいとは思わなかった。
もはや殺されていくミーは悲鳴さえ立て獲ない。

僕たちはいつか、鳥の翼を獲得するだろう

寝室に入ると、フエは眼を醒ましていた。なにも見出しそうとはせずに、起きようとも、もう一
度眠りつこうともせずに、ただ開かれているだけの眼差しは、私を見つめ返そうとしもしない。
言葉をかけようとして、

ねえ

なにもかけるべき言葉を想いつかずに、私は

なにが

その傍らに座り、フエの額を

見えますか？

なぜだ。...服を着て。

フエは

わたしは

言った。思い出したように。そして、

あなたを

私の指先が

見えています

額にふれることこそが目醒めのときの合図だったかのように、フエは身を起こすと、ハンガーを
掻き分けて、白いワイシャツを探し出し、どこまでも褐色の素肌を曝した自分の体にあてて微
笑む。...ほら。

Ông Vũ

今日はおじいさんに会いに行かなくちゃね。

chết

老人の死に顔を

rồi

確認しに。フエの褐色の肌に、寄り添うように朝のやさしい日が差して、季節は日本で言えば春
の終わり。五月の初頭。ダナン市は亜熱帯の町だから、温帯のような四季はない。春もなければ
秋もなく、長い夏と、テトと呼ばれる旧正月、太陰暦の元旦を迎えるまでの三ヶ月ばかり、一日
中激しい、あるいはしめやかな雨がこの地方に降り注ぐ。時には台風の雨をも含めて。基本的
には弱々しい雨が一日中降り、時に南部のスコールに近い土砂降りが長時間降り注ぐ。稀にこの地
に届く台風は、はるか沖合いのフィリピンですでに消耗したあとなので、日本のそれに比べれば
、いちじるしい発育不足を曝した幼児程度のものか、老いさらばえた残骸状態のものであるかに
すぎない。

そして、雨季の間、気温は冷え込む。とはいえ、観光地たるここでは、外国人旅行者たちは相変
わらずのリゾート・ファッションを曝すので、そのタンクトップやキャミソールは、明らかに異
常なものとして現地の人々の眼には映った。熱帯のようにはっきりと雨期と乾期に分かたれてい
るわけでもなく、四季さえもないこのあたりの五月を、いったい、どう呼べばいいのだろう。亜
熱帯とは、たしかに、熱帯と温帯とのグラデーションが刻むしかなかった、言葉にしづらい過渡
のなにかなのかも知れなかった。

シャワールームにそのまま消えていくフエの、やわらかい鬘を添わした背中を見守った。もはや

、悲しみなどすこしのそぶりにさえ見せなかった。昨日の夜、泣き顔さえつくらずに、泣き声さえあげないままに、涙をただあふれ流させているフエを見かねて、私が終に彼女を抱きしめたときに、フエはそれには抗いもしない代わりに、縋りさえもしないで、ただ、そのまま泣き続けて、ソファの上、私に抱きかかえられながら、やがて、彼女は思い出したように...ねえ。

言った。

「知ってる？」

何を？

「仏陀になると、どうなると想う？」

身を振って、フエは

不意に私を見上げて、そして見つめたのだが、

...知ってる？

その眼差しはいつか涙を流すことさえ忘れていた。

「三つ眼の眼が開くのよ。」

...ほら。

「ここに。」

言って、自分の額を指さしたとき、

いまや凍てついたところ
フエの眼差しは明らかな恍惚と、隠しようもない恐怖とを曝していた。...宗教。たしかに、宗教としての、宗教以外のなにものでもない、ためらいもなく容赦もなく留保もない恐れと憧れが、その眼差しにはあからさまに匂った。私は

眼をそむけることもできずにフエを

見つめてやり、微笑む。私は、そして

それしか、私にできることなどなにもない。

あきらかに、フエは私ではない。私はフエではなく、それぞれに獲得された固有の眼差しの中に、それぞれのすべてを見つめるしかないのだった。

フエは、泣きやんでなどいないのだろう。涙は、止まってはいないのだろう。ただ、涙は流されることを、フエに、いつか忘れられて仕舞っていたにすぎないに違いない。そんな実感が、私の眼差しの中にはあった。みつめの眼、確かに、そうなのかもしれない。現在、

過去、

未来

すべての記憶を取り戻して仕舞えば、それは確かにみつめの眼が、額にこじ開けられたに他ならないのかも知れない。

その、私を見つめ続ける、かすかな熱狂を曝したふたつの眼差しを、すでに持て余して仕舞っていた私が、フエの頬に口付けるのにフエは抗いはしない。もはや、唇にそのまま受け止めるわけでもなく頬に、私の唇の触感をだけ感じてあの日の朝、私たちはミーを埋葬してやった。

朝の日差しが、ぼくは好き
夜の《盗賊たち》の、いつ果てるともなかった饗宴がいつか終って、その早朝に、彼らが街に火を放って歩いたそのばかばかしい騒ぎも落ち着いた午前九時に庭先には、だれにももはや忘れられたミーの血と泥に塗れた亡骸が、しずかに、なににも訴えかけることも、訴えるべきなものをもはや持たずに、破壊された、空っぽの身体としてだけ自らを庭先に曝して、それを輝かせるのはただ朝のあざやかな曇りみない光。救急車と消防の、あるいは警官たちの群れの、さらには焼け出された人々の悲痛な喚き声と罵り声が、数枚のコンクリート壁の向こう、町の隣のブロックに渦巻いて、その庭にまで聴こえていた。学校にも、会社にもすでに、今日は休むと伝えて仕舞ったあとだった。火事のことをすでに聴き知っていたけれども、それどころではないとむしろ私たちの身の上を案じた。私たちには、なんの被害もなかった。あるとすれば庭先に奪われた

Do you

know

the third eye

of the

Buddha

見えますか？

ぼくの

こころ

あなたを愛した

ぼくの

いまや凍てついたところ

われらは主の

軍隊に他ならない

わたしの歯は空に舞上がった鳥どもの肋骨を砕いた

昔、ぼくは花だった

やがて僕は星になる。なぜなら

ぼくは今狼だから

生命の亡骸が転がっているというだけで、その生命にしても、私たちに固有の生命でもなければ、私たちの所有でもなんでもなかった。結局は、なにも

愛は

そのとき

奪われは

惜しみなく

僕等を愛が

しなかったのだった。

奪う

引き裂いた

あるいは、私とフエは、唐突に与えられたミーの死と言う事実、与えられたその死体に、戸惑うしかなかった。《盗賊たち》にしてもそうだったに違いない。彼らはミーを与えられ、終に自分たちのものにしたのだった。何も奪われはしなかった。なにも、だれも、町の間人たちにさえも、すでに新たな悲惨が与えられていた。なにも、だれも、奪われはしなかった。叩き付けるようにして、私たちはみんな、それまで見たことも、体験したこともなかった風景を一気に、それぞれの眼差しのうちに与えられていたのだった。死者は、ただ、その死に絶えたさまを無防備に曝していた。燃え上った煙の空気を焦がした名残りのいまだに匂う、焼け出された路上にさえも。...埋葬してあげましょう。

そう、フエの眼差しは言っていた。庭先に、視線を投げた後に、彼女の背後にたたずんでいた私をいきなり振り向き見て、

...ね？

そうするしかなかった。警察に、ミーの亡骸を手渡してやる気にはなれなかった。バイクを飛ばして、クイ Quí の家にスコップを借りに行くのは私の仕事だった。なにかの適当な理由をつけるのは、フエの仕事だった。クイの父親たる在りし日の最期の数日を過ごしていたヴーに、フエは電話をした。庭の掃除でもするのよとでも言ったのだろうか。邪気もなく笑い声を立てながら。こんな大火事の日に。バイクにまたがった後、何の気なしにフエに手を降ってやると、フエは不意に声を立てて笑いながら、それがめったにないイベントであるかのように手を振って、投げキスをいくつか送ってよこすフエは、ただ、笑う。あふれ出る幸せをさえ、不意に、彼女は感じ取って仕舞ったかのように。そんなささいな一瞬の仕草さにさえも。...ね？

庭に出した数メートルの先に、

...好き

仰向けに、傷だからけの素肌を曝した

あなたが

ミーの死体が、いまだに眼を見開き、口を「あ」のかたちに

...ね？

こじ開けたままかたまって、日差しに

その目が

ふれる。速やかですばしこい蠅が、すでに

好き

たかり始めていた。

わたしを

町は匂う。生きたままの

見つめるあなたの

人間をさえ含めて、

その

さまざまなものを焼き尽くして仕舞った町は、

好き

焼け爛れて崩壊し、それら

わたしに

残骸の群れは、

そっと

廃墟とさえ言獲ない。生き生きとした、

口付ける

残骸であるそれらの

想わせぶりなあなたの

現在形を、

その

むしろあざやかすぎるがまでに

好き

曝けだし、ただ

あなたを好きな

匂い立たせる。

わたしが

悲惨な

好き

風景、と、まさにそう言獲た。事実、町のその焼け堕ちた二百メートル四方のブロックだけが、そこでだけ熾烈な内戦がなにかでも起こったような、どうしようもなくすさんだ風景をだけ掲げていた。無数の焼死体が路上に曝された。救急車の類が数台群れ、警官がバイクを路上に駐車し、ほぼ通行止めの状態の中、交通規制もない。逃げ延びた人々が口々に手当たり次第の誰かにつめよって、なじり、ののしり、非議を訴え、讒訴し、いずれにせよ、まるで口を閉ざせば死んで仕舞うのだとでも言いたげに、言葉をおさめやまずにわめき続けて、物見の人々は好き勝手に周囲に大量にあふれた。路上に。車とバイクの狭間に。焼け爛れた残骸の群れに。戸惑う負傷者。腰を曲げた老人が煤塗れの体で地を這うように歩く。ゆっくりと。乳児を抱えた三十女がなぜか、自分が鼻水をたらしていることに気付かない。私は彼らをかいくぐってバイクを走らせ、その二十キロもない速度の中に、燃え落ちたあらゆるものたてた臭気が広がっていたことに後れて、ふたたび、気付く。路面に並べられた野晒しの焼死体に、いく人かの人々は群がって歎きの声をあげ、喚き散らして、もはや收拾などつきようもない。警官が私を振り返り見て、ただ、忌々しげな眼差しを投げ棄てた。ミーが殺して仕舞ったタンThanhの母親、ハンHanhが路上の真ん中に立ちつくして、口を半開きにしたまま呆然としていた。知性の消滅した眼差し。なにかの疾患を抱えた人間の知性さえもが、もはや、彼女の眼差しには感じられない。その片手に、幼児のための青いシャツが、煤と黒煙にうす穢れたままに握り締められていた。あるいは眼の前で、燃え上がる孫の姿を見たのかもしれない。

それは、燃え上りながら泣き叫んだらうか？

コンクリートの家屋は、倒壊はしないままに真っ黒く染まった残骸としての姿だけを無防備に曝し、中に入った消防の人間が焼死体を運び出すたびに上げられた怒号が拡散していく。駆け寄る人々が両手を振り回して、臭気。満ち溢れていたのは夥しい臭気の充満。ガソリンの残り香。そして、あるいは、焼けて仕舞った人体が立てる、為すすべもない臭気。鼻は馴れてはなんどもふたたび、臭気に気付く。鼻の奥に吐き気がした。眼をそらしようもないままに、通りを抜けると、人々の集団は一気に疎らになった。いまだに匂いは鼻を抜けない。

サイレンが鳴り、声の群れが無造作に飛び散ってかさなる。叫喚の風景。人の疎らになった通りでは、あたりさわりのない、どこあに緊張を曝した日常がそれなりに繰り広げられていた。カフェは店を開け、物見の群れから離れて来た近所の人間が集った。歎かわしげに言葉をかさねあい、ときに邪気もない笑い声さえも立つ。

ヴーの家は、すぐ近くだった。

角を曲がって、そして数百メートル直進した角の、主幹道路に面したヴーの家にまで行くと、もはや完全な日常がそこに広がっていた。町の中の、あくまでも局所的な悲劇。その悲劇の息吹きはここにまでは襲って来ていない。法律家にして、町の名士たるクイは、これからまた忙しくなるのかも知れない。一つの集落が、焼け落ちて仕舞ったのだった。顔の半分を、カンボジア戦役で失って仕舞ったクイは、そのままその半分崩れた顔を曝したままに、一階に開いた氷屋兼野晒しカフェの軒先に座り、友人たちと話しこんでいた。

いつもと違って、私には見向きもしない。赤いプラスチックの粗末なテーブルひとつを囲んで、クイをあわせた6人ばかりは顔をつきあわせて、とはいえとりたてて深刻な顔をするわけでもなく、彼等が何を話し込んでいるのかまでは私にはわからない。時には、あけすけに陽気な笑い声さえもが彼等の口に立った。シャッターを隅まで開けっ放した一階の奥にヴーが、同じプラスチックの椅子を出して座って、そして私に力なく微笑みかけて手を振った。想えば、すでに老いの果ての死の兆候が、だれに隠す気もなく兆されていたのかもしれない。そして、考えてみれば、それが、私が生前の彼を見た最期の姿だった。

クイとダットDatの父親である彼は、驚くほどにその息子たちとは似ていない。大造りな顔を大きく曝して、見あげるほどの巨体をそのまま椅子いっぱい投げ出していけば、白髪は灰色に、無造作に、その部分的な薄毛を見せ付けるだけだった。不意に乱暴に、振り上げた右手は、奥に行け、と、そう言っていたに違いない。

奥まったキッチンに、ヴァンがいて、その肥満した巨体をゆすりながら裏庭を指す。声を立てて笑いながら私に何か言う。私にはその言葉など聴き取れはしない。気を使って、微笑みかける私をは、まともに見ようもしないままに彼女はひとりで昼食の準備に追われていた。ざるに投げこんだ香草を千切り、ほぐして下ごしらえをする。

キッチンから、周囲の隣の家屋の壁に迫られた裏庭に出た。ブーゲンビリアの樹木と、私の名前の知らない、花のない樹木がその葉を茂らせる。その翳りにいまや、ただの物置になった離れのあばら家があって、夕方は、樹木の茂った枝の下に突っ立っていた。葉々の翳りの中に、日差しから身を隠すようにして。...その少女。十一歳の少女には、いまだ

見つけないで

私に愛される手立てをなど

わたしなんか

持たない。ただただ

見詰めないで
乳臭さの抜けない無防備な
わたしなんか
幼さを曝しながら、マイMaiが十七歳のときに、未婚のままに獲たその
わたしはどうせ、ただ、あなたをだけ愛し続けるのだから
少女が、私を
永遠に、もはや
すでに
時の果てたその終わりの果てまでも
愛している事は知っている。私に気付いて、振り向いて、すぐさまそらした眼差しが、容赦もな
くそれを語る。...好き。憧れのようなもの。とはいえ、
あなたが
鮮明に、愛し焦がれているには違い、
好き。もはや
それ。隠しようもなく、そして
どんなときも
ふたたび彼女は傍らの、花のない
どんな場所でも、たとえ
樹木の先を見上げた。私は
ふたり
夕オに
永遠に
微笑みかけてやりながら、私が
たとえ遠く
やがて
引き裂かれても
殺して仕舞う少女。
...好き
夕オは瞬きもしない。なぜか上方、樹木の先を見つめ続け、あるいはそこでいま、鮮明に世界
が終って仕舞っているのだとでも言いたげな、ただひたすらに深刻な眼差しを曝していた。声を
かけることさえ憚られ、終には、私は
見あげられた満点の空にまばらに流れる雲よ
声を立てて笑った。
私の頬に流れる涙を拭え
かならずしも嘲笑ったわけではなく。少女が浮かべていた眼差しはあきらかに、その年齢にはあ
まりにも
またたく星々は私の存在など
深刻に過ぎた。
知りもしないだろう
深刻すぎて、自分が好き放題に淫した深刻さをただ自分勝手にもてあそんでいるようにしか見え
ずに、私の笑い声に気付いたはずの夕オは私を無視して、そして、褐色の肌は木漏れ日の中に曝
されていた。その、粗末な
君は美しい
白い
疾走した猫が振り向いた眼差しに見た一瞬の
タンクトップの
夢のように
先から。もともと、昏い、心憂い、想いつめたような眼差しをしている少女だった。いつでも、
笑ったときにさえも、そして母親マイには髪型しか似てはいない。その、ベトナムに最も多い、
そのまま伸ばされて後ろでひっ詰められた髪型しか。父親似なのかも知れず、マイは決して、そ
の父親の名前をは語らない。家族のだれにも。家族たちはもはや、その眼差しにマイへの諦めに
似た赦しを浮かべるしかすべはない。その沈黙に対しては。夕オはかならずしも、それをもって
家族の者たちからつまはじきにされているというわけではない。ただ、フエを除いては。好き嫌
いはともかくも、とりあえずは誰に対しても心優しく接しはするフエはただ、夕オに対してだけ
は容赦をしなかった。あからさまに、まるで誰にも公認の、ひとつの社会倫理として容認された
被差別人種を扱うようにして、いかにも穢らしげにあつかい、フエは
君は美しい
その眼にふれる彼女のことごとくを
墮ちていく天使の羽根に巣食ったちいさなしらみが不意に見た
非難した。たとえ、沈黙の
夢のように

眼差しにあってさえも。髪の毛の毛先の跳ね上がり方一つさえも、フエにとっては容赦もない批判と軽蔑の対象にほかならなかった。タオはフエを畏れ、いかなるときにも、その眼差しの先から逃げようとしていた。ヴーを筆頭に、クイの家族たちの中で、人徳者として公認されたフエは敬愛され、尊敬されこそしても批判されるべき対象ではなかったから、そのフエの撒き散らす理不尽は、為すすべもなく赦され、理解されないままに共感されるしかないのだった。あるいはいつか

マイの沈黙と同じように。

ぼくは君を

やがて、私の立てた笑い声が、外の主幹道路のバイクの群れの

見出したのだった

騒音さえも届かない、内庭に寂たる大気の中に消え去って、

あの嵐の日に

ややあって、私が

泣き叫んだ君の涙の

彼女から

その

視線をそらそうとした瞬間に、タオは

理由を

当然のように私を振り返った。私を見つめた。

ん？...と。

そんな、ささいな音声の気配さえもなく、タオの眼差しはただ、なにかに追い詰められた色彩を見せ付けたがままに、冷静に、自らが曝された危機をだけ訴えたのだった。私に縋る気配さえ匂わせずに。ただ、私をさえ突き放して仕舞おうとしたような、私に対する絶対的な無関心さをほのめかしながら。...どうしたの？

と、...想う。私は、そして、「どう、...」

と。

「しました、...」その、「か？」...言葉。

私の唇がつぶやいた、その私の言葉の意味を両眼に、見つめた唇の動きに追いながら、タオはそれでも私を見つめつづけていた。「どう、しました、か？」わかるわよ。

じっと、

...ねえ

見つめれば、

わかる?...わたし

言葉なんか、

ね？

聴きもせずに

かなしいの

分かって

わかる？

仕舞うものよ。...と、その悩ましげなだけで、なにも語りかけようとはしない冴えた眼差しが、私は、彼女がそうつぶやいている気がしていた。「...います。」タオが、ゆっくりと、

満天に煌く星々よ。いま、汝等固有の惨劇を語れ

ささやく。

いまっ

「上に、」

ううえにい

「います。」

いいまっ

かすかに想いあぐね、何かを想いだそうとして、あるいは、不意に思い出しようもないことに気付いて、突然自分がおののいていた事実気付く、むしろ茫然としながら。それら、そんな心のかすかな動揺を、さまざまに、ほとんどなにも変わりもしない表情の中で、そのうごき。小さくゆれうごく黒眼だけが、あからさまな鮮度を持って、私に曝す。

「chủt...が、」

そして想いあぐねた表情を一瞬だけ曝し、

「上にいます。」

chủtんが

タオは

うえいいまっ

日本語を勉強していた。近所の、留学経験があるベトナム人が開いた塾で。いまどき、珍しくもなかった。片言の日本語が話せ、そして、教科書には出てこない鼠(chủt)という言葉などを、タオは知っているわけもなかった。私はふたたび、表情を作ることを思い出して、眼の前の幼い

彼女のために微笑んで、私は夕オをふたたび見つめていた。

内庭。

明るい日差し。

さわやかな木漏れ日の散乱。

あるいは、頭上に茂った木の葉の密集が投げかけた騒ぎ立つ木の葉の翳りに昏らんだ淡い闇の
氾濫。

物置兼クイの大量の書類置き場になってる離れの角から、喉を痛々しいほどに腫らした病んだ
犬が、やっとのことで歩を進めて、のろのろと内庭に這い出してきた。木漏れ日が、その褪せた
茶色の毛の上に斑で繊細な、消えうせそうな翳りを投げて、犬はそれに対して何の防御のしよう
もない。あるいは、防御する必然などなにもない。私も。夕オも。私たちは木漏れ日に同じよう
に翳らせられて、私は瞬く。

母さん

瞬間、

僕の両手はどうして血に塗れているの？

夕オは

夢の中で僕自身を

声を立てて

殺して仕舞ったから？

笑った。

夕オが上方、指差した指の先を眼差しにたどると、背の高いその樹木の、一番低い枝、とはいえ
、天井の高い家屋の二階の丁度真ん中くらいなのだが、そこにでたらめな放射を曝した枝のひと
つに、死んだ鼠がその死体を無防備に曝して、音もなく引っかかっていた。どこかの猫に屠殺さ
れた拳句に、樹木の上にまで確保され、そして、その存在を忘れられて仕舞ったに違いない。あ
の死体を始末しろ、と、そう言いたいのか、ただ、その存在を知らせてみたかっただけなのか。

あるいは、

...お母さん

単に、

誰が貴様ごときの母乳になど口をつけてやるものか

自分が気を取られていたものが何なのか、その

ちゃんと、加熱殺菌してくれませんか？

秘密を打ち明けなければならない必然に、彼女は駆られていたのか。

夕オは、ただ、その枝に

私らは

引っかかった樹木を

たたずむであろう

指差していた。

霧のなかに

蚊帳を上げて、ベッドに横たわり、帰ってくるのを待っていた。シャワールームに消えて行った
フエを。素肌を曝して、その体中にまわりついたままの水滴をバスタオルに拭いながら、寝室
に入ってきたフエは、...あら。

Anh đẹp trái

ハンサムさん。

そう言って、笑った。微笑むわけでもなく、私はフエの濡れた髪を見た。未だに水滴を滴らせる
黒髪は、いかに念入りに体をバスタオルが拭おうとも、さらに

私らはたたずむであろう。...

その

私らを

霧のなかに

上から

包むであろう

濡らして仕舞う。そんな事には構いもせず、フエはバスタオルをベッドの上、私の腹部に投げ
捨てると、

綺麗な日には

引き出しの中に、彼女の

綺麗なからだを曝してみるの

喪服を探した。茶色い

雨降る日には

アオヤイ風の宗徒服は、確かに

青い涙を

フエの顔立ちに

流してみるの

似合った。派手なところもなく、そして、かならずしも

可愛げのあるわけでもないその

質素な顔に。不意に邪気もなく

鼻歌を

歌いだしそうなそぶりがあって、いまに

尻さえ

振りはじめるとはではないかと

訝るほどに、その朝のフエは上機嫌だった。

太陽は常に、野生の灼熱をしか曝しはしない
いまだに髪の毛さえ生乾きのままのフエを、私はバイクの後ろに乗せた。粗い喪服の触感が、気配として背中に感じられ、至近距離にふれ合えば、フエのいまだに濡れた身体と髪の毛の匂いが否応もなく、水気に倦んだ匂いを撒き散らして、背中にしがみついたフエの体温は私の背中を温めずにはおかない。庭先のブーゲンビリアが花を散らせた。晴れた空は、濃い光をその樹木に惜しげもなく降り注がせて、花々はきらめく。その、むらさきに近い紅彩を一切、色褪せさせもしないままに。

通りに出ると、焼け落ちたブロックはいまだに

まともな再興を果たさないままに、むしろ

片付けられはじめたせいで、より凄んだ惨状を

気配させていた。家屋から運び出された燃え残りの残骸が、

そのまま残骸として

歩道のいたるところを埋め尽くし、時には

車道にまでにもはみ出す。コンクリートの躯体の

取り壊しをしようと言うのだろうか。鉄球を

君等は俺を速やかに抹殺せよ
ぶら下げた解体車両が車道の半分を塞いで止まり、とは言え、なにをし始めるわけでもなく、ドライバーはそのあるかなきかの日陰に煙草を吹かしているにすぎない。何をしようと言うのか、家屋の居住者たちは道端に適当にプラスチックの椅子を並べて話し込み、お互いの身の上を歎くのか、囁き立てるのか、ときに笑い声さが立つ。通りを隔てた無傷の向かいにはいくつかの飲食店が、やる気もなくいつもの閑散とした営業を続けていた。

何人かが、海際の橋から身を投げて

自殺したことは知っている。ひとりには

50代の男。家族の半数以上が、炎に

焼き殺されるか、煙に

可愛いんだよ
窒息死させられるかしていた。ひとりにはひどいやけどを負った三十代の女。顔と右腕に。夫と三歳の娘が、炎か黒煙にかに殺されて仕舞った。ひとりには、私も一度一緒に酒を飲んだことがある70代の老人。彼の家族のうちの何人かは、それでも生き残っているはずだった。その怪我とやけどの重度は知らない。所詮はひとごとにはすぎない気配の中で、私は、単なる他人の身の振り方の始末の仕方ひとつとしての自殺に、どこかで自分勝手に愚劣な無責任さをさえ感じて仕舞っていたのも事実だった。私のその感覚が、倫理的に許されるのかどうかはわからない。すくなくとも、死んで仕舞えば彼らは自由になった。自分ひとりですっさと

倫理とは常に他人の身の処し方に対する批評に過ぎない
死んで仕舞う気ままな自己放棄への容赦のない非難じみた軽蔑が、私の

晴れた日には

燃え上らせてみるの

からだのすべてを

音もなく

燃え上る

野生の

太陽の下に

降りそそげ

光よ

焼き尽くせ

この俺を

この俺の苦痛

この俺の栄光

この俺の絶望

俺が革命と叫んだならば

...知ってる？

お前、笑うと

めちゃくちゃ

可愛いんだよ

...知ってた？

眼差しの中に芽生えていた。そんな

お前、笑うと

感慨にふけりこむ自分の勝手に無自覚な無責任さと

すごい

愚劣さをも

可愛いんだぜ

軽蔑しながら。とはいえ、いずれにせよ彼らが直面しているは、留保もなき悲劇であるには違いなかった。

孤独のワンウェイストリート魂の孤独そしてお前がくれた

午前8時。近親者の

やさしさに感謝

弔いの朝の弔問としては、あきらかに遅すぎた。アンのように、6時くらいにはすくなくともいちど顔を見せておいたほうがいいに決まっている。町は、奇妙なほどに人騒がない。その理由などは知っている。日曜日の午前、人々は町の中心部に遊びに出かけて仕舞ったか、遅い寝起きのまどろみをむさぼりただけむさぼっているか、そのどちらかに違いない。クイのうちの前にバイクを止めると、氷屋も何も休業していて、仮設の葬儀場が一階に、いかにも派手派手しくしつらえられていた。

歩道は言うまでもなく、前面の車線にさえ少しばかりはみ出してテントが張られ、日差しを避けたその騒りの中に、みつつばかりのパーティ用の丸テーブルが並べられていた。垂らされたテーブルクロスは中華紋様を曝して、アルコール飲料はさすがにない。それぞれのテーブルの上に水とお茶とグラスが並べられて、洗いもしないで、かわるがわるにそのグラスに水を取る。飲む。話しつかれた渴きを癒す。群がった人々の好き勝手に話し声が渦をまく。軒先の、皺塗れの白装束をまとったヴァンが手を振った。...よく来たわね。

...と。

あら

待っていたのよ。

ハンサムさん

参列者の数人が、

あなたも

かわるがわるに

来てくれたのね

私たちを

それともわたしにケツを振るつもり？

振り向き見て、手を振るなり、微笑むなり、肩を抱いていきなり頓狂な声をかけるなり、それぞれに固有の仕草さを私たちにくれた。かならずしも、昨日、家族一同の命の根拠たる翁の遺体が戻ってきたばかりの家であるとは思えない。そんな陽気さと気安さが張り詰め、私はいつものように戸惑う。彼らと同じように、いま、この場で、私も微笑んだり、声を立てて笑ったりしていいものなのだろうか？

確かに

笑ってごらん

彼ら現地人たちは、想い想いの

きっと

現地風のたたずまいを見せるのだが、

きみも

私のような異人種が、彼らに殉じて

笑えるから

同じような振る舞いをした場合、むしろ

きみだって

彼らの眼差しが

もっとすてきに

外国人の不埒な振る舞いとしてその同じような眼差しを

笑えるはずだって

捉えて仕舞わないというわけでもない気が

ほくだって

した。私は、

知ってるから

彼らのようにあけすけに振る舞うのを遠慮するしかなく、それがむしろ彼らの目に、あまりにも慎まじやかな異国流儀に見えていることをは知っていた。テントの傍らにかろうじて確保されていた駐車スペースに、私はバイクを止めた。

親族は、二十人近くが顔を出していた。たぶん、これから埋葬まで一週間近く弔いの日々は続く。しつらえられた祭壇はお決まりの白い花々で埋まり、花々は好き勝手に潤んだ、どこか色気だった匂いを撒き散らして、女たちをさえ地味に隠して仕舞う。突き当りの壁一面に、亡くなっ

たヴーの名前が印刷された巨大なビニール・シートが飾り付けられて、煙だった香の匂いが舞う。忌問者の到来を告げる太鼓とドラが鳴らされて、クイの息子たる二十歳すぎのカーKhaが私が差し出した供え物の線香の束を、盆にうやうやしく受け取った。

救いたまえ

三度の礼を

いまこそ

祭壇に捧げて、そのたびに

生まれ出でた我等に生まれ出る苦悩の灼熱を床のごさの上に膝を屈してひざまづき、そのいかにも宗教じみた礼拝法を、フエにならないながらたどたどしく模倣する。異国人の私は、線香を、

ほら、...きっと

私はひとりで

きみにも

祭壇にささげた。傍らで、ただ

できるから、...ね？

つつましやかに

やっごらん。ぼくの

フエは、

するように

そんな私の仕草を見守っているにすぎない。夫のいる女はその手みずからで死者を穢すことしない、ということなのだろうか。すくなくともアジアにおいては、その土俗的な感性において、日本のイザナギ・イザナミ神話を含めて、生命を生み出すものは生命それ自体に穢されているという、そんな感覚にもとづく作法が多いのは事実なので、ここにもそんな感覚のヴァリエーションのひとつが、人々の眼差しに映る風景を、その後景として支配しているかも知れない。いずれにしても、礼拝を私を任せるきるとき、フエはいつでもつつましやかに、背後に控える。いかにも貞淑に。

女たちは

いつでも

十人近く祭壇の裏、

私の

ヴーの遺体を収めた棺の傍らの床に

背中にその悲しげな目線を

座り込み、

落としていたのだった

胡坐をかいてその、使いまわされすぎて褪せた白装束を皺だらけのままにまとった集団は、まどわれた白装束の下、本来純白で在るべき色彩の、文字通りできそこないの、薄穢れ、破綻した肌色無様な塊りにしか見えない。あきらかに皮膚の色彩は穢らしい。無言のままにざわめき立った眼差しの群れが、それぞれに連鎖していきながら、時差を持って私たちを捉えて、それぞれ勝手にゆらぎ、ばらばらにうごめき、耳打ちの声さえ聴こえて、いずれにせよ、ようやくにして、私の眼差しはかろうじて何かを哀れみ憐んでいる人々の気配にふれば、これが埋葬の儀式の風景であったことにいまさら気付かされる。



群れた白い塊りに、縋るつくように駆け寄ったフエは、すでにその眼差しの中、女たちの群れのうちに、自分を取りすぎるべき人物を見い出していたのだった。それはヴーの妻だった。八十代半ばのヒエンHiênという名の老婆は、物言わないままの皺としみにまみれた歎きの表情に、その眼差しをいっばいに悲しみにみなぎらせていたフエの、自分に縋りついた倒れこむような仕草さを愛でて、その頭をかき抱く。私に微笑むかける上目のヒエンの眼差しに、私は弱々しい微笑をただ、

私はいちども

返してやるしかない。いずれにしても、

死の翼にふれたことなどない

寄り添った女たちの集団の中にだけ、確かに、

なんども

かすかなものではあっても

転生の時の中に

歎きは

死んで仕舞いながらも

鮮明に存在していた。

死とは一つの特異点にほかならず、それを

クイの姿はどこにも見えない。

経験する事などかつて誰にもできはしなかった断りきれない所用のために、どこかに出かけているのかもしれない。町の名士にして、カンボジア戦役の英雄にして、著名な慈善家たるクイに、たとえ父親の弔いの週ではあっても、体を休める暇などないということなのかもしれない。父親との反目があったとも想えない。

声を聴く

振り返って、私は

葬儀の中に、人々は

そして

自分たちの唇がときに

棺を覗き込めば、

発する

ザーの

声を聴く

濃い死化粧を施された花々に埋もれこんだ遺体の曝した顔は、インターネットで見たどこかの国の死体の腐らない奇跡の聖人だとか、そんな風にさえ

歎きの声か

見えた。

あるいは

あきらかに化粧が濃すぎて、

哄笑にすぎないちいさな

まるで蠟細工のようしか見えない。

声を

苦しみの痕跡は見えない。それとも、地肌に刻まれていたその痕跡を、もはや塗料と化した化粧が覆い隠して奪い去って仕舞ったのだろうか。苦しみながら彼は死んだのだろうか。その最期に。苦しむ隙さえもない、あっけない死だったのか。あるいは、死に先行してすでに消滅していた意識は、鮮明であるべき苦しきさえ知覚しないままに、一切その匂いにもふれもしないままに

死者の埋葬は死者に任せよ

やり過ごして仕舞ったのだろうか。一度だけ胸元に、ちいさく

やがて

すでに、もう

手を合わせた。

最後の日にすべての死者は蘇らなければならない

我々は容赦もなく

九十歳を超えている長老なのだから、彼は

最後に審判を受けるべき必然があるのならば

あなたに裁かれてしまっていたというのに？

戦争で人をひとりふたり殺したことがあるどころか、その双眸にさまざまな風景を見い出して来たに違いない。フランスによる占領下、植民地支配の風景。そこからの独立運動、あるいは局所的暴動、突発的な抗争、不意のゲリラ、やがてかつての大日本帝国の到来。彼らによる

自由を我等に

...奪わないでくれ

ヴィシー政権との共同統治。そして敗戦と併に彼らはいなくなれば、その八月に北のほうで勃発する八月革命、だれかが

自由と民族独立こそは

屈辱と苦痛を。...それらこそは

ふたたびこの地に植民地支配に来る前に、そしてどこかの国が勝手に宗主国たることを宣言して仕舞う前に、彼らは

きみの魂を自由にする

俺の生きる理由なのだ

勝手に独立を宣言し、いずれにしても彼らには此処にすでに固有の国家が存在することを、世界中の人間たちに明示告知してやる必要があった。攻め込んだフランス兵との再会。そして新手のソヴィエトの軍人たちのロシア語が飛び交い、アメリカの軍人たちのアメリカ英語が飛び交い、独立戦線に協力し始めた一部の残留日本兵がクアン・ガイに違法なる非承認国家たるベトナムのためのゲリラ兵学校を作った。さまざまな場所で、さまざまな思惑による紛争が勃発して、ながいながい戦争の時代が来る。ヴァンの前半生どころか、その最期の二十年たらずを除けば、ことごとくが

地上に最も多くの殺戮をもたらした獲たものは、国家という

戦争か、

統治システムでこそある

紛争か、独立闘争の時代にあてはめられて仕舞う。フランス兵の軍用銃から、日本軍の日本製の歩兵銃、アメリカの、ソヴィエトの機関銃、あるいはどさくさに紛れて中国人と韓国人の発砲した銃弾をまでヴァンは知り、そして、フランス兵が、日本兵が、アメリカ兵が、韓国兵が、この地の女たちに生ませた子供たちを

自由を我等に

むしろ、...友よ、あなたは家畜になりなさい

見てきた。時には報われることの少ない悲劇的な愛によって。そしてその大半は容赦もない戦場地域にありふれた

魂を解放せよ

祖国の家畜になりなさい。なぜなら

単なる日常的な暴力のひとつとして。いま、生きているという事は、いま、死なずに生き残っているということにすぎない。

祖国に栄光を

あなたに祖国以上の価値などかつて

その当たり前の事実を隠すことも出来ない時間の無造作な集積に、ヴァンはその人生の大半を浸した。

祖国の栄光こそは我らの魂を

存在しはしなかった

なにか、いつか

自由にする

自分勝手に想いあぐねて、歯軋りしそうなほどに感傷的な、どうしようもないはらわたに滲みる惨めったらしさを、誰にと言うわけでもなく感じて仕舞いながらも私はその場を離れようとし、表で、近親者たちの雑談に交わる気にもなれなかった私は、私に向って振り上げられたいくつかの手と喚声に、気付かなかったことにしたままに、奥、ひとりで裏庭に出たのだった。

...光よ

いつもの、

容赦もなく輝く

喉を腫らした痛々しい老犬が

君よ。この地球の

ブーゲンビリアの

至宝よ！

木漏れ日の、淡い日陰のなかに憩う。かつては見事だったに違いない茶色い毛並みは、皮膚病さえ併発していたのか、あるいは喉の腫れに起因する発熱のせいでもあるのか、所どころに斑な脱毛と薄毛を曝して、眼差しのなかに、ただただ目に映るもの、耳にふれるもの、鼻に感じられるものの、それらすべてが

君は光

厭わしく、歎かわしいのだと、

この世の光

彼の頭をまともに撫でてやったことさえも、その

光あれ！...と

上目の視線が

君がそうつぶやけば、世界は

訴えていた。

光り輝くしかないのだ

表で鳴らされ始めた、ベトナム仏教の念仏の、ながいながい節回しが、伴奏のエレキギターを伴って背後に遠い轟音の幕を作って、録音されたものを再生しているにすぎないそれに、人々の喚声が、

聴こえるよ

ときに、

聴こえているよ

まばらに、混じる。人の

僕等の声が

死に目にあって、静謐とした、...とは、

はっきりと耳に

間違っても言獲ない環境の中で、耳元に

いま

聴こえているものにさえ

耳を澄まさなくとも

聴こえはしない振りをし通そうとした老犬はただ、

聴こえていたよ

木漏れ日の中に頭べを垂れた。あの日、ミーが殺された翌日に、スコップを借り出した私は家に帰って、上半身を日差しに曝して、ブーゲンビリアの根の近くを掘ろうとしたのだった。その試みが不可能だという事は、すぐに気付いた。その荒々しく動きもない図太い樹木の、地下にかにも支配者然として張り巡らした根に、振り下ろされて土を掻く一本のスコップごときでは、どうやっても抗いようがないのだった。

背後に、

樹木

仏間の木戸の日陰でフエは、相変わらず素肌を曝したままに

ひ弱さを気取って見せた、その

片手のスマホをいじって見せながら私を

あまりにも強靱で巨大な肉体

見守り、時に私を画像に収めて、不意に声を立てて笑って仕舞うことに、いったい何の意味があったのかは私にはわからない。映された画像には、陽光に曝された

...あるいは

無残な

樹木とは一つの凄惨な暴力そのものではなかったか？

ミーの死体さえもが映っているのだから、だれにも

焼き払って仕舞えば、その我々さえもが

見せられないふたりだけの秘密、...の

滅びてしまう、あまりにも残酷で

つもりだったのだろうか。もっとも、その

救済のない

死体は

至上の暴力

私たちが殺したのではない。あくまでも、見殺しにただけだ。...と。

そんな言い訳など、だれかに通用するのだろうか？

朝の日差しが長く描いたブーゲンビリアの鬃りの、その先端の草地を掘り起こし、私は三十分近く掛けて、ミーを埋葬すべき穴を掘った。家の向こうで、

いつか

焼き尽くされたばかりの町の喧騒は

芽を出す花々は

おさまならない。その

いま

忌々しい臭気さえも。振り返った

種の中の

白い、開けっ放しの鉄門の向こう、

眠りの中に

主幹道路を警察の、

憩う

救急の、あるいは消防の車が通り抜け、そればかりか徒歩で何人もの警官が実況検分に歩き去っていくのだが、

ほら

だれも

ぼくは

私たちを

ここに

眼差しに

いるよ

捉えようとはしなかった。

私はミーを、そのまま担いで穴に放り込もうとした。

Không !

その瞬間にフエが、

No !

どうしようもない危機感を

駄目よ

曝した声を立てて私は振り返り、私にしずかに微笑みかけているままのフエを見出す。ミーの穢れた亡骸を腕に抱いた私をじっと見つめて、ややあって、立ち上がったフエは素足のままに、乾いた地を踏んだ。歩き、傍らに、寄り添うように私を見上げたフエが、ミーの開かれた眼差しを閉じてやろうとした。私は膝をついて、ミーをやさしく地に横たわせて、そしてフエを見守った。息をひそめながら。未だに死後硬直は始まっていなかった。むしろ、フエの想うままに、ミーはその表情をつくり、髪の毛を徒刑囚のように刈り上げて眼を閉じた、血と泥にいっぱい穢されて微笑む少女を完成させた。薄穢れ、引き裂かれて、張り付いたままの衣服を引き剥がす。死んだ、いかなる生き物の息吹きもない、どうしようもなく私たちへの無関係さをだけ曝す他人の素肌を日差しにふれさせ、もはや生命をきざむことのない肉体は、好き放題にそれら固有の憩いのときをむさぼっているように見えた。魂など、いかなる意味でも不在なるがままに。

もっとも重要なのは

日差しは

君の魂が自由である事だ

直射する。一切のやさしささえ感じさせずに。

私たちはときに肌をふれあわせて仕舞いながら、ミーの傍らにひざまづいて、そして彼女は生まれたままの姿で、誰にもなく、なにをも見出さない閉じられたまぶたのうちに、最期の微笑を

曝しただけなのだが、不意に、フエが鼻に笑い声を立てたのに私は気付いた。...どうしたの？と。
ほら...

その私のつぶやくべきだった言葉をさえ待たずにフエは
君を見つめながら

私に顔を上げて、微笑みのうちに
僕は失心する

見つめれば、私の頬にキスをくれた。
もう片方にも。催促されるわけでもなく、私はフエの唇に、唇を添わせて、短い口付けのあと
にミーを抱きかかえる私を、フエは見つめた。...雪が舞った。
永遠なる愛を

わたしの心よ
開け放たれた木戸の向こうに、ブーゲンビリアが雪に埋もれ、その
君だけに

語れ。いま
葉の群れ、枝の拡がり、図太い樹木の幹の沈黙、荒れた木肌、そして
愛を

その
咲き乱れるしかない花々にさえ、ただ白だけの雪の色彩はその
君だけに、唯一の

あふれでる愛の
自分の色彩のうちに埋もれさせ、あるいは、不意に開いた白の色彩の
愛を

無際限な言葉を
裂け目の点在下からわずかにのぞいた緑と、むらさきに近い紅彩が、純白を破壊しないまでも
あざやかに裏切って、それらはあくまでも固有の色彩に自分勝手に
ぼくらは
淫した。

君の眼差しの中に墮ちる
少女が振り向き見て、いつもの昏い眼差しを向ける。私に。彼女は何か言った。私に。私は
なにを
それを、
見てるの？
意図的に
わたしを
聴き取りは
見てるの？
しなかった。すでに
いま
知っていた。彼女が
咲きます
何を
花が
言ったのか。そのとき、
音もなく
やがて
ひっそりと
来る私の最期のときのなかで。
知っていますか？
微笑んだ夕オが、
名もない
ややあって
花々の
ささやきかけるのを、そして、
名前を

あるいは、私がそれらを聴こうとさえしないのはただ、静寂のうちにだけ、彼女を見つめていた
いからだったのかもしれない。美しい女。確かに。
成熟しかけたままに無造作に放置された、ずさんな、いわばうち棄てられた美しさを彼女の身体
は曝す。自分勝手に、想うがままに息づきながら、それを所有する本人自身に軽蔑され、貶めら
れていた野生の肉体。自分で素肌を曝し、褐色の、肌は雪の日の夜の反射光の中でだけその色彩
を空間に、不意に生じたなまなましい翳りとして暴き立てて、夕オは声を立てて
私が

笑った。

微笑むのはそこに

そのときに。

君がいてくれるから

不意に。やがて、私に殴りつけられ、壊されかかって、...ほら。

雪の中に

言った。彼女は、ささやく。耳元に、...見えますか？

花が

なにが、見えますか？

咲きます

声。私はその声を耳の中に反芻した。なんども。...出来た？

知っていますか？

想う。私は。あなたが望んだとおりに、いま、

あなたの知らない

あなたは生まれて来たことそれ自体をもはや憎み、後悔できていますか？

花の名前を

タオのうつろになっていく眼差しを見る。失心を繰り返して、壊れ、崩壊していく。何を？

知っていますか？

想った。何をてるの？

名前を知らない

あなたの眼差しは、いま。

わたしの

ときに、

名前を

唐突に、

知っていますか？

不意に声を立てて笑うタオの見出した風景には花々。...あの、彼女が愛したブーゲンビリアの花々は咲いていたのだろうか？安置した。ミーを、私は穴の中、土の上に。土には、あからさまな土の荒々しい、いわば容赦もない野生の臭気が匂い立って、漂い、停滞し、それらのうちにあらゆる細菌の類が育まれているに違いないことはすでに実感させられていた。これら、無機物の無残な臭気は、たしかに、さまざまな生命体を育てやまない生命の温床にほからなかった。こまかな地中の

命の歌

虫が地を張って、むき出しにされて仕舞ったミミズが混乱のうちに地を這った。私の体のいたるところに

歌え

付着した土をフエは、声を立てて笑いながら払ってくれ、その頬に口付けてやろうとして遣れば、フエはわざと拒絶して

命の歌を

戯れた。ミーに土を掛ける前に、フエが言った。...待って、と、そのフエはブーゲンビリアの樹木の枝の周囲を彷徨って、眼差しに何かを追い、捜し求め、やっと見出したのは、花をいっばいにつけた細い枝のひとつだった。花を散らして仕舞わないように慎重に、フエは枝を折ろうとはするものの、生き生きとした野生の、瑞々しい繊維にみなぎった命の執拗さに、所詮はフエの華奢な指先などかなう敵ではなかった。

ぼくらは

フエの意図するところは理解していた。奥に入って、

抗う。きみを

はさみを取ってこようとした私をフエは

苦しめるすべてのものに

制止する。ブーゲンビリアの小高い花の枝に、

ぼくらは

背を伸ばして手を伸ばしたままのフエは、

抗う。きみを

かすかに

悲しませるすべてのものに

ふらつきながら木漏れ日をあびて、その

ぼくらはやがて

素肌の褐色の上に、

殲滅されてしまうだろう

さまざまに斑な葉と花々の形態の名残りを翳らせた。

いつか見た蝶の羽撃きの影の下に

不意に私を振り向き、声を立てずに、あえてひそめて笑って、彼女はゆっくりと、そっと、そして枝を引いていく。彼女の顔の前にまで、花々を乱す枝はときに絡まりながら引き摺られたのだが、数片の花びらが舞って墮ちる。足元に。フエは、狙いの枝に、咬み付いた。

もっと

咬みつき、

もっと、想うがままに

咀嚼さえして、すこしずつ、

望むがままに

その

もっと

柔軟で強靱な繊維を千切っていくと、その数分間を、まるで

僕をずだずだに引き裂いてしまうがいい

彼女固有の趣味であるかのように浪費する彼女の真剣な眼差しには微笑みさえない。いつか、装わずに私は声を立てて笑って仕舞い、ときに唾を吐き棄てながらも繊維を咬む、フエの唇のうごきは樹木のしなれた枝にかすかな震動をを与えて、ほんの、ふれれば壊れて仕舞うわななきが、フエの肌の褐色の上に鬚りを揺らめかせてはその色彩をおののかせる。

そして

風に吹かれた、ちいさな

心はふるえた

花々の

ぼくのナイーブでセンシティブでときにナーヴァスな心は

震動の集積をあますところなく曝して。

終に、フエの葉が枝を断ち切った瞬間に、その弾き上げる反動に撃たれたフエは、小さな悲鳴を上げてしゃがみこむ。枝を

...ほら

耳を澄ませば

指先に掴み取ったまま、

雪が降る。ただ

君の声が

そして、彼女たちを

あなたのまぶたの上だけに

聞こえたよ

降り注いだ、舞い墮ちるブーゲンビリアの花々が、いっぱいむらさきがかかった紅彩の断片に埋め尽くす。

私は堪えきれずに声立てて笑った。しゃがみこみ、膝に顔をうずめてまるまったまま、フエは身動きひとつしようとしなない。散乱した花々に覆われて。もはや好き勝手な自由の中に、為すすべもなく上方にわなないた枝の、好き放題のわななきの連鎖が、フエになおも無数の花々の紅の雪を降らせた。頭に、髪に、肩に、背中に、積った花々の色彩は身動きしないフエのせいで、かすかにも動きさえしないままに、上方にわなないた鬚りがそれらのすべてに微細な躍動を匂わせるのだった。

俺はいつでも光の中に失心したいと願うそんな

ややあっても、しゃがみこんだまま動かないフエに、その傍ら、私がひざまづいて添ってやると、不意に顔を上げた彼女は私を見つめ、涙さえ流さずに、そしてフエはひとりで泣いていた。

...拒絶して

花々を撒き散らしたままに。

私があなただけを求めたならば

泣いているとは言えない。涙もなければ、その声もなく、しゃくりあげるわけでもない安らかな、その

見て、いま

流れ出るきみの涙に

一瞬、

ぼくらは

不意に宿ったその気配に、やがて

言葉の存在を忘れて仕舞ったのかも知れない沈黙の中で、

美しい

僕は自らを埋葬したのだった

表情さえ喪失して泣いている彼女は、

Buồn...

...悲しい。

言った、その言葉は私の耳だけにふれた。ほかに、

悲しみは

聴くものなど誰もいはいしなかった。彼女に

いま
添うのは、すくなくとも
夢の中で
いま、私しかいない。そして、
咬み付いた猫の
向こうの主幹道路を
残した
行き来する警官たちと、町の
傷痕のように
人々の群れでさえもが、私たちのことをすでに
そっと
棄て置いて仕舞っていた。
傷付けた
フエの、
わたしだけを
追悼の言葉、その耳障りを、わたしは為すすべもなく耳の奥にとどめた。

青空に火を放て
花をしがみつかせたままひとつたりとも散らしてはいなかった、フエの指先がはさんだ花ざかりの枝を、私は奪い取ると彼女の意向のままに、ミーの胸元に投げ棄てた。ただ数輪の花々だけが、ミーを吊って、彼女は添われた。花々に、そして私は土を、ミーに振りかけるのだった。胸元に留まった、その花々の匂わせた色彩にさえも。そして、土の中に目醒めたままではいるはずの無数のこまかな生命の群れの、無造作の氾濫の中に、
いま

埋没される。...
ふたたびあの青空に火を放て
私の仕事が片付くまで、フエはそこにしゃがみこんだままだった。横向きに振った眼差しで私の一挙手をまで確認しながら、もの言わないまま、表情さえなく。
相変わらず、その体中に花々を撒き散らされたままで。曝された素肌の褐色の上に、花々はひたすら残酷で、赤裸々な野生の色彩を曝した。人肌の、花の色彩にふれたせいでもはや、どこか穢らしく、みすばらしく、あきらかに無残で、くすんでさえ見えたその、彼女の色彩をフエは惜しげもなく曝して、むしろなんらの恥じらいもなくその、何も言わない眼差しを地面にそのまま
わたしは花
投げ棄てた。
綺麗な花
ミーの墓に墓標はない。あるいは、
わたしは花
いつか草花が芽吹いて、
ささやかな花
墓標の代わりに
わたしは傷
咲いて見せるかもしれない。手入れもされなくなった庭は、
やさしい傷
あきらかに
永遠にあなたの心を
荒れていた。繁殖する草、樹木の苗木、それら

苛むの
植物に、やがてはここは飲み込まれて仕舞うのかもしれない。それらの理不尽なまでの生命力の横溢の中で。私は、たぶん、もしそうなったとしても、私たちがそのままに棄て置くに違いないと、何の確信もなく私は想っていた。私に手を引かれるままに立ち上がって、家屋の中に連れ込まれようとしたフエは、不意に抗うように私にもたれかかって、しがみつき、胸に顔をうずめたフエの体温に、私の曝された上半身はむせかえる。
灼き尽くされた
頭をなげた。

光よ
彼女の唇が、私の唇に
降り注げ
ふれられることを、意識される前の当然のこことして、認識していることには気付いていた。私とその顎に指先を添えて、顔を上げさせようとすればフエはわずかに、あざやかに抵抗して、...駄目よ。

好き？
...いや。

わたしの
と、その
すべて
気配がフエの周囲にだけ乱れる。私は頬を押さえつけて唇を奪った。いつか、嗜虐的な色が、私の眼差しの中に浮んだ。フエは抗うことをやめない。私の腕が彼女のもがく身体を強く、潰して仕舞いそうなほどに拘束し、
好き？
筋肉の力みと、
この
骨格の
世界の
うごめき。それらは
息吹き
じかに私にふれる。見上げるまでもなく、空は青くそれ自身の色彩を曝して、そこに輝いて、ただあるがままに停滞しているに違いない事は知っていた。フエの、私の唇に暴力的に塞がれた息遣いが耳にこすれて鳴った。
私の指先は、
耳を澄ませれば
彼女の背中 of 皮膚をなぜ、それは
あなたのまぶたの瞬く
愛撫に外ならず、私たちは
そのかすかな音響さえもが
息遣う。
聞こえていたはずだった。あるいは
足をくねらし、腰を引き離してもがき、私から離れようとするフエを
耳を澄ませれば
私は
気配さえなく花開いていく
許さない。後ろを向かせて、
紫陽花の花々の花弁のふれあいさえもが
ブーゲンビリアの樹木の幹に手をつかせようとはしたものの、
聴き取られていたはずだった。ときには
抗うフエに容赦はない。不意に、私が
耳を澄ませれば
彼女をひっぱたいたとき、フエは
降り注ぐ日差しが大気にふれた、その
抵抗をやめた。身動きもなく私を
温度の息吹きさえもが
ただ見つめる、上目遣いの眼差しには、
空間のあまねくすべてに
突発的な怒りもなければ執拗な憎しみもなく、
鳴り響いていたはずだった。そして
澄んで明確な言葉の、その
あなたの
断片をさえ匂わせないまま、フエの
いつか流した涙の
ふるえもしない眼差しは、鮮明な
頬を伝ったそれ。時の中に消え去った
歎きを
痕跡の息吹きさえも
訴える。
雨を降らせたのはあなたですか？
破壊してやりたい衝動が私に芽生えていた。唐突な衝動が
わたしの額を不意に
私の喉の奥に
濡らした刹那の雨を
発熱した不健康な温度を与えていた。何を破壊して仕舞おうとしているのか、私にはわからなかった。ブーゲンビリアの樹木に両手をつけて、ときに爪で幹を掻きさえしながら、家畜のように尻を突き出したフエは私を受け入れるしかなかった。どうせ、衝動が収まって仕舞えば、いつものように、途中でやめて仕舞うことなどだれにも明白だったのに。頂点に向おうとはしない、情性の長い行為がフエを痛めつけるわけでも、恥辱にまみれさせるわけさえなく、かさなりあいほしくない息遣いのうちに、かすかに風に打たれたブーゲンビリアが花を散らす。まばらに、私た

ちを、そして花々は想うがままに穢した。...なにを、と。

見えていますか？

その声に振り返り見て、家屋の

わたしの

裏口の日陰にたたずんだ夕オを、

微笑み

眼差しは見つける。

「...して、いますか？」

ヴーの葬儀の騒音は耳の向こう、夕オの存在をさえ塗りこめて、そこに停滞していた。彼女が、そこに立っていた事は、すでに、その投げ出された気配によって、私の背中には察知されていた。

なにうおしてえまっか

夕オのささやき声が、耳のうちに反芻されて、刻まれた無残なほどに昏い絶望的な眼差しのま
まに、彼女は

花々は

微笑んで、

所詮は

あるいは、やがて

咲き乱れるしかないのだ

ちいさなささやき声を立てた。唇の端に。彼女のその音声が、何を言ったのかは

うんいたあんのひ

聴き取れなかった。それがベトナム語なのか、日本語なのか、英語だったのかさえ、私にはわか
らない。

笑いかけもしない私の、どこか呆然としているに違いない眼差しを、夕オは声もなく見つめて
いた。微笑む寸前の、表情のない顔で。幼すぎる少女。とはいえ、確かにその年の頃にしか許さ
れない、むしろ中性的なあやうい美しさを、夕オの身体は無防備に曝すしかない。

あの日、

壊さないでください

ブーゲンビリアに引っかかっていた鼠の死体に、私たちは

空の青さを

庭の小石を投げあったものだった。昏い眼差しが

雨が降ってしまいますから

浮かべた深刻な絶望を、一切くずもしないままに夕オはときに声を立てて笑い、私の発した派
手な笑い声を聴く。

首をかしげて、そして私は聴いている。

...なに？

私たちは。聴いていた。その

それはなに？

三階に匿われている、頭のおかしくなった、両眼のない

...なに？

夕オの叔母が、唐突な、

あれはなに？

獣じみた叫び声を立てて仕舞ったのを。頭の中で、その

...ここに

響きは無意味に反芻されて、木魂すこともなく、チャンという名の彼女が

ここにいてください

いったい何におびえ、あるいは

ずっと、ここにいて

なにに抗おうとし、なにに

笑っていてください

非議を訴え、なにを

世界を

軽蔑し、拒否し、憎悪し、そして

あかるく照らし出すために

終には立てられて仕舞った叫び声なのかは、一切

いとしいひとよ

人間の言葉を発さなくなったそのチャン自身以外には誰も知らない。

花々は

二十歳のときだ、と、フエは

それらみずからのためにだけ咲き誇らなければならない

言った。彼女が、自分で自分を殺して仕舞ったのは。自分で、自分の両眼を抉り出して仕舞っ

たチャン。そのとき、...何をしてるの?...そう

Em

言って

lâm gì ?

想わず耳元にささやきかけたフエの声に、フエを認識したに違いないチャンは、両手のひらに転がしていたふたつの眼球を、握りつぶした。その瞬間、眼球の内部のものの、薬品じみて感じられた匂いを

花々は

やがて

フエの鼻は

匂い立つ

あなたに

嗅ぎ取った。いずれにせよ、チャンは

降りしきる雨の中にさえ

こんにちあって、そう

自分にしか分からない恐怖か、なにかに、その野太い低音で、威嚇を突きつけていた。そのときにタオが

あなたは

まばたく。

ふれられはしない

何の

わたしをは

音さえもたてずにふるえた、その

決して

まぶた周辺の空気が、震動を私の眼差しの中にだけ曝した。

こんにちは

タオの投げた小石が鼠には当たらないまでも、その

愛する人

至近距離をかすめて、やっと置かれただけの枝の上からずれ落ちて仕舞いそうな気配を立てた。声を立てて笑いながら、ふたりの眼差しがそのくせ息をひそめて注視し、その、見つめずに入られない視線の先に、不意に、前触れもなく鼠が墮ちた瞬間には、タオは頓狂な歓喜の声を上げていた。...いくら見つめていても、と。

もう、なににも

そこにはもう、

あなたは

鼠なんか

ふれられはしない

死んでいないわ。

すでに

そんな言葉を、私に、何の言葉もなく語りかけている気さえした。その、裏口の日陰に私を見つめる、少女の優しい眼差しは。...諦めて。

ふれなさい

もう。...無駄だから。

あなたの

微笑んでやるべきだったろうか。私は、

のぞんだものに

そうに違いない気がした。私は、私に、もはや微笑む余力をさえ感じていしなかった。庭の、何事もない風景には、すでに飽き果てていた。裏口の方に歩を進め、私がタオにすれ違いそうになった瞬間に、...ん。と、その

...ん、と、それ

鼻にかかったタオの音声を

...ん、とその

きみのその音声が

聴いた。耳に、

あきらかに

不意に

至近距離に鳴ったように感じられた、

日本語の

僕の耳にふれたとき

それを。

音声を

終に星々は失心する

すれ違いざまの傍らに、立ち止まった夕オは白装束を曝しままに、私を見つめ、その上目遣いの視線のどこかに、一瞬の想いあぐねた不安がのぞいた。かすかに、けれども鮮明に。いたいけもない、というには、その眼差しの昏さのせいで、あまりにも大人びすぎているように見えた夕オが、焦燥に駆られながら周囲の気配を探り、その

変らないで

眼差しに、終にあからさまに

きみはきみのままでいて

いたずらじみた色彩が浮んだときには、それを私に

ありのままのきみでいて

見留める隙さえ与えもしない刹那、爪先だった夕オは私の唇に押し当てていた。みずからの唇を。

いまこそ

一秒もかからない一瞬だけのふれあいを、私の

殺戮のとき

唇は

すべての家畜どもを屠殺せよ

執拗に反芻した。醒めやらない触感として。女として見ることの不可能な少女が、とはいえその眼差しのうちには、男としか見い出せない男を見い出していることに、なんどめかに気付かされた瞬間に、声を立てて笑う夕オの眼差しに気付いた。私を

あなたを

見つめた、その。あるいは

見えていますか？

自分が、

なにが

なにかに

あなたを

勝利したかのように。夕オは私の傍らを通り抜け、

見えていますか？

ブーゲンビリアの先の家屋の隙間を

あなたは

抜けて行った。

わたしを

華奢な子供にしか通り抜けられない近道。

ぼくらは沈黙の言葉で勝利を叫ぶ

やつれた老犬が、その後姿を眼に追い、鼻に

ぼくらよ、ぼくらの

嗅ぎ取ると、ややあって

屠殺死体を踏みにじれ

犬は身をもたげ、重力にふれることそれ自体がもはや苦痛なのだと言いたげに、夕オの行方を追った。不意の幼い口付けに、私は呆然としていたわけではない。

むしろ、私の意識はただ冴えて、何の言葉をも想いださないだけだった。やがてあの

...屍を超えて

雪の日に、夕オの体に交わった、かすかで執拗な

...無数の屍を超えて

熱狂を、為すすべもなく沈静化させて仕舞いながら、望まれていたこと。

花々よ、舞い散るがいい

夕オに。眼差しがささやく。閉じられたままに、まるで、徒刑が執行されるときを迎えて、眼に

あまりにも繊細な花々の色彩よ

部厚い布をぐるぐる巻きにでもされたかのように、...見えないわ。

それを

いま、私は。

擬態しながら

夕オは、

見えないの

...なにも。

わたしは

痙攣させる。

なにも

あけ開いたままの唇を。無様なほどに

と

わななかせて。その身体が、曝された褐色の肌をいっぱい、不健康に汗ばませていることには
気付いていた。何かの身体機能が崩壊したかのような、いびつな発汗。あきらかに零度の境界に
ふれた、凍えるしかない大気にじかに、その

わたしは

素肌を接触させながら。

なにも

タオの、

見えません

閉じたまぶたはふるえもしない。

もう

眼差しの

あなたしか

ふれるものすべてのもののすべてに、私は絶望していた。私のそれはすでに、その意味を失って
いた。萎え切って、やわらかなだけのそれは、ただしなだれて、ふれあった粘膜のあるかなきか
の圧力にさえ為すすべもなく、無造作にこすり付けられるにすぎなかった。最初から、何の熱狂
もなかった気がした。頭の中、神経の中を冴え、癒しがたい発熱に白濁させて仕舞いながら。
いつか眼差しさえ、温度を持っていた。病んだ、何かが明らかに壊れて、制御の可能性を失った
暴走の温度を。私は醒める。

...知ってる？

ただ、冴えて、醒め、なんども

降り積もるとき、雪は

目醒める。繰り返し、

かすかな音を立てる

一瞬たりともまどろみさえもしなかった冴えた眼差しの中で。

あ

明らかな、発狂を、...精神疾患に

いま

還元することも、分類することも不可能に違いない、あざやかな

君が笑う

不意の墜落に似た発狂を、タオの閉じられたまぶたが曝し、倦む。タオは、みずからの発狂に、
そして、

あ

ふれる。

いま

彼女の首に、私の手のひらは、そして

ぼくは恋に堕ちた

感じ取られたもの。その、汗ばんだ触感。すでに

世界に平和を

為すすべはない。

この世界に愛を

なにもものによっても許され獲ず、なにもものによっても正当化させれ獲ず、なにもものによっても救
済されようもない、そして

愛こそはすべて

殺意さえありはしない行為。...私は見出し続けていた。

私は、ずっと、いつでも、...光。

その、光さえない光の

私はすでに

氾濫。

あなたを救った

救済の、横溢する神々の光が私たちをつつむ。相変わらず、

あなた固有の地獄の焰から、いま

代わり映えしない救済の中で、私とタオはみずからを焼き尽くそうとする。最期の、もはや

神々は僕等を

輝きを！

行き場所のない破滅へと、

救済した

命の輝きを！

ただ。

光。...氾濫する、光、すべてのものが、そして彼女の、締め付けられた喉が、苦痛に、あるいは
、苦痛そのものが与えられた、もはや、恍惚でさえない光の、その、白濁に、...倦む。吐き棄て
ることもできない発熱がタオを襲った。ささやき続けた。私は。

自分の唇の中にだけ、その、だれにも聴き取られはしないささやきを、私の頭の中でだけ反芻する。...ねえ。

ね、

...ねえ...と。

どんな気がする？

...ねえ

どんな、...ね？

いま、...と

どんな気がする？

なにを？、と、私は

何が見える？

いま

ねえ、と。...君は

留保なき絶望の風景

何が見える？...と、そう

どんな？...いま

生まれてきたことをさえ後悔した、と、その

留保なき絶望の風景

ねえ、なにに、と、そう私は

その

生まれてきたことをさえ後悔した

どう？...いま

みずから燃え上がり、みずから、と。

その

君はいま、もう

焼き尽くすしかない、と、あるいは

みずから燃え上がり、と、私は、みずから

もはや、...ね？、と、その

風景、

焼き尽くすしかない

君は、...そして

私は

風景、...と

塗れる。私は、吐き出される彼女の体液に。あざやかにきざまれ始めるもの。その、私が見つめたその身体に、あきらかに、破綻。

もう

破壊。

見えますか

破滅。

あなたにも

すでに、

未来の

もはや

かけがえもない

成立できないもの。

輝きが

成り立たずに、手のひらの

その

中で

永遠の

最期の

きらめきが

ときを、もたらしてやらなければならないもの。死にかけた彼女は、もはや生き延びてはいない。夕オはいまだに、死に獲ていないだけに過ぎない。私は知っていた。最期に、夕オが自分を含めたすべてに抗うように立てた獣じみた声。割れた無防備な叫び声を、長く、激しく、立てて仕舞うのを。

つつまれる。

好き？

光に。

あなたは

つつまれていた。すべては。当たり前のこととして。裏口から

なになが
入ったキッチンのスペースの中にも。光は
好き？
群がり、
あなたは
散乱し、
好き？
氾濫していて、
なになが
相変わらずに、それらが
好き？
貫くすべてを、空気の一瞬のゆらぎひとつにいたるまで、あますところなく救済しようとしていることを。...見る。

見た？

もはや、

彼女の微笑み

容赦はなかった。

幸せそうな彼女の

キッチンに並べた赤いプラスチックの椅子に座って、ヴァンVânとその姉のイエンYênと、もう一人の老婆が耳打ちしあいながらささやきあっていた。老婆がひとりだけ私に気付いて、その眼差しに微笑をくれた。イエンが、私を見向きもしないままに、...彼、...と。
日本人よ。

Người Nhật

そう言った。

深刻な表情を好き放題に曝した彼女たちが、実際にはありふれた世間話に淫しているにすぎない事は、話し声など聴き取らずともすぐにわかる。私の頬が、眼差しを終には笑わせることないままに、老婆のためにだけ余所行きの優しい微笑を作るが、たしかに、老婆の方だって、私に投げてよこす微笑の眼差しは、結局はなにも、みずからの微笑にさえもふれてすらいなかったことに今更ながらに気付く。笑い獲はしない眼差し同士の、かすりもしない、ただ親密なふれあい。表に出ると、フエはいなかった。祭壇の周りにも、テントの幕の下にも。丸テーブルのひとつに、クイが媚びるように群がった近親者の集団をはべらせて、周囲の人々に好き勝手に話させながら、自分はひとりで沈黙していた。盛んに語りかけられる泡だった言葉の群れに、相槌さえうちもしないままに、そして人々はよくこんなクイに向って口々に話しかけられるものだと、私は不意に笑って仕舞いそうになった。

クイが私を、あるいは、その投げ棄てられた眼差しが不意に上向いた瞬間に、彼は見留めた。私を。近づいて微笑み、その手を握手に取ってやる私を、拒絶するわけでもなければ受け入れるわけでもない。そんな力などありはしないよ、と、そうとでもいいだけに、私の手のひらにふられるに任せて、クイは握り返すわけでもない。かならずしも。その半面の、容赦も遠慮もなく捻じ曲がった顔が、無残な戦争の後遺症の癒えることのない残骸を曝して、それを恥じるわけでも、誇るわけでもないクイの眼差しは、ようやくにして、その時、私に微笑みかける。...やあ。

こんにちは

来てくれていたんだね。

わたしはヒトです

馴れ合ったというのでもない、

あなたは？

希薄な親密さを、こ馴れた上品さのうちに、クイはかすかな頬のゆるみに表現しおおせていた。周囲にでたらめに群がった、クイに媚びいる話し声の、塊りになった連鎖がやまない。ただ、気の抜けたやる気のない茶飲み会合にすぎなかった、クイの不在時の人々のたたずまいは、もはやなにもなかったことにされて、葬儀には似つかわしくないほどの活気を撒き散らす。弔いなど女たちに任せておけばいいんだ。

...はじめまして

なぜって、

わたしは

俺たちは

ヒトです

女じゃないんだからね。人々の

あなたは？

あふれ返った声の群れに、そんな風にささやかれた気がした。
ややあって、何かを察したクイが、立てた指を上に向け、上にいるよ。

Vợ con

君の妻なら、上にいる。

ở đâu ?

微笑みさえしない眼差しには、奇妙に馴れ馴れしいやさしさが匂う。私は、かならずしもフエを探していたわけでもないままに、クイに首がふるえたほどのかすかな会釈を返して、階段を上る

。



フエが、どこにいるのかの、大方の察しはついてた。三階の、かつての親友の許に添うているに違いなかった。この家を訪れて、彼女が人々の前から姿を消すとき、それは彼女がそこにいるを事をだけ、意味した。

急な階段を上って、仏間とチャンの部屋を兼ねたその部屋の入り口をくぐると、ドアと言うものさえない吹きっ曝しのそこ、窓越しのやわらかな逆光の中、その女はそこにいた。

ベッドに腰掛けて、こちらのほうを向いてはいるものの、存在しない眼球は私のすがたのなにもをも捉えはしない。傍らに

寄り添ったフエは、私に一度だけ表情のない眼差しを

くれたが、想いあぐねたように黒眼を震わせ、その、

かすかに

潤んだ気配。なにか、

涙ぐみそうになる心境だか、感傷だか、こんな葬儀の日のチャンの傍らに、フエの鼻先にいつか嗅ぎ取られて仕舞っていたのかも知れない。このところ、と。

私は想う。

君は泣いてばかりいる。

私はまばたく。...かならずしも。...と。

ぼくは

ここに

いるよ

ここに

ぼくは

ぼくは

そばに

かならずしも、		いるよ
なにかが		きみの
鮮明に悲しいわけでもなくせに。その、私の不意の想いは、言葉にもしなければ彼女に匂わせさせえもしない。フエが、		そばに
		きみの
視線を流すように眼をそらし、空中の	ぼくは	
		そばに
何かに	花	
		ぼくは
彷徨ったそれは、ややあって、	ぼくは	
		きみの
結局は	鳥	
		ぼくは
チャンの横顔に	ほら	
		いるよ
墮ちる。	きみの頬に	
		きみの
チャンは、	かかる虹	
		いるよ
笑うしかない痴態を	ぼくは	
		ぼくは
曝していた。眼の	夢	
		きみの
周りにまわされた白い、	未来	
		ぼくに
薄穢れた布で目隠しを	そして	
		いるよ
されて、その	すべて	
		ぼくの
眼の在るべきだった	ぼくは	
		きみは
陥没部分には、若干の	きみに	
		ぼくに
皺によじれた、ウィンクを	愛されながら	
		いたよ
曝す下手糞な	生まれて初めて	
		ぼくに
眼の	きみが	
		きみの
落書きが	生まれてきたその意味を	

あつた。...なに？

知つた

そばに

なんなの？...これ。と、

見えるかな？

ぼくは

私がつぶやきも、気配に

ぼくの翼

いるよ

漂わせもしないうちに、フエは、

羽撃くぼくの

ぼくは

かならずしも

純白の翼

きみが

察したというわけでもないに

いま

そばに

違いない、

飛び立つよ

ぼくは

タオよ。

ぼくは

Thảo

愛

...ね？

独り語散る。

Anh à...

そして

...あの子の仕業よ。こんなことするなんて、あの子しかいないわよ。

...黙れ。ピエロどもめ

結婚するときに、初めてダナンの親戚の家に、フエと挨拶に回つて、ここに辿り着いたとき、私はチャンの滑稽さに嘖き出して仕舞いそうになつた。その日、夕方の紅蓮に空の片隅を染め上がらせて、朝焼けに似た空の破滅のあざやかな、あたたかな光線を好き放題に侵入させたこの部屋の中に在つて、チャンはベッドに片足だけを引っ掛けて、床に寝転がっていた。色褪せた、趣味と言うものを感じさせないキャラクター・プリントのピンク色のTシャツを、その重力に押しつぶされた豊かな胸まではだけさせて。彼女の姿が視界に入った瞬間に、私は彼女が、いわゆるまともな状態で生存している人間ではないことに気付いた。眼の前の人体に比べれば、あきらかにトゥイThúyのほうが人間種として、立派に知性を脳組織にぎざんでいた。事実、トゥイは私たちとは違う知性のありようをしているだけであつて、彼女の内部にはあからさまで強靱な知性が巢食ひ、そして、彼女に固有の視界を強固に、整然とかたちづくっていた。反して、眼の前にあるのは、なにもかもが崩壊した、文字通り廢墟でさえない残骸の散乱に過ぎなかつた。

My friend

友達なの...と、フエの

My...

言うその

Trang

声は、ただひたすらにその音色を

My...

冴えさせるだけで、かすかな

She is ...

心のひだの動きさえも、もはや

My...

伝えはしない。むしろ、

Your friend ?

「...君の？」

と。

そう言った私の声のほうか、あきらかに

Da

おののいていた。フエの

その、

冴えた冷淡さに。「そう...」

友達なの。

ささやく。なにもかも諦めきったかのように。フエは。フエが瞬くたびに、そのまぶたから涙が零れ落ちるのではないかとあやぶみさえしながら、そんな事など有り獲ないこともまた、私ははっきりと知っていた。フエの冷酷な眼差しには、いささかの感傷さえ入り込む余地は無かった。ただ、眼差しにふれるものに、自分の網膜を好きなだけ、好きなようなように触らせて恥じない、どこか不埒な高慢ささえもが、そこには目醒めていた。ベッドに横たわったその女のはだけた、腹部から片胸の膨らみに至るまでの肌に、あきらかに色づいた年の頃の女の、あからさまな煽情さえもがあった。それは、華奢ではあってもかならずしも性的な魅力に富んでいたわけでもないフエのそれに比べても、あるいは、比べるべくもないほどに、女の気配を生き活きと曝け出していた。...ほら？

欲しい？

そう、耳元で

かすかに軽蔑的な吐息とともにささやきかけられたかのような。そして、その、目醒めきった性の誘惑を無造作に投げ棄てて、沈黙のままに息遣うだけの身体には、老いさらばえた、若々しい肌づきの、眼窩を陥没させた女の顔が表情もなくくつつけられていた。

俺の魂はすでに滅びていた

半開きの唇が、寝息のような

俺はいま、壊滅する

息を

吐き、

吸う。その

音が、かすかにだけ耳にふれる。

あしたの天気は晴れですか？

開け放たれた窓の向こう、主幹道路のバイクと、車の音響が耳にさわり、そして、夕暮れは

雨が降らなければ、わたしたちは

窓に、その丁度半分だけを曝していた。

オレンジ色に近い光線の光に差し込まれて、光の色彩にあられもなくすべてのものは、着色されていた。床の上の女の地肌も、フエの首筋、二の腕、そして、

部屋の壁、仏壇、ベッド、その

乱れ放題のシーツ、ずれ落ちかかった毛布もなにも、その

固有の色彩に、空の新たな色彩を装って、

人間の髪の毛の匂いは

匂わせる。自分勝手に

屠殺された豚の皮のそれに

いつものように、

似ている

破滅していく空の瑞々しすぎる色の戯れの、その繊細な手付きを。

...天国に墮ちた腐った豚ども

床に投げ出された女が、美しいのか、そうでは無いのか、私の眼差しは判断しきれない。美しい形態をしていたのかも知れない。そんな程度の完成度には値しない、品のない産物だったのかも知れない。いわば

野晒しで、美しさも醜さも志向しない、うち棄てられただけのその

顔は、もはや

My...

Bạn tốt

Đạ

...そう

あなたは

わたしに

ふれない

あなたは

わたしに

ふれなかった

あなたは

わたしに

ふれない

あなたは

わたしを

ふれなかった

それら一切の美醜の判断を受け付けることなく、その本来の形態だけを、明け透けに曝すだけだった。チャン。話して聴かされた。フエに。眼の前の壊れた女、チャンが自分の眼を抉り出したときの、発見の顛末をは。チャンの、そのかたちを変えたある種の自殺、あるいは自裁、もしくは自己救済は、その正確な意味づけをチャン以外のだれにもあかしはしないままに、たしかに悲劇的な事件だったには違いない。とはいえ、

煌きよ

夕焼けた日差しのおざやかさの中に

あなたが

星々の

自分勝手に憩うその

わたしに

煌きよ

存在は、どこにもその

ふれない

恒星たちはいま、孤独にしずかにそれら自身の夢を見る

身の悲劇性など残存させはせずに、単なるできそこないの暢気だけを曝しているしかなかった。いかなる気品さえも、持ち合わせてはいない。

ベッドに寝かせ直すだけの力のないフエの代わりに、私はチャンを腕に抱いた。チャンの四肢は抗いもなにも、私にふれられている自覚の存在をさえ曝しはしない。単なる肉の塊にすぎなく想われたそれを、ふたたびベッドに、私が横たわらせようとした瞬間、チャンの唇が一気に開かれ、その

あなたの

顎が外れて仕舞いそうな開口を

わたしが

数秒間静止しさせ、

ふれなかった

叫んだ。

叫ぶためだけに俺たちは生まれた

あ

不意に、

泣き叫びながら生まれた俺たちは

ああ

チャンは、その

わめき散らすためだけに生まれた。...知っているか？

あああ

喉の奥から

あなたは

ああああ

獣じみた太い、低い、声帯いっぱい

知っているか？

あああああ

罅割れさせた

俺は

あああああ

長い絶叫を。

午前9時をまわりかけたばかりの、浅い午前の、未だに朝と呼ばれるしかない逆光の中に、チャンに寄り添ったフエの、足元に膝をつけて私は彼女を見上げた。

見い出せ

フエを。

君は

愛しい女。

君だけに固有の屈辱と

私の愛する、そして、

容赦もなく赦しがたい君本来の

彼女が私であることをは

絶望を

知っている。繰り返される転生。際限もなく。時間の流れなど嘲笑いながら、過去も未来も現在も、すでに知り尽くされている以上、もはや時間がまっすぐに流れていることなど不可能だった。時間は、むしろ、いわばただ空間に無造作に点在するにほかならない。知っている。匂う。フエの体温が、その体臭を巻き上げて、匂わせる。私の鼻腔の浅い部分に。私の手のひらが、フエの太ももに添うて、

あなたを
愛撫の意味をさえ持ち獲ないままに、やさしく
わたしが
ふれて、そっと、
ふれない
ただ、なぜだ。...ね？と、フエの眼差しは私に同意を求めたが、その、何に求めたのか語りかけ
もしない理不尽な眼差しを、私は赦した。そして、
血まみれの薔薇を
微笑む。
君に
彼女のために。その肩越しの向こう、窓越しのベランダに、
...ほら
フエは
これがぼくの心臓だよ
血を流していた。
頭の先から片足を生やして、でたらめに左右の位置をさえ間違えた腕を腹から突き出して、うごめきさえしないフエが、色彩をなくしたまま、ベランダに樹木のような不埒さで生え、翳るしかないその形態のうちに血を流す。時間を逆流さえさせた遅延のなかに、血は、その色彩をだけ鮮烈に匂わせて、その血、斜め下方にどこまでも堕ちていく鮮血の三本の筋。
美しい
素直にフエの顔をかたちどったその翳りの顔は、私を見つめながら、...無意味だ、と。
あなたが
あなたは
私は
わたしを
いつでも
想う。もはや、
ふれなかった
美しい
なにをも見出し獲ないのなら、目も口も開け拡げていることに、意味など一切在りはしない。
いっそのこと、なにもかも燃え尽きて仕舞えばいいのに、と、私の心が
君という、この世の奇跡
かすかなわななきとして、こまかな心境をふるわせる。心境とさえ言獲ない単なる大気のふるえのようなもの。かすかすぎる風の中に、
ぼくは知る。君こそはこの世界が存在する理由
おののたような野晒しの花びらの、決して見い出せはしない震動の気配の名残りのようなもの。
もはや。
わたしは
やがて眼をそらして、丁寧に、寄り添うように自分の膝に据え置かれていたフエの、手のひらに
私は唇をふれた。
ぼくは
夢を見ていた。
いつ
浪立っていた。海は。
きみに
その、
出会えたの？
原始的な、それ。野生の海は、そしてそれはいまも、あるいは地球の滅びのときに在ってさえも
、結局は、原始的で、あからさまな野生をしか曝し続ける以外にすべを持たないのだった。
いつ
むせ返るほどの、
君を
潮の臭気を
愛したの？
撒き散らしながら。
海に浮び、浪にもはや侵食されて、同化されて、次第に
鳥たちは
浪そのものに喰いあらされていながらも、私の肉体は
堕ちた
崩壊していくしかなかった。
失心の中に

下半身などもはや

やがて

浪に飲み込まれてその

羽撃きながらも

海の巨大な鼓動そのものの不整脈の中に飛散させられ、あるいはふたたび見出された両手のひらさえおののいた痙攣のこまかな震えの中に、粒子と化して散り散りに舞い散り碎けて消えうせていく。

...ほら

逆流する時間の流れの中で、どうしようもなく

いま

その崩壊など

ぼくは、すでに

曝すことも、実現することさえも叶わないままに、

目醒めていた

無際限に崩壊しながらも。私の肉体は

あ！

そのものとして息づき続けるのを

いま

やめない。

天使が笑った！

とめどもない私の崩壊は、永遠に終焉することのかなわない、留保もない不可能性の顕現そのものに

鳥たちは

過ぎなかった。

いつか

あとかたもなく

すでに

崩れ去っていく私の肉体が、

墮ちる

時間の逆流の中にいよいよ強固にその形態を息吹かせ、息づき、私は目醒め続けていた。一切の、色彩の喪失も、かすかな色褪せさえもその身に実現しはしないまま、永遠に。畏れた。ひとりで、私は

ほら

おののく。その、

野生の

気が遠くなるような永遠の、無際限な

太陽は

時間の膨大さのなかに、

もう

失心することさえ、一瞬たりともできない私は

昇った

眼醒め続けて、立ったまま、ブーゲンビリアの木陰の下に、私に穢去れる付けるフエは、唇を自分で咬み、いつか切り裂いて、唇に血をにじませていたのには、私は気付いた。彼女を羽交い絞めにして、抱きしめたときに。

もはや、私の萎えきったそれは、行為を成立させ獲てはいなかった。たんなる、打ちのめす腰の殴打の執拗な暴力だけがフエの尻に繰り返されていたに過ぎない。フエが、ただ冴えた眼差しをだけ曝して私のなにをも破壊しない暴力に屈した。

屈辱に塗れるべきだった。フエは。私に、かならずしも穢されるわけでもなくて、蹂躪されていたのだから。羽交い絞めにされた上半身は、日差しの中にただそのあざやかな褐色を曝した。唇が

好き？

血をにじませ、顎に

わたしの

垂れた。花々が、

くちびる

私たちを穢した。終に、立ち続けることも出来なくなったフエは、あえて縋りもせず私の羽交い絞めに拘束した腕に、その身を

好き？

預けるしかなかった。

わたしの

大気の中に、淀み、滞ったままの

腫
延焼の臭気が、覚めやらない。鼻にこびりつて苛み続けるにもかかわらず、それらは嗅覚を麻痺させさえしない。
その、無際限なまでに複数のもろもろの臭気の、固有の束なりあった雑多な鮮度を無造作に、空間の中は曝してうち棄てて、

花々は香った。

私たちの周囲に、その

声
花々の色彩をさえ含めて、ひたすらあざやかに色づいて、花々が匂い続ける。執拗な、ざわめき立った臭気の群れを背景に、むしろそれらに埋没して果てさえしながらも。
力尽きたわけでもなく、むしろ飽きて仕舞ったに違いないことすら明確には意識できないままに、私はもはや体中を脱力させるしかないフエを、腕に抱いた。まるで、彼女の身体はすでに、彼女の肉体が死を体験して仕舞った後のような、そんな、ふしだらな崩壊をきざむ。
縋りつくすべもなく、私の腕に身を投げ出ししかなかったフエは、腕の中でその反り返らされた首をさえ揺らす。ただ、だらしもなく。
家屋の中に連れ込む私に、一切の抗いの、意思表示さえ、その気配のうちにも匂わない。
二つめの居間の、ソファに横たえさせると、その唇が一度、かすかに震えて見せた後で、つぶやかれた言葉。...ねえ、と。

私は聴く。

どうして、...

「あなたは私を、

壊そうとしたいの？」

歎きの気配さえもなく。...私は、君に、手をふれることさえできなかったというのに、なぜ、
君を壊そうとするのだろうか？何かを、と。

想う。

壊すことなどできるはずもないのに。あるいは、むしろ、と。

おののき？

壊されることさえ、できはしない。

おののく。私は。

私を見つめないフエの眼差し。天井に投げ棄てられたその眼差しの容赦のない孤立に。

見つめていた。フエは。天井に

張り付いたそれ。色彩をなくした

形態の残骸。...流れ出すもの。

歓喜の閃光が私を貫く
横向きの鮮血が、それだけが他のすべての色彩を嘲笑うかのように鮮烈に、
歓喜の雷が、いま、私の
ただ、

肛門を灼いたのだった

赤く、チャン。
色彩をなくしたチャンが、身じろぎもしない完全な静止を曝してみずからの、肌の翳った昏さだけを見せ付ける。
フエの眼差しに。
私はそして、フエに口付けてやるしかなく、フエはそれを受け入れるしかなかった。...壊れてるの。

好き？

わたしの

声

Anh...

ねえ

...Tai sao

ね？

Bầu trời xanh

ね？

眼を閉じて

見つめてごらん

眼を閉じて

嗅いでごらん

眼を閉じて

聞いてごらん

わたしは

あなたを

見ていました

もう
と、そうフエは
花は
言った。初めて
咲いています
チャンと出会ったときに。ベッドの上に身を横たえさせられて、その瞬間立てた獣じみた雄た
けび、...絶叫、...悲鳴？それは、ほんの十秒程度、ひとえに吐き出されるチャンの息が尽きると
ともに、何事もなかったようにもはや、立てたチャン自身にさえ忘れられていた。
すでに
...なに？
もう
なにかありましたか？と、
いつでも
不意に
花は
振り返って微笑まれた、そんな錯覚を、その、安らかでさえない、何をも語りかけない目隠しの
窪みに、私は見出ししていた。不意の驚愕に曝されて、言葉さえなくした私に氣遣かったに違い
ないフエは、いつか私により添いながら、ささやいたその、...壊れたの。
こ、...
もう
その言葉が耳に反芻された。なにが？と、
こわ、...
すでに
ややあって
われ、...こ
どこにも
フエを振り向き見た私に、ただ
...わ、れ
かしこにも
慰めるやさしげな
こ。...わ
眼差しを曝し、フエは何も言わない。...知ってるわ。
Em
彼女は。
biêt
なにもかも。
Em
言った。...なにを？
dã
そう、問い返すべき言葉が
biêt
唇の先に、こぼれそうになりながらぶら下がったが、なにもかも、
dã
眼にふれるものすべてをすでに
biêt
赦して仕舞ったのだと、やるせない
dã
諦めの気配をただ
em
無防備に漂わせたフエの眼差しが、私を
biêt
沈黙させた。...そう。
dã
壊れたの。
em
私は想う。...そう、...と。
biêt
そして、と、そして、なにもかも、
em
知ってるの？...頭の中に、...彼女は。独り語散て、声などつぶやき出しさえしない。もう十年ば
かりずっと、彼女はここにこうしている、とフエは言った。自分で眼を抉り出して仕舞ってから

。その日の記憶を、想い出そうとするわけでもなく、なにか想いだし、そしてフエはその記憶にもはや、なんらのおびえも恐怖さえも感じられはしなくなった。チャンがそれをした日、茫然としているだけのクイたち、ただ自分勝手に、なにも考えられない意識の白濁と戯れるしかない彼らを棄て置いて、ややあって、フエは救急車を呼んだ。日差しの中に、冴えた意識を白濁させたまま。救急の隊員たちは、語りかけても要領を獲ないクイたちの意識の破綻を疑った。哀れみながら、彼らはフエに尋ねた。...いったい、

我等に我等の救済のすべを教えよ

なにが起こったんだ？

フエは答えた。...わたし。

わたしが、やったのよ。

想いつめた気配さえもはやなく、淡々と

微笑みさえしながらつぶやくフエの

その独白を、駆けつけた警官たちは

真に受けた。救急隊員たちは、

寄り添うように警官たちと

うち合わせ、フエは連行された。嘘などつくすべもなく、その

日の個人的な事実を自白するしかないフエは、すぐさま同情と供に解放されて、連行された当初に、気違いのあばずれ呼ばわりした彼らはすでに、彼ら自身がフエをそう罵ったことさえすでに忘れていた。フエには忘れられなかった。その、あまりにも正確すぎる言葉が、自分のすべてを表しているとしか想えなかったから。警官たちはやがて、いつか、唐突な自殺未遂のあまりに猟奇的な結末に、この歳若く清楚を極めた眼の前の女性は混乱してして仕舞ったに違いないその心の現状を、もはや哀れんで歎いてやる以外のすべを持ち獲はしない。事実、だれもかれもが正気を失って、まともな対応さえ出来ないでいる中に、このけなげな女性だけがまだしも、ささやかにでもまともだったのだ。

二日間だけ拘留されて、解放されたあとのフエは部屋に閉じこもった。かならずしも閉じこもったつもりではなかった。単に、何をする気にもなれなかつただけだった。会社はそのまま、退社することにした。どうせ、来月になればこの町を離れるのだった。解放されたあとの三日目に、ようやくフエはクイたちの家に行った。慰問というべきだったのだろうか。その、自分の訪問の意味までもは、フエは自分で解釈し切れなかった。羽交い絞めにされ、許し難い犯罪者として連行されるフエを、何の表情さえ浮かべずに、むしろ確かに、と、そうだったのかも知れないと、そんな、その、あの、やさしいチャンを壊して仕舞ったのはこの穢らしいフエに違いないと、そんな、在り獲ない眼差しをさえ、縋るように浮かべていた彼らに、

我は我が

フエは

咎を知る

逢って遣らなければならぬ気がしていた。たとえ、彼らに対して、何をすべきか

わたしの涙よ

わからないままだったしても。

ただ

彼らへの憎しみも、嫌悪も

溢れ出よ

ない。そして、

もはや洪水の如く

チャンにさえも。チャンは一人で、自分勝手にすべてを壊して仕舞った。もっとも犯罪的なのは、チャンみずからだった気がした。クイのうちは、いつものように氷を売っていて、クイが仕事をやすんでいるらしい事は、店先にクイのバイクが止められていることが、明示していた。いつもだったら、多忙な名士のクイは日中に家になどいない。午前十一時、日差しは

その

もはや

まばゆい光の中で

正午の明るさを獲得し、大気が

人は

温度を

初めて終に孤独を知った

孕みこむ。そのままじかに肌にふれる。

軒先に座ってるヴァンは、フエを眼差しに見留めると、言葉をかけようとしたみずからの唇が開きかける前にはすでに駆け寄って、そして、その眼差しが捉えたけなげな姪っ子を抱きしめた。...なにを、...と。

あなた、なにをしていたの？

どうして

元気だったの？

空が青いのか

豊満で、

考えていたら

生暖かい体温に羽交い絞めにされて華奢なフエは、

笑えて来た

語りかけられるままに微笑み、その

不意に

表情。

...どうしてだろう？

眼差しが捉えたヴァンの、あまりにも性急で、がけっぶちの、追い込まれた思い遣りの表情に歎かわしいほどの違和感を感じながら、いつか笑い出して仕舞った自分をフエは、彼女にしがみついてその首筋に顔をうずめ、声を上げて泣き出して仕舞うことによって、ごまかした。

どうして

かろうじて。

海が海が青いのか

ヴーは気を取り戻していた。奥のキッチンで、

考えていたら

一人で早めの昼食を取り、フエに

涙が

哀れんだ眼差しをくれた。...大変だったろう？

あふれて来た

なに？

勝手に

警察に、...そう。

地獄の焔よ

大変だったわ。と、声を立てて、泣きながら

俺を灼け

笑ったフエを、ヴーはただ、けなげに想った。

階段を降りてきたクイが、その半面に砕けた顔を無防備に、いつものように曝しながらフエに微笑み、ありがとう、と、その短い感謝の言葉をかけると、これから病院に行く、と、クイは言った。

Là

だれの？

ai

問い返したフエは、チャンがまだ生きていることを、まだ

どちらへお出かけ？

知らなかった。両眼を抉り出しても人間が

...あら

生きていられることを、フエは

やだ

初めて知った。チャンの生も死も、フエは

どちらへお出かけ？

考えもしなかったことにいまらさに気づき、いずれにしてもあきらかだったのは、あの、

ちょっと、そこまで

フエの知るチャンがもはや

この世界の尽きた果てまで

永遠に失われて仕舞ったことで、彼女が

...あら、やだ

未だに生きているのか、死んでいるのか、警察官も

どちらへお出かけ？

尋問のうちに告げず、気を遣った家族のものたちも、チャンの

ちょっと、そこまで

話など一切しようとはしなかった以上フエは、なにも

どこかのブラックホールの特異点の先まで
知らなかったのだった。知らないことさえ、フエは意識していなかった。...そう、と、
あら...

フエは
素敵ね

独り語散、...彼女、元気？

khỏe

そう言った、自分の言葉を、フエは恥じた。

không

...どうするの？

không

フエが言う。

khỏe

不意に、私を

không

見つめたフエは、傍らのチャンを慮る気配さえ見せながら、「私が死んだら、...」

khi

「どうしますか？」

em

ささやく。階下に、

chết

太鼓と銅鑼がふたたび立て続けに

anh

鳴らされて、新しい

làm

忌問客が到着したことを知らせた。いつか、

gì

ギターと民族楽器を抱えた楽団が呼ばれて、追悼の音楽を耳障りにもかき鳴らし始める。...死んだら？

と、「...きみが、死んだら？」言葉もなく問い返す私の眼差しに、フエは反応をしめそうとしな
い微笑の数秒の後で、不意に、ようやく素に戻ったように声を立てて笑ったフエの、その身を振
った瞬間に彼女の髪の毛の匂いは立つ。散る。飛散する。至近距離に近付けられた唇が、...悲
しい？

buồn

と、そう言った。もちろん、と、私の眼差しがささやきかけたに違いない。フエは、なにかに満
足した眼差しを曝したが、...でも。

anh

悲しみ。唐突にふれて仕舞った容赦もない悲しみに、...そうね。フエは、自分自身おののきな
がら、「...寂しいわね。」

buồn

独り語散る。唇がどこにというわけでもなく投げ棄てなければならなかったささやき声として。
背後に人の気配がした。そして、床に粉碎されたグラスが割れて飛び散る鋭利な音響と。タオ
、...と、

Thảo

短くその名前を、彼女を見向きもないままに、フエは言った。私にだけ聴こえるように。

buồn

振り向き見たそこに、入り口を入ったすぐの日影、タオがひとりで突っ立っていた。両手を為すす
べもなく垂直に垂らして、なにかも放棄して仕舞ったことを、だれにもかれにも教えて、理解
させなければ気がすまないとしても、そんな、自分勝手に

ぼくは見つめた

茫然とした眼差しを

日差しの翳りに

曝して。

たたずむ君を

タオの足元に割れていたのは、いかにも凶太いどんぶり皿だった。彼女が割って仕舞ったのは、
チャンに食わせるためのおかゆだった。タオはいま、なにが起きているのか、自分が何をしでか
したのか、なにも理解できないままに、ただ、そこで、なんでもないなにかの犠牲者であるより
ほかにすべはなかった。

フエが、私の頬に不意に口付け、その一秒もない一瞬の後に、立ち上がるとタオに微笑む。

Em...

大丈夫。

Không sao

なんでもないわよ。

...O.K. ?

...ね？

Em...

タオが、フエのみならず、そのフエの声にさえおびえているのは明らかだった。フエはいつでも、タオを、誰の眼差しのうちにもあきらかに虐待していた。身体的な不意の、理解不能な殴打のみならず、言葉の容赦もない暴力をも含めて。軽蔑した侮辱した眼差しのささいなふれあいをも含めて。私の眼に

...死になさい

それは単に

死滅しなさい

無残だった。フエにとって、

生まれたことそれ自体を

タオの遣ること為すことが、拒否と

後悔しながら

否定の対象だった。まるで、

滅びなさい

...と、クイは

自分がいまここに在ること自体を呪詛しながら

つぶやいた。いつか、

生きながらにして

あの母親の仕打ちみたいだ。

腐敗して仕舞いなさい

...と。フエの、

人類が見出し獲るもっとも悲惨な

母親の。彼は、そう、そして

惨劇として

いつかの日、香草の下ごしらえをしていたタオの、その籠いっぱい香草の束を、何も言わずにフエが投げ棄てて、見あげた眼差しのうちに、もはやなんの非議も、疑問をさえも投げかけようとならないタオを、立ち去り際、いきなり振り向いてひっぱたいたときに。

死滅すべきものはすべて、死滅しなければならない

叔母のイェンはあわててフエに、気を遣って慰めかける声をかけながら、その腰を抱いて引き離すのだが、フエ自身、それ以上の折檻をなど

わたしは叫んだ

獣たちは

求めているわけではない。

人々の眼差しに取り囲まれたその

誰よりも速やかに

すぐさま気を取り直したフエが、...ごめんなさい。

真ん中で

疾走しながら眼差しに

もう、大丈夫。でも...

愛を求めて

彼ら固有の風景を見出す

ね？

ほら

...だって、...口籠り、

...ね？

思いあぐね、そして、

でしょ？

つまりは大丈夫よ。もう、

そう...

心配しないで。...と。

ね？

あとには、呆然として、自分が犯して仕舞ったに違いない犯罪的な行為にひたすらな悔恨をいなく少女が取り残されていた。フエの一瞬の逆上の意味も、理由も、フエ以外にはだれにも理解できない。...大丈夫。

không

私は、

sao

立ちつくした夕オに近づいたとき、夕オが一瞬、予測された折檻に身を固め、あからさまなおびえをその身体に曝したのを、眼差しの群れは見逃しはしなかった。

フエは、床に飛び散ったおかゆの残骸に、その素足を穢して仕舞うのにも構わずに、夕オを抱きしめた。

床には、フエに踏みつげられたおかゆの残骸。

小柄なフエは、華奢な十一歳とはいえ、より若い世代で、しかも発育期の少女と並べば、その身体に殆ど変わり映えはない。私の眼差しに、やさしくいたわる女と、縋るような眼差しのうちにいたわれる、年期の違う同じような身体のふたつの差異するたたずまいが、なにか、あからさまな倒錯を感じさせた。

夕オは、不意の抱擁に戸惑うことさえ出来ずに、ただおびえた眼差しをそらし、見つめるべき対象を失っていたそれは無防備に私を見つめて仕舞うしかない。...なに？

どうすればいいの？...と、その、言葉もないままに訴える眼差しを、しかし私は無視した。床に散ったおかゆは無造作にフエたちの足元の周囲を穢して、ただ、見苦しい。フエが、あるいはベトナム人たちが、私をも含めた愛するものたちに無差別にする、耳の裏の匂いを嗅ぐ仕草さを、フエは突然夕オに曝して、その仕草さにさえ夕オはあきらかに傷付く。いたたまれないほどに傷付き、蹂躪され、虐待された少女が、眼の前に為すすべもなく立っていた。フエのやさしい抱擁は、夕オをむごたらしいまでに、いま、打ちのめすしかない残酷さを曝した。フエが、夕オの頭をなげた。傍らの背後に、

いま

チャンの息遣う音が

聞こえますか？

聴こえていた。

わたしの

夕オ。

鼓動が

そのあまりにも撫で肩の曲面は、なんということもないTシャツをさえふしだらに見せた。驚くほど長くのびた首が、やっとの想いで頭の重量と、そこに密集した豊かな髪の毛を支えた。

黒眼がかすかにふるえて、私は眼をそらした。布巾かなにか、持ってきなさいよ。

...その、私には聴き取れなかったフエのささやき声が、彼女の耳にはふれていたに違いなかった。フエの抱擁に抗うように身を振って、夕オはその腕から自由になると、一瞬、ふたたび、その表情を失ったままの顔を曝した。

いま

繊細な瞬間があった。

月が翳った

一種の空白に似た瞬間があって、そして、すぐさま夕オは赤裸々な羞恥に、両頬から、その胸元までをも染めた。もはや耐えられないとでも言いたげに、夕オは踵を返して駆けて行った。

誰もいなくなったフエの傍らを、私は見ていた。フエは、うな垂れて立ちつくしていた。むしろ、虐待されているのは自分なのだと、初めてその隠された真実を曝したような、そんな物言わぬ悲痛な気配を、その背中私の眼差しいっぱいには拡げて、見つめられることを、求めもせず、かつ、かならずしも惜しもうともしない。...好きよ。

ね？

ややあって、ようやく私を振り向き見たフエはささやいた。

...知ってた？

私は、好きなのよ。

わたし

眼差しはむしろ、留保もない

好きなの

あの子の事が。

ね？

絶望を、あるいは、

あなたが

諦めを曝す。倦む。フエは、あきらかにその、自分がそのときに抱え込んでいた感情のすべてに倦んでいた。夕オは帰ってはこなかった。床の上の陶器の破片も、飛び散ったおかゆの残骸も、だれにも片付けられもしないままに、私たちは時間を浪費した。フエはやがて私の膝の上に座って見せ、首をかしげ、...ね？

んー...と

ささやく。その、私以外の誰かをいつくむしむ

...ん

眼差しが。...信じる？

ね？

わたしはあの子を、好きなのよ。

ん？

私はフエの背中をなげた。警察の拘留を解かれたその日、家族は、アンさえも、迎えには来なかった。友達のハーHàを呼び出して、家に帰りつく。ハーの自分を慮る眼差しに、彼女は私がチャンを殺して仕舞ったのだと、そしてだれもがいまや、そうすでに知っているのと変わらない確信を、心のどこかにさまざまに共有しているに違いないと、フエは不意にそう思った。その認識に、抗う気にもなれなかった。ハーの背中に、ときに小柄なチャンは横顔をうずめながら、その身の不幸を悔いた。その、鮮明に悔いられた不幸が、誰の身の不幸なのか、フエには分からなかった。だれが哀れみ、いつくしまないではいられないほどに不幸なのか、フエには分からなかった。アンが轢き殺して仕舞ったおかげで、もはやこの世には存在していないハンHàngの不在に、むしろフエは感謝した。午前十時。まだ、日差しにはかすかにでも朝の光のやさしさが名残った。フエの頭部は、ハーの背中中の震動を感じる。

家に帰ると、誰もいなかった。鍵さえかけられていた。アンか、ダットがかけたに違いない。フンたちに顔を合わせなければならない正面口から、フエは家の中に入る気にはならなかった。振り返ればそこにいたハーに手を振って、...いいわよ。

ありがとう。帰っていいわ。

フエを案じるハーの眼差しに、犯罪に手をそめた、穢れた、滅びるしかない哀れな人間に対するいつくしみが、これ見よがしなほどにいっぱいにあふれていた。その

あなたは

眼差しに、フエは

もう

憩うしかなかった。

滅びてしまったの

ハーだって、かならずしも危険なフエに、うかつには近づいていくはないに違いなかった。散々慰めの言葉と、その身を案じるやさしい言葉を撒き散らしたあとで、想い残すことなく、二度と振り向き見もしないままに、ハーはバイクで

あなたは

立ち去った。南京錠がかけられたままの、シャッターの前の

もう

直射日光にフエを、ひとり

裁かれてしまったの

放置して。

もはや

立ちつくすかないフエは、そして、

救われ獲るすべさえない

立ちつくしかなかった。裏門の前の細い土の道を、数台のバイクが通り過ぎ、老いさらばえた女か、群れなした子供たちがときに歩き去る。だれも、フエのほうをは見ない。なぜなら、彼女がそこにいることに、だれも、なにも気付いてはいないのだから。いつも不思議だった。どうしても、だれも、その眼差しを、道の脇のブーゲンビリアの樹木とバナナの木の向こうにまで、投げてよこそうとはしないのだった。そこに、そんな家屋など存在してはいないかのよう。なにかの禁忌として禁じられ忌まれている気配を曝したわけでもなくて、

鳥たちが羽撃くがままに

ただ単に。

私たちは任せよう

誰の目にも触れない。たとえ、

それら翼は知っているだろう。彼等の

と、

辿り着くべき場所を

想う。たとえここで、いま、フエがチャンのようにその眼を自分で抉り出したとしても、あるいは、獣じみた声を上げて仕舞ったとしても、誰も、それには気付かないに違いない。フエの喉が立てた獣の叫び声さえ、本当に、どこかで野生の獣が泣いたのだと想って仕舞うのだろうか。

蝶の羽撃きには、失心がある

飼い馴らされ、野生などとつくに失った、

あざやかで取り返しの付かない

穢らしい

取るに足らない失心が

放し飼いの犬どもしか徘徊しないこのあたりで。ブーゲンビリアの花々の陰に、枝にぶらさがったかのように反対向きに、

...それでも

その頭を曝したマイを

わたしは

見た。でたらめで、もはや

ここに
形態をさえない体躯に伸びた首が、溶かされたチーズのように
いたよ
たれさがって、ようやくのことでその頭部を吊り下げていた。色彩のない
ここに
それが、くぼんだ、穴ぼこをみつつ、無様に
わたしが
散らしていたが、流れ出す、それ。...
いるよ
血。...鮮血が、
わたしは
いよいよあざやかに上方に、どこまでも伸びていく。
唇に沈黙を
見つめるフエの眼差しにさえ
微笑みに猛毒を
気付かないままに、マイは
そしてぼくらは
フエを
失明した
見つめていた。昏く、翳り、為すすべもなく、そこに存在しているマイは、歎きの声さえたては
しない。想い出した。疲れた、と、ただ一言だけその背中につぶやいたとき、
あなたは
疾走するバイクの風の中に、聴き取れなかったフエの
殺されて仕舞った
声を、ハーはあのとき、
もう、あの日の
聴き返した。ほんの数分前の、
朝に
あのとき。
自分の流した血にまみれて
フエは答えなかった。変わりに微笑みだけを返し、その、投げ返された微笑を見出したもの
など、だれもいはしない。
叫ぶ
日差しの下、花々は眼差しの先に
ぼくは
散っていた。
獣のように
フエはシャッターに背を持たれ、地べたに座り込んでいた。コンクリート舗装もされていなか
った、当時の土の地面が、じかにフエにざらついたその触感を投げかけた。フエは
聴きなさい
眼をとじる。日差しの温度が、
いま
皮膚に
花が咲きますよ
ふれた。
20Hz以下のやわらかい微音を立てながら
眠いわけではなかった。日差しがあまりにも鮮明に過ぎて、まぶたを閉じるよりほかに手立てが
ないのだった。見つめるには、無慈悲なまでに明るすぎる光満ちた風景が、眼の前に拡がって
いた。
醒めたままに、やがて
包みこんでくれ
失心して仕舞ったのに違いなかった。やがて、
俺を
その、
限りもない愛の光で
いつか、終には、フエは、かつて、そのときに見た風景を、その、閉じられた眼差しに不意に、
ときに、見い出していた。夢。...かつて見た、かつてその身に刻まれたことのある最期の
...夢
風景。雪が
夢の人
降る。このベトナムに、

きみは
在り得ない異常気象の夏に、雨季の
ぼくの
雨のふれる中以外には途絶えることのない永遠の、
夢の人
夏であるべき、その気候を裏切った降雪に、見渡す向こうまでもが雪にうずもれた。何人もの、
ただでさえ死にかけの、雪に不慣れな人間たちが無様にも死んで仕舞ったことなど知っている。
そのときに、千人近い人間たちが、それぞれの事情と必然のうちに、純白の雪の中、為すすべも
なく命を絶たれたはずだった。フエの周囲の、数キロの半径の中で。雪が
笑っていて
墮ちつづける。
...いとしい人よ
抱きしめた肌に、いまだに
たとえ、いま
暖かさを維持したその少女の亡骸の温度が
この世界が減びてしまったとしても
残る。
記憶の名残りとして、そこにあきらかに残存し、いまだ発散されている発熱そのものとして。
息絶えた少女はもはや、鼓動も感じさせず、かつて耳の至近距離にひびいたかすかな息遣いをさ
え立てないままに、首筋。ながい、おどろくほどながい首がもはや力なく、へし折れたようにそ
の撫で肩にのけぞってかかる。
あまりにもこれ見よがしに脱力した肩を、フエの手のひらが抱いていた。仰向けの、のけぞった
眼差しが見開かれたままなのは知っている、そのいま、その、息絶えた眼差しは目にはふれない
。無様に、向こうの方を見ているだけなのだから。その、もはやなにものをも見てはいない眼差
しを投げ棄てて。
十六歳の、自分を愛した少女を殺して仕舞ったフエは、彼女が垂れ流した絶命の体液と、汚物に
塗れた。雪が
いま
降った。
ぼくらは愛の歌を
もはや、
歌うのだ
生き延びられる場所などどこにもなかった。海へ、と、フエは想った。覚えていた。フエは、そ
の
引き裂かれた心はやがて、羽撃くだろう。あるいは
想いつきの唐突さを。想わず、フエは
吹き荒れる風の中にさえ
声を立てて笑って仕舞いそうにさえなった。...確かに、と。
やさしい声が聴こえたよ
そう想う。確かに、この
やさしい君の声がいま
海沿いの街に、
聴こえていたよ
この町が雪に埋没して仕舞ったならば、もはや辿り着けるのは海、雪につつまれた
いいよ
海にでも
眼を閉じて。もう
辿り着いてやるしかない。
なににも傷付かないでいい
フエは、少女の亡骸を、そこにそのまま、投げ棄てたように棄て置くと、着の身着のままに、海
を
きみの微笑みはまるで
目指した。周囲に、彼らの
猛毒。すこしのまぶたの
気配があった。フエを
ふえるさえもが
追いかけてまわす彼ら。いっそのこと、
ぼくを殺した
復讐として、私を
迷いもなく、あまりにも
殺して仕舞えばいいのに、と、
すみやかに

想い、そして構いはしない。たとえ、海に辿り着けないままに息絶えたとしても。ショートパンツにTシャツだけで、そしてバイクなど走らせようがないのだから、歩いていくしかなかった素足のサンダルに、雪の零度はじかにふれた。雪の、

花

本当の

雪の花舞い散る中に

温度を

ぼくらはやがて、永遠に

知った気がした。

結ばれた

あの、海の向こうの故国で、なんども味わったはずの雪の温度を、生まれて始めて。想い出す。フエは、その時の凍えるしかない温度。死んで仕舞っても構わない。だれも路上にいなくなった深夜のこの町で。その除雪もされない路面の上に。どうでもいいことだった。海を見い出せようが、それが叶わなからうが。どうせ、見出し獲るのは、いま、いくらでも見出し出している、そして、眼差しが希望もないままに見つめるしかない、その、純白の風景に代わり映えのしない、ただただ白い色彩の束でしかないのだから。このまま、と。

染まれ

想う。

穢れた町並みよ。ただ

死んで仕舞っても、と、

純白の零度の

その

殺戮の色彩に

肩を揺り起こされたときに、不意に眼を開いたフエに、アンは一瞬、為すすべもないおびえを、眼差しに、素直に

そして

曝した。

風はいまや、やさしい歌を歌うだろう

咬み付きなどしないのに、と、アンは後に想い出し、自分をはかなく嘲笑ってやるしかない。午後三時の、いまだに容赦のない日差しのもとに、拘束されて行ったときのままの、Tシャツと短パンだけの体躯を苦しげに捻じ曲げて、庭先の地べたに倒れ臥していたフエは、もはや彼女が死んで仕舞ったとしか思えなかった。アンの眼には。その胸がいまだに息遣い、鼓動をきざんでいたのは気付いていたにもかかわらず。

ぼくは

フエは、

死ぬ

生きていた。

君のため

まぶたを開いたフエの眼差しに、

ただ

一気に

君のためだけに

光が

その日

直射した。

この世界中を私は微笑みで満たそうと思った

その直射の余りの鮮明さに、フエは

それはひとつの決意に他ならなかった

ふたたび失心しそうにさえなった。アンが抱き起こしたとき、自分がかいた汗に体中、髪の毛の芯までも濡らした発熱するフエは、一瞬引き攣り、身を見開いて、そして自覚する。何も見えない。

なにを

なにも、

しているの？

いま、

こんな

見えてはいない。フエは

ところで

絶望のうちに

あなたは

絶叫した。鮮血をさえ、

ひとりで
噴き出して仕舞いそうだった。...喉が燃える。アンは、
なにを
フエの喉の奥にだけ
しているの？
ちいさくたった、その
もう
かすかな、力なく歎くような音声を、
空は
耳に
晴れています
やさしく聴き取った。
フエを肩に、抱きかかえるようにして階下に下りたとき、葬儀の楽団は派手に、自分勝手な野曝しの演奏に耽っていた。そして、集った近親者のだれも、それをもはや単なる雑音としてしか認知などしていなかった。嘲笑うでもなく哄笑がいつか、意識しないままに私の口元をゆがめさせたが、人々はそれを悲しげな微笑として消費する。...落ち込むなよ。そんな、ふしだらまでに気遣いをあふれさせた眼差しをすれ違いざまに気が向くままにくれて。
夕オはどこにもいなかった。二階に彼女とその母親、マイの部屋が在るはずだったから、そこに引き籠って仕舞ったのかも知れない。ただ、フエのやさしい抱擁を避けるために。フエは、三階での事の顛末を、いまさらだれにも言おうとはしなかった。もはや、記憶の彼方に勝手に色褪せていくままに、なかば忘れ去って仕舞ったのに違いない。
ヴーの死に顔を、わざわざ拝顔しようとするものなどいない。ヴーの葬儀の中で、なにもものよりも真っ先に忘れ去られているのはヴーの亡き骸の存在と、そもそものヴーの不在そのものだった。人々は
死者に鏡を見せてはいけない
それぞれ想いのままに、本来の
...そう真顔の君が言ったとき
意味さえ忘れられかけた集會に
想わずぼくは声を立てて笑ったものだ
憩った。壁際に一塊に身を寄せあった、白装束の女たちとその装束の色彩に眼を留めて、彼女らに声をかける一瞬を除いては。
フエの眼差しに、癒しようのない歎きが曝されて、その眼差しには記憶が在った。ミーを埋葬したそのあとの、私が彼女に加えた愛の行為、あるいは不当なる陵辱、あの、ブーゲンビリアの花々の下に見出された、光景のさなかに、あるいは、そして、そのあとで彼女を抱きかかえたソファの上に、曝されていた彼女の眼差し。
...ねえ
フエは、もはや
いま
私を見つめようともしないままに、視線を
何時ですか？
天井に投げ棄てて、あるいは、見ていたのだろうか。醒めたままに見る
いま
夢を。あるいは色彩のない、鮮血を流し出すしかない誰かの
そこは
昏い翳りをでも。
いま
横たわったフエの、投げ出されただけの息遣う身体の傍らに
ブノンペン
ひざまづき、私は
プエルトリコは
シャッター越しに侵入した午前の日差しの照らし出した、褐色の肌に
バグダッドは
頭を預けた。皮膚に添った耳は確実に、
北京は
死んで仕舞ったようなフエの、茫然をあざやかに裏切って、
ハ・ノイは
躍動する体内の音響を聴き取り、鼓膜の中に
何時ですか？
響かせる。
ホイ・アンは
私は聴いていた。フエの

音響。嘘偽りない、彼女が生きてあることを無様に

証明してやまない響き。

私は知っていた。フエが、私を

断罪もしないままに、すでに

完全に許し、和解して仕舞っていたことを。フエの

まぶたが、ときに、音もなく

瞬く。思い出す。タオ。やがて

十六歳になったタオの最期のときに、私を

受け入れたときにタオも、満たされたような、あるいは

終に

手にすべきだったものを獲得したような、あるいは悲しげに何かを失った事実を認識したような、あるいはもはや穢されて仕舞った残酷さに目醒めたような、それら、いずれにせよフエをさえ含めたさまざまな女たちが、私を受け入れた瞬間に想い想いに曝した表情の群れのヴァリエーションには一致しない、フエが曝しているのと同じ深刻な歎きをさざんだ。

...時々、魂が叫ぶことがある

私をもう見つめない眼差しの中に。相変わらずの、微笑んでさえいても、想いつめて昏いその眼に巢食った色彩を背景にして。その歎きはどうしても癒し難かった。肩を抱かれたフエのそれと、まったく同じく。癒してやらなければ、その眼差しにふれさせる私をさえ、巻き添いにして滅ぼして仕舞うに違いないにもかかわらず。容赦もない哀れみと、慈しみの、かさなりあったあたたかさ、同時に、許し難い鮮明な憎しみの発熱が、私のまぶたの裏に芽生えた。壁際の白装束の女たちに、想わず眼差しがふれた瞬間に、フエは微笑んだ。哀れみも、追悼も、何の感情もさらさらな微笑みがフエの口元をはかなくゆがめて、女たち。彼女たち。それら、生み出すものたち。

彼女たち、生み堕としつづけ、生み堕とせなくなるまで生み堕とすために生み出されたにすぎない無様な有機体たち。永遠に、母なるものにさえなれない存在。彼女たちだって、結局は生み堕とされたものに過ぎない以上、母にはなり獲ながら、純粋に母そのものには終に同化し獲ない。母としてまさに母であるものとして目醒めつづけてあることの可能性に、永遠に拒絶された、いつかその肉体を滅ぼすしかない穢らしいちいさな生命たち。男たちほど、命そのもへの無関係さを曝すことさえもない。彼女たちは、しずかに目配せと、耳打ちのささやき声のなかに、ヴーの不在を歎いた。もはや、フエさえもが彼女たちの中に寄り添って、肌を寄せ、寄せ合い、肩を抱かれ、抱かれあい、一塊の一群になって、その周囲に、男たちは、そのうち為すすべもなく滅びていく脆弱な肉体をゆすりながら行き来したが、だれも吊いなどしないヴーは死んでいた。私の背後に安置された棺の花々の中に。女たちは歎く。ヴーの遺伝子が覚醒させた、卵子細胞の慣れの果てに過ぎない有機体の集団たちは。

彼女たちは、寄り添いあう。いま、此処に存在していることそれ自体の中に、悲劇は目醒めているのだとさえ言いたげに。息をひそめ、声を殺して。

俺は

背後に、アンが

私を

呼んだ。

軒先のテーブル、アンの声がした方に歩みよると、褐色の人々一群のなかに、不意にアンは笑い顔が見い出される。背が高く、体格のいいアンは、私の一回り、姉のフエのふた周り以上の巨体を曝して、そのくせ、極端に甘ったれたやさしげな顔立ちを体躯の上に孤立させる。熊の体の上にパンダのぬいぐるみの顔をのせたようなものだ。

初めて見たとき、戦争の周辺の曲折のせいで、白人の血でも入っているのかと疑われたほどにアンは、堀の深い、端正な顔立ちをしていた。調べているとは思えない。どこかで、甘みが強すぎる顔立ちは、あきらかに品性を欠いて見獲た。それでも、女たちが彼に群がっている事は知っている。手も出してもらえないくせに、必死に、想い想いの流儀と技法と自分勝手な想いのかけらによる、その媚態を張り巡らして。

そこは

ニャ・チャンは

サ・パは

ビン・ズオンは

何時ですか？

プー・コックは

ダ・ラットは

クアン・ピンは

ハー・ティンは

何時ですか？

いま

俺自身をさえ

裏切ってしまった

アンが座れと、早口のベトナム語を罵るように口走って

Anh

笑い、私に

ở đây

身振りするままに、彼の眼の前に座って、私は彼に微笑みかえしてやる。アンは姉を見つめ、やああって、不意に、自分がようやく

...あ

正気づいたような気がした彼は、彼女を

いま

腕に抱いた。病んだように

天使が堕ちた

発熱するフエ。二十歳をすぎたばかりで野晒しに、長時間の直射日光に痛めつけられた挙句に、茫然とするばかりで意識さえ定かでは無い彼女が、正気づかないままに好き放題に投げかけた体重に、アンの腕は

...あげる

重む。女の体を抱きかかえた片腕に苦勞して

永遠の愛のその

鍵を開けると、弟は

記念に。君に

シャッターを足に

海王星のダイヤモンドの海を

こじ開けた。日陰の中にはせめてのもの涼気があった。その、かすかな涼気が、日差しに熱せられ続けたフエの皮膚に、肌寒いほどの温度としてふれていることには気付いていた。想いあぐね、アンは自分の部屋のベッドに、横たわらせた。

ぼくの愛は死なない

意識を取り戻しているはずのフエの、いまだに焦点を取り戻せない眼差しは呆然とするばかりで、フエの意識が

まだ

そこに目醒めていることなど、アンには

生きています

認識できなかった。姉はいまだに、

わたしは

どこかに

ここで

好き勝手に

あなたの

さ迷い歩いているに違いなかった。不意に、フエが

そばで

呆気に取られた眼差しを一瞬だけ

あなたに

取り戻して、...ねえ、

見つめられながら

言った。

...Em

あなたは信じる？

hiếu được không ?

アンがまばたく。私たちはすでに結ばれているのよ、と、

em

つぶやいたそのフエの言葉は、彼女の

yêu

頭の中のどこかに

chị

遠い木魂として響いただけで、唇は終に吐き出し獲ない。眼の前に、アンが自分を見つめていることをフエの眼差しは意識した。

アンはあきらかに、彼女におびえていた。姉の不意の狂気の発作じみた意識の崩壊に。こんな、亜熱帯の陽光の、午後の直射に差され続けるなんて、と、アンは、死にたがっているのと同じことだ。...想う。フエは、その、おびえた眼差しに、あなたも想っているのね？

わたしが

あなたを

彼女を壊して仕舞ったのだと。いまや、

すべての眼差しは自分を
残酷で猟奇的な殺戮者だとして見つめることを、フエは
自覚し、確かに、と、
思う。わたしは
そうであるに違いない。
あなたたちが、そうだと言うのならば。
息遣うフエの、その
日陰では
かすかな音が耳の至近距離に鳴って、姉の内部を息をひそめて伺っていたアンは、そして...す
でに、結ばれていた。つぶやいた。心のうちに。フエは、あなたはすべてを破壊しなければ気が
すまないわたしと、すでに結ばれていた。体だけではなくて、なにもかも。
フエは
どうせ死ぬなら
思いだす。あなたは
その最期のときは
わたしを殺して仕舞うのね、と、
あなたの腕に抱かれながら死にたいな
ハンは
あなたに最後の微笑を
言った。アンが、
返してあげながら
妹のホンHồngもろとも引き潰して仕舞ったハン。即死したハンに比べて、四肢の大半が引き潰さ
れていながらも、ホンはかろうじて生きていた。
すくなくとも、死んではいなかった。延命のために、辛うじてつながっていた、骨まで引き潰さ
れた左足も、切り離されて仕舞って、体中チューブだらけにして、人口的な延命装置につないで
やる限りにおいて、なんとか生体機能をは確保していたその体躯は、死に獲もしないままに、そ
の脳の損傷は深刻だった。
彼女の頭の中に、ホン自身はすでに不在であって、いわば、完全に綺麗にデリートされた真っ
白い、何のソフトも入っていない本体だけを曝していたのだった。フエが、唐突にかけた声に、
ホンのまぶたが笑った気がした。...生きてるわ。
...と。不意に
Hồng
そうささやいたフエを、病室、集中治療室の中で、ダットは
sông
見上げた。壁際の椅子に座りこんで、為すすべもなく携帯電話をいじっていたダットは。ホンの
顔に、覗き込んでいたフエは、彼をは
A rose
見つめないその眼差しの片隅に、彼の
still
気配を、それでも捉え続けていた。
livin'
...知ってる。
薔薇は
言う。娘は
まだ
生きているよ。まだ、
生きている

と、言ったダットの声を娘は聴く。確かに、心臓は鼓動しているのだから、彼女はまだ生きているに違いない。この肉体は生きている。それは事実だった。それを、フエはいまさらに自覚し、彼女は不意の恐怖に陥った。

フエが、そのときに流した涙を、ダットはかわいそうな妹を哀れんだのだと想った。
アンはいちども病室には訪れなかった。もはや、アンは後悔していた。どうせなら、即死させて
遣ればよかった。もっと、痛ましいほど残酷に、痛みなど一瞬たりとも感じられないほどに、引
き潰して仕舞えばよかった。その、あざやかな悔恨を、アンはもてあそぶしかなかった。仕事は
天使はすでに処罰されていた。なぜなら

中断させなかった。

彼らはすでに救済されていたから

毎日の飲み会も、

否応もなく

習慣づいた朝の近親者とのカフェのコーヒーも。人々がアンを冷たく、冷酷な人間だと、その口
には出さないままに、そう想っているに違いないことなどはすでに自覚していた。...彼は強いよ
。そう、おちゃらけて、

魂よ

Anh

ときに思い出したように囁し立てる近親者の一部を、アンは

望むがままに

Mạnh

軽蔑した。彼らは言った。この子はあんな事故を起こしても、びくともしないじゃないか。自分
の

固有のおののきを曝せ

Anh

母親と妹だぞ。もちろん、悪いのは

お前が為し獲る

khỏe

彼女たちのほうだったんだ。不意に飛び出して仕舞ったんだから。この子は立派だ。

その

He is ...

いつも想った。普通にしなければ生きていけない精神状態であることの、あやうい苦痛を、あな
たたちは

唯一の営みを

I am ...

知っているのか。

自分がひき殺した母と妹のことは、アンは完全に無視した。母の葬儀は、悲惨な気配の中に進行
した。...美しい姉。

茫然として乱れるわけでもなく、つつましくずっと、もはやあざやかな微笑みさえ浮かべながら
、人々の忌問の言葉を受けてやるフエのたたずまいは、ただただ痛々しいだけだった。だれかが
死んだときに、いつも彼女の着る焦げ茶色の教徒服の上に、さらに白い皺だらけの装束をかぶ
って、フエは日陰にたたずみ、そして、あえてなにも言わなかった。フエの曝す沈黙はむしろ暴
力以外のなにものでもなかった。彼女に眼差しでふれた、その周辺に群がった人々にとって。そ
の

...馬鹿にするな

沈黙に殉じない、いかなるあたりまえの近親者の雑談をも、フエの沈黙は

ぼくだってぼくくらいは殺せる。...ほら

不屈きなならず者として

これがぼくの骨だよ

容赦なく

痩せて干からびた

処罰して仕舞うのだった。無言の、

ぼくの骨だよ

芽えた微笑みのうちに。人々はいつか、フエにならって沈黙するしかなかった。

かつて

アンが、

野生の猫の眼差しは軽蔑をしか曝さなかった

いつものように、煙草をすいながら太鼓をたたき、そして、いとこのトンThôngがどらを鳴らした。祭壇の傍らに、持参された線香の束が山になった。...もういちど、と、フエが言った。半年近く経っていた。...なにが？不意に耳元にささやいたフエの声を、

聴かせて

アンは聴いた。

君の歌を

髪の毛が

君だけの歌を

匂った。美しいフエは、

君を守るため

アンの体の上に覆いかぶさって、その夜、

その為に生まれてきたんだ

雲の気配さえない晴天の日の、明るい月の明かりがフエの寝室に侵入していた。なにかにも、ふれないでは気がすまない不埒さを、言葉もなくさらして光はあまねく、狭い空間を照らし出し、開け放たれたドアからいつか、忍び込んだベッドの下で、上のふたりの秘め事の気配を

...もう

うかがった。

飽きれちゃうくらい、未来の話をしよう

フエの体温が自分の肌に移される、...と。アンは想う。いつものように。お葬式を、と、先の言葉などすでに忘れて仕舞っていたながい沈黙のあとに、不意にフエが口にしたとき、アンはすべてを了解した。回復の見込みのないホンの延命装置を、外して仕舞ったのに違いなかった。ホンは死んだ。あるいは、明日か明後日ってかの早々に、彼女は

召されませ

死ぬ。

わたしたちの

アンは

魂を

フエの頬をなげた。

その

涙はなく、その

天の

気配さえなかった。汗まみれの

玉座の

フエの、体臭が

片隅に

匂った。当たり前のことだった。あんなにも、

哀れんで

直射日光に

召されませ

苛まれていたのだから。

いま

アンは、

わたしたちを

フエのTシャツを脱がせて、苦勞して裸に剥くと、いまだに呆然としたままのフエを抱きかかえて、シャワールームに

愛に救済などいらぬ

入った。

なぜなら

流れ出す流水に、ふれた

それはただ、そこに存在し続けることだけを願うのだから

瞬間にフエは

召されませ

一度、身体を痙攣させた。

哀れんで

まるで

召されませ

生まれてはじめて冷たい水にふれたように。自分も

どうして

素肌を曝した目の前のアンの、その

なぜに

体軀は自分が生まれて始めて知った体軀であるかのように、フエの

の隅々をまで満たした美しい、花々の

停滞。

彼女はもはや、

それらに

手を

ふれようともしない。そんなこと、出来ないに決まっているのだから。

ふれられるものなどもはや

なにもなく、ふれたことなど一度さえもなく、

ふれ獲る可能性など

わずかたりともありはしない。彼女の

眼差しは、あるいはもはや、

あざやかな

鮮血を

流すしかない。時間など嘲笑った、その

逆流さえして仕舞う遅延の

速度の

うちに。

花々は、あるいは

憩う。永遠の、なにもものもさわるもののない時間のなかに放置されたそれらは、ただ好き勝手に憩って果て、そのとき、最期のときに、フエは言った。...好き？

と、

アンに。

彼も、すぐに

自分自身を破壊して仕舞うことなど知っていた。...好き？

なにが？と、音声として

つぶやかれもしなかったその

言葉を

聴き取れないアンのかわりに、彼がつぶやくべきだった言葉を頭の中に反芻してやり、その連鎖

。そしてアンは聞いていた。死にかけた姉が喉に立てた、いづつな、死にかけの猫が立てたような

甲高い、無意味なながい音声の不吉さを。すでに霞みかけた、死にかけの意識の中に。

アンは気づいた。眼をそらすことはできても、耳はそらせるようには出来ていない。それは、

いま、アンにとっては在り獲ない残酷劇の仕掛けである気がした。

なんという、と、アンは想う。でたらめな失敗作なのだろう。人体は、

もはや、まともに、思うがままに機能する器官など、どこにも存在しては居ない。すべては、為すすべもない機能不順か過剰か不足か不可能性を曝し、暴き立てるしかない。...失敗だ、と。

わたしは

ふるえる

咲き誇る

花々の

影に

私の

心は

ふるえた

咲き誇った

花々の

失心したあとの

その

かすかな

影に

かすかな

翳りの

ゆらめきの

うちに

Em

yêu

Không ?

Em

không

yêu

Không ?

すべて。なにもかも。容赦もなく。...せめて、と、想う。もっとやさしい声を立ててくれ。アンは。そんな、...と、アンは想った。不吉な、怒りと恐怖に苛まれた猫の立てた夜中の庭先の声のような、と、彼は、フエに、想う。声じゃなく。...お願いだから、と、その、想い。想う。アンは、もっと、と。...やさしい声を。...好き？

Em

反芻され続ける、その

yêu

何が？

không ?

声が、無際限に連なりあったその先に、死、...終に、

em

私は、...フエは、死に絶えるに違いないと、彼女は

yêu

いつか

ai

確信していた。

Em

機能をなど

yêu

失った表情が、顕すことなどもはや

nào

不可能だった以上、だれにも

em

顕されなかったただ、やさしい

yêu

いつくしみの微笑を、もはや

gì

なににも恥じることなく曝したままに。

眼の前に座っていたアンが、想いあぐねたように身をそらしたとき、フエは奥から、群れなした人々の一群の中に見つけ出した私の傍らに、座った。楽団の、ふしの長い吊いの音楽が、なんどもなんどもあてどのないつづやきを繰り返す優柔不断を想わせて、そして、それが耳に大音量で流れ込む。人々の話し声は、自然に、

ぼくたちは

罵るような大声にならざるを獲ない。

話す

フエは唐突に、初めて

ぼくたちは

アンがそこにいたことに気付いた。それは

離す

明らかだった。...あ、

ぼくたちは

と、

放す

かすかに眼差しは

ぼくたちは

おののきさえして、感情になりきれない心情の揺らめきに

手放す

飲まれて、一瞬

ぼくたちは

我を忘れ、フエは

手を放した

声を立てて笑った。アンは

君の眼を

眼を

見つめながら

そらした。

確かに、ふたりが顔を合わすのは久しぶりだったはずだった。親戚のティエンThiênの家に棲み着いて、アンはもはやまともにフエの家に寄り付かなくなっていた。...ひさしぶり。元気？と、当たり障りのない会話を交わす自然さは、姉弟には赦されてはいなかった。話されるなら、そんな、なにも話していないのに等しい月並みな挨拶の不自然さにまみれるわけには行

かず、さりとして、とりたてて唐突に話し出されるべきなにをも共有しない彼女たちは、あまりにも不自然な、居心地の悪さを曝した沈黙に耐えるしかなかった。

人々の話し声が渦巻き、彼女たちの沈黙を覆い隠したが、望む望まないにかかわらず、ときにこれらの会話の群れにかかわらされて仕舞いながらも、彼女たちの不自然さは、彼女たち自身にだけは、どこまでも鮮明に意識されているままだった。フエの眼差しは瞬き、あの日、クイは言った。...一緒に行かないかと、クイは、

どこに

拘留を解かれて始めて目にするフエに、

花は

やさしく

咲いているの？

そのまともな片面に微笑み、その

あなたが

反面に

愛した

冷酷で破壊的な

花は

表情の喪失を浮かべながら、

行かないか？

そう言ったクイに、フエは

一緒に

想わず声を立てて笑いそうになったのを、

わたしと

必死に

一緒に

堪える。クイほど

行かないか？

馬鹿正直な男はいないのに、その戦場の凄惨を刻んだ顔は、容赦なく彼の残酷な二面性を暗示した。

...ねえ

端整な微笑と、冷酷な骨格の残骸。むしろ、と、フエは

死んで

想うしかない。その顔は

穢いから

私にこそふさわしい。

だれからも、フエほど清楚でつましい女などいないと言われたものだった。ヴーが重宝していたある僧侶は、観音の生まれ代わりだと、十二歳のフエを

世界を平和にするために、世界中の軍人を

さあ、皆殺しにしてやりましょう！

名指した。...みんな、

everybody

知っているか？

check it out

この子は別の惑星から来たんだよ。ヴーの弟の葬儀のとき、その雑談のうちに。それは単に、清楚可憐さを表現するのに身体的に長けていたフエの無意味な仕草さのひとつひとつに感った、ヴーに比べても二、三歳年長だった僧侶が、戯れに言った、あきらかな戯言にすぎなかったとしても、言って仕舞ったことは言って仕舞ったことだった。僧侶は、それを取り下げるわけには行かず、取り下げる気もなく、自分で自分の戯言を、彼女に直面したことあるごとに周囲に喧伝して回った挙句に、いつか彼はその想いつきを啓示された真実として認識していた。...いいわよ、と、つぶやく代わりに、フエは

O.K.

一度だけ

Di

うなづいた。

フエは微笑んだ。クイは想った。なんて、...と、

どこへ

清楚な女なのだろう？想う。クイは、そして

行くの？

感じた。どうしようもない違和感。こんな

あなたは

女が、チャンを破滅して仕舞うなんて、と、クイは

どこで
なにを
見出すの？
どこに
あなたは
辿り着くの？
あなたは
いつ
思い、知っていた。彼女たちの、幼いころからの
戯れは。
その戯れの果てに、チャンは
壊れて仕舞ったに違いなく、
清楚なフエこそは、チャンを
壊して仕舞った張本人ではなくても、
当事者であるには
違いなかった。
彼女たちの秘密を、クイはだれにも打ち明けたことはなく、その気もなかった。すべて、すでに
ぼくを穢さないで
終って仕舞ったことには違いなかった。少女たちが
もう
戯れに奏でた物語は、
穢れてるから
その当然だったかも知れない結句を鳴らした。チャンは
わたしは
かなしい
あなたが
ここに
いないから
懐かしむわけでもなく、現在の時間のうちに、ひとり、想った。
フエを取り巻いた女たちは、フエを引きとめようとしていた。群がったそれらの口がクイへの、
歎きとともに罵りあうような非議の声をさまざまに喚き散らすのを耳に聴き、眼差しは捉えて、
女たちは言う。警察が連行して行き、フエが自白さえたのだから、彼女がチャンを壊して仕舞
ったに違いないと、証拠も必然性もないままに確信していた近親の女たちは、口々に駄目よ、と
、その無造作な短い言葉の、
Không được
長短のヴァリエーションを口々に口にし、
駄目よ
クイにさえときに食って掛かれれば、クイは
彼女が、...
女たちに
壊されて仕舞うわ。こんな
倦む。好きにしろ、と、
日差しの中で
クイが
壊れて仕舞うわ
言いかけた瞬間、
ふたたび
沈黙のうちに
出会って仕舞えば
彼女たちの
彼女は
言葉に
壊されて仕舞うわ
耳を傾けていたフエが、
彼女が
...いいのよ。
Con
フエは言った。

あの子に、逢いたい。

まばたく。フエは、...だって、と。

友達だから。

女たちはフエのけなげな決断に従うしかない。クイが連れ込んだ、頭のおかしな穢らしい女の腹のチャンは、ああなってみれば家族の一員として認める必然性など、近親の女たちにはもはやありはしなかった。面影を、母親に似せてはいてもクイには、面影げさえも似させ獲はしなかったチャンが、クイ自身が主張したようにクイの種であることなど覚束なかった。クイが連れて帰ったときには、逆算すればすでにヴィーは三ヶ月程度の身重だったはずだった。クイの語る物語とはつじつまが、どうやっても合わなかった。

女たちはそれでも、単なる日常の業務としてチャンの看護には通ってやったが、なされるべき何やら難しい看護のその大半は医者たちの仕事にほかならず、女たちは単なる暇つぶしの時間を過ごしながら、二日に一回病院を、誰かが着替えさせてやり訪れたに過ぎない。チャンは稀なタイプの患者だったから、病院の人間たちはすぐにチャンの許に通う女たちの顔を覚え、女たちに同情をくれた。歎きを同調させ、寄り添わせ、それさえもが、女たちには屈辱にすぎなかった。ヴァン以外をのぞいては。ヴァンだけは、毎日、用もなく頻りにチャンの傍らに通い続けた。かならずしもチャンの身辺のなにかの世話を見るわけでもないくせに。

いずれにせよ、女たちは英雄クイには従うしかなかった。

クイの運転するバイクの後ろにヴァンは乗り、フエは自分のバイクで、先導するクイたちを追った。

町は荒れていた。再開発のために買収されて、更地のままの放置された土地がいたるところに点在して、開発された高層ビルと未開発のあばら家が残酷な対比を作った。社会主義のこの国の、それなりに喰えないわけでもないが、かならずしも豊かとはいえない、要するに貧しい人々の集まりに過ぎないこの小さな海辺の町で、むしろ、そこに隠しようもない階層的な、埋め難い格差でも存在しているかのように。こんな、海しか誇るものもない田舎町にはいまだに、そんなもの存在し獲てはいないと言うのに。ドイモイ政策以降の工場地開発にあらされた周辺の田舎町と違って、はやくから観光地として企画されていたダナン市は、華やかになって行きこすれ、すさんでいきはしない。華やくだ区画と、それに隣接する従来区画が、あきらかな賃金格差をさえ眼差しのうちに暗示したが、そこに住む人々は、そのどちらにも似たような階層の、似たような人種たちが住んでいることは知っている。むしろ、華やくだ新手のビルに買い叩かれて、着慣れないスーツ姿や制服姿で働いている人間たちのほうが、賃金的に言えばあきらかに貧困してさえいた。たかが50万ドン札数枚の違いに過ぎないとは言っても。

新たに整備された主幹道路が、手入の行き届かないでこぼこの路面を曝し、フエたちは湾岸道路を走った。町の外れの開発地の、更地の真ん中を尽きた主幹道路に面した国際病院にまでは、それなりの距離があった。

横殴りに、あるいは真正面からぶつかっては通り過ぎていく風圧に、そのまま潮の匂いがうつる。ひたすら生き物臭く生々しいだけの、どこか穢れた匂いの、それでも潮の匂いが瑞々しく感じられるのはなぜなのだろう。そう、フエは意識のどこかで訝り、運転のこなれたクイに引き離されないようにするのが、彼女の精一杯だった。

海辺に、正午に近づいた日差しがゆっくりとその光沢を、海に投げつけ、椰子の木と雑林の向こうに、浪はきらめく。

青い色彩を、破壊し裏切って仕舞わずにはいない、その同じ海が放った浪打ちの白い、その色彩を失ったきらめきが、海の全面を遠くまで覆って、海はその視界の果てで、いつかそのきらめきそのものに飲まれて細く長い白濁の光をだけ曝す。

やがて躯体を並木の向こうに顕した国際病院は、日差しの中に白壁を反射した。周囲には更地の広大すぎる拡がり、主幹道路に並んだ申し訳程度の並木しかない。そして、遠い蒼霞んだ山陰以外には。

病院の、ほぼ満車の駐車場に、フエは想わず戸惑って仕舞う。その、広い駐車場いっぱいを埋め尽くしたバイクの群れに、よくもこんなに病人がいたものだと思ひ、確かにそれらはひとりの病人たちの数人の近親者たちの止めたバイクには違いないにしても、この国がいまだに戦争中でもあるかのような錯覚が眼醒める。いつか聞いた銃声。

血まみれにしてくれ

耳の至近距離に。想い出す。

俺を

転生のかつて、軍用中を構えた瞬間の、さまざまな

血みどろにしてくれ。俺は

集積、

なぜなら永遠の穢れものにすぎない

匂う。硝煙の匂いさえ。かつて生きられた時々。不意に突入が命じられ、その少尉に従うものは居なかった。

それが明確な判断ミスであることなど、彼らはみんな知っていたからだった。

かたわらのゴックNgocの頭を、銃弾が吹き飛ばし、至近距離にかさなった弾道が頭の脇の空間を灼く。勝ち残るすべなどなかった。ゲリラの一個小隊のぐるりを、無数の敵の集団が取り囲んで仕舞っていたのだから。逃げ道さえも見つけようがない。土に、もぐらのように穴でも掘らないかぎりには。

焦げた空気がおった気がした。勇敢な兵士とは、と、彼にカンCánhは言った。かつて、恐怖を知る兵士のことだ、と。

微笑みなさい

彼は。

どんなときも

臆病かつ卑怯であればあるほど、お前は生き延びられ獲、そのぶん大量の相手を射殺する事が出来る。

ほら

彼は身を伏せて、

勇気を出して

弾道の匂い嗅いだ。匂いの先に打ち込めば、誰かを射殺し獲、射殺し獲れば、生き残る可能性が広がる。彼が頭の中に、いつか反芻しつづけたそれらの訓育の言葉をもはや好き勝手に嘲笑いながら、発砲の煙幕と、空を切り、灼く、弾道の叫喚は周囲を満たし、カンが死んだときもこうだったのだろうか

自由

想う。

平等

たんなる衛生兵のひとりに過ぎなかったかつての彼が

博愛

樹木の根元に発見した、おなじ衛生兵のカンの血と泥に穢れた、尊厳も何もなくなただただ穢い顔は、冗談のようにびっくりした顔のままに固まりかけて、あけっぴろげの口の中は泥水を咬んでいた。あの、雨期の戦闘の時の、次の日の晴れ上がった朝日の

死ね

下に。

生き恥を曝すくらいなら

死んでいく。

いますぐみずから

彼の周囲に

おまえ自身を殺せ

人々は死んで行き、とはいえ、血の、あるいは吹き飛んだ肉と内臓と匂いさえしない。ただ、硝煙の匂いだけに、体中穢されていく。

彼は諦めることにした。死んだ振りをして、死体をかぶった。卑怯であればいい。生き残りさえすれば、今まで殺したよりもっと多くの人間を殺して仕舞える。戦争を終らすもっとも早急で間違いのない手段は、相手を皆殺しにして仕舞うことだ。政治など銃口を向けられた兵士に関係ない。そんなことに気を取られた際に、流れ弾さえもがたやすく彼らを破壊する。殺して、

そして湛えよ

生き延びること以外に、倫理も

世界よ

正義も在りはしない。

お前みずからの悲惨を

そして彼は戦場が好きだった。憎み、一日も早くこんな場所を棄てて仕舞いたかったが、ここを離れて生きて行く自信はもはやなかった。

そして

すべてが

ぼくは

あきらかで、切実で、嘘がなく、

きみが泣き叫んだ最後の声を聴いた

美しかった。強烈な愛を、戦場はいつか喚起していた。その巨大な魅力に抗い獲るものなどいはいはないはずだ。...と。

彼は想った。その魅力にふれない類の人間は、戦場には存在しない。そんな人間など、すぐに死んで仕舞うから。向こうの森を、空からなだれこんだ米軍のナパームが

振り向けば

焼いた。

忘れ獲ぬ焰

狡猾に、生き延びることを選んだ彼を発見したのは、敵方の衛生兵だった。死体を検査していた

その米兵が、死体の下で、打ちつける雨期の雨に震えていた彼を発見したときに、その大作りな口があげた素っ頓狂な悲鳴のような、怒号のような声を、彼は頭の中に反芻するしかなかった。

むしろ

寒かった。気温の生暖かさの中に

ぼくらは

目醒めた雨水の冷気がいつか、

ささやくことを選択した

彼の骨の内側をさえ

稀に見る怒号の轟音の中で

冷やしていた。男が連れてきたお偉方の米人が、衛生の兵に無理やり立たせられたぬれねずみの彼をサングラス越しに見やった時に、勝てるはずもないと思った。彼は瘦せていて、お偉方の米人は肥満している。無理だ、と。なにもかもが無理だと彼はひとりで想い、そして、そもそもが、どちらが勝とうが所詮は、形成されるのは同じベトナムという名前の国家に過ぎないことなど知っている。その

吹き飛んだ脳漿で

内実がいかなる差異を含まうが、その

口をすすげ

名前に差異など有り得ない。笑うべきなのは戦っている自分たち自身だと、彼は容赦のない悔恨に苛まれた。

米人が不意に振り返って、無意味に、そして義憤にかられたように彼を殴りつけたときに、彼が感じたのは違和感だったにすぎない。なぜ、彼はそれだけですまして仕舞うのだろう。俺は、君たちの数十人以上を殺して回ったというのに。あるいは、もっと。

もっと

ややあって、脆弱で、

もっと

理不尽な米兵たちを

辛辣な

哀れみさえした。森林地帯は、

殺戮を俺に

未だに、手付かずのままの戦死者の群れを無造作にはべらし、灼けた、硝煙の匂いが風化しながらその名残りを充満させていた。

言葉を失った。

フエは、そのとき、眼差しにふれているものに。一瞬、包帯のように見えたゴムバンドがベッドの上、あお向けたチャンの身体をぐるぐる巻きに拘束し、鼻から上をぐるぐるまきに覆った本当の包帯との明らかな質感の差異が、それが彼女を拘束し、彼女からそれ以上自分を痛めつける自由を奪うためだけに捲きつけられたにすぎないがんじがらめの拘束帯だったことを、フエの眼差しに教えた。

口は無理やり拗げられて、はめられた白いゴム製の猿轡がその顔の形態をゆがめ、ひん曲げられていた。よだれを好き放題にたらしながら、チャンはときに身体を痙攣させて、フエは、彼女が看護されているものだとはばかり想っていた。フエは、やがて、彼女がただ拘束され、虐待されているにすぎなかったことに気付いた。

頭をまで覆い隠した包帯が、いびつなほどに大量に捲き付けられて、チャンの顔はいつのまにピーナッツになって仕舞ったのだろうと、不意に笑いそうになったフエに、フエはもはや戸惑うことさえ出来なかった。

フエは、崩壊したチャンを見つめた。悲惨な、重症の傷ましい姿を曝しているものと想い込んでいた。悲惨には違いなかったが、その悲惨さの質の、予想への容赦ない裏切りが、フエから言葉と感情を奪い去り、フエは見つめる。目の前にあるものは、単に滑稽ななにかの出来損ないにすぎない。死体の群れ。

クアン・チー Quảng Trịの集落を襲撃したサイゴン政府か、米軍だか、韓国兵だか中国兵だかなんだかの、蹂躪の果ての煙を立てる粗末な集落。焼け出された女が身の不幸を歎いた。宗教じみていられるわけでもないくせに、ときに天を仰いで大袈裟に、胸を掻き毟るように、...黙れ。想った。

Im di

彼は。

Chị ơi

お前だけではなく、ここでは

Im di

誰でも彼でもそうなのだから、少しは静かにすればいい。あるいは、と、

Keep silence

想う。死んで仕舞えば。彼は、そう

in the

想った。つつまれる。

silent

彼の

place

眼差しの中に、すべての

沈黙せよ

ざわめく

残骸の群れが、その細胞の、分子の、粒子の、電子のすべてをまでも、光につつまれて仕舞って、そして

沈黙せよ

ぼくらのこころの微粒子が

知っていた。

静寂の場所で

いま

彼は、神々の光。それら。

もはや

好き放題に

ふれる。

沈黙していよ

ざわめき立つのだ

ふれるものすべてを救済しようとする神々の光が、その...光。明確な意志の切迫を、いつものように曝しながらただ、...光。万物にじかにふれていた。...黙れ。

想った。ただ、自分が生み出したわけでもないそれらのものすべてにふれ続けるだけの神々の光。ふれるものすべてを救おうとする固有の意志ある光。

ほら

光を放ちさえしない光の群れが、空間を

あなたは、いま

満たして、家族を皆殺しにされた

救われた。いま

その、いまだに

あなたは

性別さえ定かではない幼児が

まさに

どろだらけで、ふらつきながら

救われた

土の道に

あなたは

彷徨う。

強姦された女が焼け崩れた家屋の影で、日差しを避けていた。引き裂かれた衣類から剥き出された肌に、あわく翳った日陰の明るさがふれて、その肌、褐色の色彩。...光。

手を差し伸べなさい

生き物の色彩。...光。もはや。

わたしに

すべてのものにふれる光。

あなたは美しい

老人が彼を罵った。何をしているんだ。

ふれなさい

...と。耳元に口を寄せ、その老人。

わたしに

集落の全滅を、お前らは知らなかったというのか。

あなたは美しい

干からびた皮膚の深く刻む皺。

見つめなさい

能無しども。

わたしを

吐かれる息。

あなたは美しい

すべを見殺しにした。

永遠を！

老いさらばえた内臓の臭気。

あなたに永遠を！

老人には片方の目がない。

あなたは美しい！

燃え上がった村。樹木が匂う。昨日雨が降った。今朝方まで。光が、日の光、それさえもが、未だに濡れた森をにおわせ、匂う。村を焼いたガソリンの匂い。爆弾の、そして水気の中に巢食ったままの硝煙の匂い。彼の背後で立ちあがった女が、不意に太ももをさすりながらよろめく。たっぷり愛されたに違いない。むしろ子供を生んで仕舞えばいい。その親族たちを殺し、村落を崩壊させた男たちの破壊の遺伝子さえ身に纏い、そして

あと、5年で

彼らへの憎悪さえ添わせてやれば、少しは

世界は滅びて仕舞うらしいぜ

お前たちより強い子どもができるに違いない。それが嫌だったら、いまこの瞬間に死んで、滅びて仕舞うがいい。むしろ、と、彼は想う。絶望などない。どっちが勝ったところで同じことだ。ベトナムはベトナムだ。それ以外の問題は、権力者と外国人たちの問題に過ぎない。知ったことではない。...光。

眼を閉じて、そして

戦場に

ぼくらはひとつになろう

その顎を吹っ飛ばした彼の友人タンThanhの血まみれの顔にさえ、光はじかに触れていた。三日前に。彼が手榴弾に吹き飛ばしてやった韓国兵の引き千切れた四肢にも。知ったことではない

。...光。

神々は、

朝、起きたとき

その憩いのやわらかな光のうちに、

わたしは

すべてを

すでに

救済しようとしていた。

救われていたことに

まばたく。

気付いた

フエは。一瞬錯覚した。目醒めたままに見出した夢の記憶の、その戦禍の惨状をもたらしたのがチャンだったかのように。そして、その一瞬の錯覚をすぐに嘲笑って仕舞いながらチャンは、そして、クイはその傍らに想うのだった。フエを、なんてけなげな女なのだろう？

笑ってよ

親族の女たちのだれもが、

ね

ヴァンをも含めてまるで

微笑んで

穢らしい禁忌にふれた生き物の残骸をみるように、チャンを

ぼくのためだけに

その眼差しに収めるしかない中に、フエだけはかすかな微笑さえ浮かべているのではないか。やさしく、

あなたが

眼差しにふれるもの

不意に

すべてを

天使の

いつくしんではなさない

その

微笑み。

こぼした

クイは

微笑みの中に

そっと

わたしは

その背をなげてやり、その手のひらのふれる感触に

憩う

フエは気付かなかった。...なぜ？

光の中で

と、フエは想った。なぜ、こうまでしてあなたは生きているの？と、チャンに、フエは、...なぜ？

ぼくは君の翼になろう

想う。

雨の日は君の傘になろう

神々の救済の光に、あなたは夥しくその身を

ぼくは、あるいは

蹂躪されながらも。

フエは、聴く。チャンの猿轡をかけられた口が、下手糞な笛が鳴らした低音のような、ながいな
がい音響を、息遣うたびに立てているのを。

誰よりも

その

深く、深く、深く

音響を。

そして深い

耳に残るといっわけでもなく、耳の奥に

眠りをむさぼる我等

それらは

無様な獣たち

反芻されて、フエは見つめた。気付いた。自分がその音響に耳を澄ましていた事実を。あるいは
見つめ続ける気もなく、その必然性さえ感じないままに、眼差しの向こうに曝されているもの。
隔離病棟の、集中治療室の中の、開け放たれない青いカーテンに透けた色づいた光に照らし出さ
れたチャンの体軀の上の蒼い翳り。チャンは寝返りさえ打てない。拘束された四肢は、突発的な
痙攣と痙攣とのあいだに、それでももがくのをやめない。這えない芋虫のようだと、フエは想い
、つぶやく。頑張っ、と、

Cố gắng

そう言ったフエの言葉に背後、ヴァンは想わず涙ぐんだ。

光あれ

フエが、私を見つめ続けていた。...愛しているわ。

君よ

と、

em

光あれ

その

yêu

君に

口には出されない言葉を

anh

光あれ

もっとも

yêu

君の周囲に

鮮明に

em

光よ

言い表そうとしたかのように、

đẹp

君を、すべて

フエの

em

包み込み、そして

眼差しは、性欲とは

yêu

いま

あきらかに違うかすかな色づきを曝してなまめき、潤ませられて、そして私を捉えていた。
その、上目遣いの眼差しを、いつか私は持て余して、楽団たちは奏でる。相変わらずの、
その、いつ果てるとも知れない追悼の音楽。人々はみんな、喚き声のような声を立てて話し合い
、戯れ言にうずもれ、だれもその、フエの眼差しには気付こうとしない。眼をそらし、見なかつ
たことに仕舞うわけでもなくて。

彼女の眼差しにとっくに気付いていた私はむしろ気付かなかったことにし、投げ棄てた眼差しが
捉えたアンは、諦めたやさしい眼差しを、ときに私にくれていた。かすかな軽蔑さえ感じさせた
彼の眼差し。その

...ねえ

意味は私には

馬鹿なの？

わからない。

アンは近親者に、フエの家屋の土地の売買について話し込まれてるらしかった。聴き取れるはしはしの、単語の意味が私にその内容を推測させた。不意に、私はフエを見つめ返し、その眼差しを。

私をだけ、見つめて放さない、その、そして確かに、私も彼女を愛していた。彼女が何であれ、私は、あるいは、...愛しているわ。

em

つぶやき続けた。

yêu

フエの眼差しは。

anh

終に、

em

想いあぐねた先に、一瞬だけ

yêu

失心して仕舞いそうな意識の白濁が、私の頭の中にじかにふれたときに、フエの頬に口付けてやろうとした私の眼差しは捉えた。

奥の階段から降りてくる人翳。

一面に吊り下げられた装飾布の切れ目の向こうに垣間見られた気配。それ。唇の不意の、中断された接近はもはや、その意味を失って私はフエの頬の傍らにたたずむ。至近距離にフエの体温があった。匂われたもの。髪の毛の。

匂い。

それ、...匂う。

祭壇の奥から、不意にマイがなにもかも、目に映るものすべてがつまらなくて仕方がないのだと、非議をさえ訴えずに突き放して仕舞った眼差しを曝して、そのたたずまいのすべてに不埒さを浮かべたままに顛れたとき、人々は彼女を完全に無視していた。

マイは、

すでに屠殺されていた

曾祖父の葬儀にもかかわらず、

わたしは

ただの地味な私服を着ていて、

すでに

余所行きの服に着替えさせたタオを

あなたの

背後に

眼差しの中で

従えていた。

そして白い蜥蜴は日陰にひとり言葉もなく

タオの眼差しに、

憇う

あきらかなおびえがあった。衆目の前で、禁忌にふれる愚をあえて冒さなければならないことを恥じている、その。何が禁忌なのかはわからない。家族の中に放し飼いの母娘が葬儀の催しになど参加しないことなどだれもが認知していた。彼女たちは、いずれにしてもそんなものだった。美しいといえば美しい、調っているには違いないマイの顔は、そして、眉もまぶたも頬も唇も何も、一切の媚びの表情を拒否して仕舞えば、むしろどこかで穢らしく不細工にしか見出し出せない。人間の顔の造型の抱え込む本質的な、気付かれないままに明らかなびつさをだけ、それは無造作に曝していた。いつも、

笑ってよ

そうだった。

歯を見せて

マイは、フエとの結婚の挨拶に訪れた私のとの初対面のときにさえ、にこりともせず、...あら？

anh

いたの？

Nào ?

そんな眼差しを投げた。ふとした疑問形の息遣いををなぞることもなく。ただ見棄てたように。その四月の日、もちろん存命だったヴーへの挨拶を済ました私をフエは引き連れて、奥のキッチンに入って行ったとき、親族の二三人の、食事の準備に追われていた女たちは嬌声をくれた。...あら。

anh

ハンサムさんね。

dep trai

月並みで、当たり障りのない、新郎に対するありふれた嬌声。そして、外国人に対する気遣いと媚び。および、眼差しの中での、彼が同人種でないことへの明らかな差別あるいはそれ以前、警戒以前の、繊細で隠しようのない断絶。それに、孤独を感じさせる隙さえ与えない、そんな、やさしい意図されざる遮断。

クイの家にあふれかえった女たちはみんな太っていた。肥満と言う、漢字にすればいい意味にしかない言葉のももとのニュアンスを感じさせた。彼女たちは食うには困っていない。つまり、私たちはそれなりに幸せなのよ、と、その、腹のふるえる脂肪が耳元にささやく。...痩せてるわね。

anh

食べさせてるの？と、

ôm

痩せ身の私を

nhi

見出した彼女たちはきびすを返してフエを

ぼくは

責めた。

家畜じゃありません

男が細身であるのは、その男を所有する女の責任なのだ。フエは

ぼくを

すねた顔をしていい訳じみた戯言をつぶやき、その時にも、

食べないでください

一瞬、振り向いたわけでもない無意味に彷徨った眼差しの端に、階段から下りてきたその人翳はふれた。

...あ。いま

振り向いた先、逆光の中の階段の端に、マイは

天使が墮ちる

いた。日陰に一瞬たらずんだその女は私をすでに見留めていた。華奢なフエに見慣れた眼差しには、あきらかに匂うような女じみた気配を、その、捨て鉢に質素なTシャツとショートパンツに覆った体からだけ無造作に撒き散らして、眼差しは非難するでもなく私を見つめ、...誰？と、

ai

その一瞬に曝して仕舞った赤裸々な戸惑いの刹那だけが、私があるとき彼女に表情を見た唯一の瞬間だった。女にとっては、不意に寝込みを襲われたようなものだったのかもしれない。いかにも日本流儀を装って、頭を下げてみせた私を、女はひとめで外国人だと了解したに違いない。すでに、垣間見獲た表情は跡形もなかった。彼女は、何かを察知する前に、すでに、戸惑うことなど投げ棄てて仕舞ったのだった。私の体の翳で、フエは彼女に背を向けたまま自分に群がった女たちに媚びた戯れ言を撒き散らしていたが、...誰？

...ねえ

言った私に、彼女は何を言っているのかわからない眼差しを

お腹すいた？

くれた。フエは、上目遣いに、ごめんね。

Anh à

わからないの。

nói gì. Em

ほんとうに、ほんとうに、...ね？

không

なにを言ってるの？

hiếu...

マイは、

Anh

私をも捲き込んだ集団には

hiếu

眼も

không ?

くれないままに、水道の蛇口をひねって、グラスに水道水を取り、そして、迷うことなく飲み干した。

わたしは

一気に。

渴く

見つめたわけでもない眼差しの中で振り上げられ、曝された彼女の喉仏が鮮明にうごめいて、喉に飲み込まれる水の気配。不意に、私は気付くのだった。このあたりでは、それは普通ではない仕草さであるはずだった。だれもが、ミネラルウォーターか沸かした水を飲むのだから。その何となくの仕草さが、異国の彼女のたちの眼差しに与える意味合いを探ろうとしたものの、そもそもマイのことなど認知しようとはしない彼女たちの眼差しに、私にそれらを探り出すすべはない。

振り返った女は、私を見つめた。ややあって、眼差しが言った。...あら？

Làm

いたの？

gi?

私は微笑んでやるしかなく、すぐに、何を想い残すわけでもなく彼女は
千路に乱れた

立ち去る。

想いは

残酷なものを見た

花

気さえした。造型としては、彼女は人種的な美感覚上の差異以前に、調って、美しいといってやらなければならない。美しさとは、所詮、結局は誰かに対する媚にすぎない。人間に対する媚のない人間の顔は、巨大化したミトコンドリアよりもグロテスクな他人の顔だった。その事実がなにを明かすのかは判らないままに、なにか、容赦もなく残酷な気がした。

マイ、と、思い出したようにフエが唐突につぶやいたとき、私を見あげた眼差しがまぶしそうに輝き...ね？

anh

眼差しが、

có

知ってた？

biết

つぶやく。彼女の口にした

em

好きよ。

yêu

言葉とは

anh

無関係に。マイという、

không

その聴きなれた二つの、あるいは、ベトナム人にとっては一つの音に、単純に舞、と、

mai

ありふれた日本人名を想起して、ふと、私は笑って仕舞いそうになる。そんな知り合いなど、私にはいない。

かすかな、私の心の騒ぎを感じ取りもしないままに、...好きなの。言葉に淫する。フエは、

あなたは

ひとりで、自分の

わたしを

言葉に。

見ています

眼差しの中に。

いま

娘の

あなたは

夕オは母親よりははるかに世慣れていた。まともに言葉をつぶやくことさえ出来ずに、はにかんで、

わたしは

いかなる挙動にも

あなたを

もたついて見せた、そのときの

見ています

夕オは。

いま

見ているほうが

わたしは

恥ずかしくなるほどの、どうしようもない無様さを、そのもたつきは私の眼差しに曝した。彼女がはじめてふれる外国人、すくなくとも、日本人だったには違いない。そして、あの、彼女が気

を遣ってばかりいるフエが連れ込んだ男なのだった。
未だに8歳になるかならないかだった夕オをひざに抱いてやったフエの上で、夕オは後ろを向いてぐずつき、フエは、その若い、柔らかに伸び放題の、髪の毛に埋もれながら私に微笑みかけた。
誰にも放任されていたマイは、葬儀に集った集団の中で、自分勝手につまはじき者の自由を享受していた。丸テーブルを囲んだ男たちと、彼らに時に絡みつくように座ったその妻の疎らな点在は、雪崩れを起こして順にその眼差しに、不遜で不埒なマイを見留めたが、彼女に対してなにも非難の言葉など口にするものなどない。...元気か？

久しぶりだな、

と。

そんな当たり障りない言葉さえ、吐いたのは

眼の前のアンだけだった。アンは、

自分を見向きもしないマイに、むしろ

親しみをこめた眼差しを捧げて、その意図の明確さなどありうべきはずもないままに、いつか彼女をひとりで擁護していた。

フエは、私を見つめていた。...ねえ。

私の背後を、...わたし

幸せなの。...ね？

マイが通り過ぎていく瞬間に

知ってた？

匂いたつような女の

息吹きがした。体臭が、と言うよりは、その

肉体自体が、哺乳類として

自分の性別を

あからさまに、墨から隅まで

自覚したまま、マイは

それを

顧みもしない。あきらかに、

と、

想う。

終ってる。

私は。

彼女は

すでに

女を

Xin chào

Khỏe ?

どうして

あなたは

わたしを

見えていますか？

あなただけを

見つめています

あなただけが

見つめています

わたしだけが

見つめられています

あなただけが

見つめていました

わたしだけが

そして

かなしい

わたしは

かなしい

肉体は

つぶやく

その

固有の

言葉をだけ

見つめられました

あなたは

やめて仕舞った。

わたしを

気付いた。確かに、夕オがいるのだからその時はあったには違いないが、もはや彼女の女性は死んでいた。本人自身、生きている自覚があるのかさえ定かでは無い気がした。彼女はそこに生存していた。生存と生きることは違うのだよ、と、蘇った人殺しの賢者ヴーが耳元でささやく気さえした。すでに、...と。

彼女は。

ヴー。戦場で何人も殺戮したヴー。時にその同国人さえも。みずからが銃口を向け、硝煙の匂いに身を曝したのは、八月革命以降の数年間の中の、ごくごく短期間にすぎなかった。彼は兵の作戦本部にいたから。ヴーは過酷なほどに賢かった。彼の作戦は、自軍の強烈な犠牲を強いることもあったが、挙げた戦果のほうが多かった。彼の企画と指揮と判断のもとに、多くの大量殺戮が実現した。彼は英雄だった。彼の子供だって英雄だった。クイは。仮に、クイが英雄でありえた根拠が、単なる自分の不注意のせいで、カンボジア戦役の戦場にその顔の半分を失って仕舞っても生き残っていた、ただそれだけのせいに過ぎなかったにしても。

アンがマイに振ってやった手が、行き場所をなくして一瞬、空間に停滞し、やがてはなしくずにその、短く刈られた自分の頭髪をなげた。その頭髪が、かすかな汗に濡れているのは知っている。暑い。

もう

晴れた日の温度が、大気の中に

ぼくは微笑まないだろう

充満して人々を温め、集った無数の人間たちの生産した

もう

体温と人いきれがさらに、いよいよ

ぼくは

その

永遠に

温度を鼓舞し、

屠殺されて仕舞え。この

充溢させる。

穢れた豚どもめ

フエの体さえ、かすかに汗ばんでいるに違いなかった。

奥から駆け寄ってきたヴァンは白装束をはためかせ、珍しくマイに微笑みかけて、その盛んにかける嬌声はただほほえましい。振り向きざまにマイは、

君に無私なる抱擁を

ヴァンをひっぱたいた。

ふれないで

逆光とは言獲ない、横殴りの

わたしに

陽光が、それでも

見つめないで

二人の半身を翳らせて、その

わたしを

明確な形態を一瞬

見いささないで

私の眼差しから

もはや

奪いさえしながらも、

わたしをなどは

見つめた。

あなたは

私は。

もう

彼女たちを、

決して

息を殺すわけでもなく、...いや、と。

君に

想う。

無限の抱擁を

見つめている、とは言獲ない。ただ、と、私は、見つめるしかなだけだ。想っていた。そう私は。そしてその、眼差しが見い出しているなら、それを、と。想った。見つめるしかない。...と。

想う。

私は、そう。

想っていた。人々はあえて、声をは立てなかった。その大半が、不意の娘の暴力に気付きながらも。唐突に、それぞれに、ばらばらと、ざわざわと、自分が何をすべきなのかわからない空白に、人々がとらわれて仕舞っていたのに私は気付いていた。

もはや肥満した巨体を、ヴァンはうち震わせながら、

ときに

ブーゲンビリアの

あられもない少女じみた茫然自失を曝し、...ね？

人目に隠れて

花言葉ってさ...ね

おびえた眼差しだけが

ぼくたちは

ほら

なに？

キスをした

何だっけ？

つぶやく。

覚えていますか？

知ってる？

言葉さえなくむしろ赤裸々に。マイの眼差しには憎しみもなければ、軽蔑も、いかなる欲望、例えば暴力への、破壊への、そんな嗜虐の匂いさえないままに、ただ、振り返ったその一瞬だけヴァンを見返したに過ぎなかった。

何の名残りもなく、立ちつくして、おどついているしかない夕オを先導すでもなく表の日差しに直射される。熱帯の、熱気にだけは不足しない日差しがじかに、その、褐色の肌を染めて倦まない。

アンが声を立てて笑ったので、人々はアンに従った。なんでもないことだ。そんなものなのだ、と、いまだにその衝撃が収まらないヴァンの、我を忘れることさえ出来ないでいる戸惑いと驚嘆を、駆け寄った女たちは慰めて、人の肥える60ばかりの男が囁し立ててヴァンの肩を抱き、男の指が挟んだままの煙草が煙を立てた。

楽団の音楽はやまない。

マイは、立ち止まったまま、ほんの数秒、日差しを浴びた。すぐに右に折れ、バイクに乗りもせず歩き去っていく。大方、なにか食べにでも言ったに違いない。主幹道路を渡ろうとしたミ一の、無造作な通行に、かわしざまにバイクがクラクションを鳴らした。周囲を見回し、夕オは、瞳を震わせながら思いあぐね、祖母にすがろうと一瞬、踏み迷ったとに、ややあって、彼女はフエを見つめた。

好き？

私を見つめ続けていたフエ。

あなたは

夕オが、踵を返し、走って

わたしの

母を追う。...いいのよ。

好きなものが

フエの、

好き？

もはや

あなたは

微笑みさえしない眼差しが

あなたの目にした

気にしないでも。

すべてが

つぶやく。私に、

好き？

...もう、

あなたが見出した

と、彼女の

わたしの

終って仕舞ったことだから。...その

すべてが

眼差しを

好き？

見つめることを

あなたは

...ね？
かならずしも強制もしないままに。

ね

行こう、と

どうして

...ね

言ったのは私のほうだった。

君に出会ってしまったのだから？

どうして

長居しすぎた気がした。どうせ夜もまたここに来るに違いなかった。一週間くらい続く、その毎日の葬儀の語らいの日々、最後の日の早朝の埋葬が終るまで、不在のヴーは好き放題親族たちを集め続け、無意味な会合は深夜にまで続けられ、ずっと。

太鼓は鳴って、銅鑼が鳴る。線香が立てられて、煙はあがり、ずっと。

時に奥の階段を上がった一番上の、あの日当たりのいい部屋でチャンが叫ぶ。忘れた頃に。楽団は音楽を奏で続け、その、聞き耳さえ立てられない垂れ流しの音楽はすでにだれにも忘れられていたに等しい。ものめずらしげな異国人の私にだけ、ときにその、空間に消えていくしかなく音楽は、看取られながら。

フエは、私に贖わない。葬儀に倦んだわけでも、持て余したわけでも、いいたたまれなくなったわけでもなく立ちあがった私に。...いいわよ、と、微笑まれた眼差し。貞淑な妻は夫にはただただ従順に微笑んで従うものだ。

なぜなら、夫は妻のためにだけに生き、妻のためだけに死に、妻の幸福のためだけにすべてを捧げなければならないのだから。...と。

その東アジア流儀の、女の貞淑の倫理と論理的根拠。

微笑む私に手を差し出して、私はフエの手を取ってやり、アンに微笑み返すと彼は、行けよ、

Di chơi

その、振り上げた右手が行った。...ふたりで、どこか行って、愉しんで来いよ。

Anh

フエが、

di chơi

周囲の眼差しに私を誇示した。ほら、...と。これが、私の幸せのためだけに死んでいく男よ。

どこへ行くの？と言ったフエに、私がどこへ行きたい？そう、問い返すと、フエは一瞬考えて、やがて、彼女は言った。...任せるわ。

*

* *

とはいえ、褐色の肌を十分以上にすでに曝しながら、執拗に日焼けを嫌ったフエのむずがりを笑いながら、私たちは海に向った。海に行くのは久しぶりだった。すくなくとも、海を目的として、そこに行く事は。

見馴れた風景ではあった。海沿いの町で、どこへ行くにも海は、眼差しのどこかしらにふれた。町をぶった切ったハン川を渡る橋の上をバイクで疾走するときにも、部厚い風にはあきらかに海風の強靭さがあった。どこにもかしこにも、意識するしないにかかわらず、海はその息吹きを曝して、その存在を明示する。

かならずしも、海が好きなのでもなかった。いまでも覚えていた。岡山と広島の間境の街に育ったとき、たしか十歳にもならないいつか、父親と母親が、その従兄弟たちに誘われて、私を海に連れて行った。父方の従兄弟だったのか、母方の従兄弟だったのか、それさえも記憶にはない。いずれにしても、もう二十年以上、その従兄弟たちとはあってはいない。街であったとしても、お互いに気づきさえしないはずだった。

それとも、...あ。...と。

...え？

ん。...

あ...

と、

あれ？

...あ、

あー...

ん？...え？

って、...

そんな、不意に蘇ったおぼろげな記憶が、次第に、あるいは一気に鮮明になって、終には記憶のすべてさえ取り戻される。...とか、そんな経験がありうるのだろうか？血を分けたと表現される、要するに遺伝情報の伝達過程を共有をはしているに違いない近親者と言うものは。決して、内臓移植さえ容易にはままならない隔たりを、その肉体は鮮明に刻んでいたところで。

あざやかな空の、見馴れた色彩だけだった。見い出されるものは。家屋やビルや、蒼く霞んだ山陰に、もはや遮られることの叶わなかった空は、ただむき出しのその形態を見せ付けるしかなかったが、その赤裸々さがむしろ、眼差しに見い出されたその、どうしようもない卑小さをこそ曝した。

確かに、それが、地球の球体と人間の網膜の現実的な限界によって、物理的に切断された、地表の拡がりのすべてを覆いつくす広大な大気の塊のほんの切片に過ぎなかったにしても、あきらかに大空という言葉を愚弄する、惨めで小さな単なるドーム状の円形を、空は、私の眼差しの先に曝した。

無残な気がした。こんな限界の下にへばりついた、その身の無慈悲なまでの卑小さを、哀れむ隙さえ与えない、無際限なまでに巨大な惨めさを咬んだ。

色彩は余りにも単純を窮めて、むしろ黄色味と赤味をその下地にしたような、光に特有の複雑な青のグラデーションを、いまやあやうく純白にさえふれる白霞みから紫がかかる寸前の純粋な青にまでいたろうとする無造作な連続の中に曝して、にもかかわらず、単純なことだよ、と。

これは、青。そう言うしかないんだ、と。

捨て鉢にそうつぶやいて微笑みさえしない、それら、曝された色彩。空は、青い。

その青を、青としか言い獲ないことには、明らかな屈辱と、解消不能な葛藤がある。

その下に、海はあまりにもちっぽけで、その固有の色彩さえみずからの、浪立った無際限な刻みにふれた夥しい反射光に白濁させられ、きらめかされて、私は終に見い出せない。なにも。その、海の色彩さえも。

足元を濡らす海水は、ただの臭気を孕んだ潮の水に過ぎず、海にふれているとは感じられない。海は、眼差しに捉えられている、先に見えるそれであって、足元に戯れるささいな浪打ちの水の惨めなわななきなどではないはずだった。

あの海の真ん中にでも行って仕舞えば、そして、海の上のただなかに遭難し、救いようのない孤立と危機にまみれでもすれば、ようやく私は海にふれることが出来るだろうか？

私は不意に、海を恐れた。その、真ん中の波立つ荒野の、留保ない孤独のうちに、たたずんであるいつか私が体験するかもしれない破滅の風景に、感じた。それはただ単に純粋な恐怖。

よく晴れ、文字通り晴れ渡った日に、遭難した私は一人で海の上に仰向けで浮び、見上げるしかない空を見つめながら身体に、皮膚に、鼻腔に、時に浪が濡らす口元の味覚にさえ、そして私は海を感じるのだろうか。

個人的な破滅が遁れ獲ず決定付けられたその時に。孤独と破滅の鮮明な兆しの中に、もはや憩うしかすべのない私は、そのままに浪にゆられて、...光。

そのときにも、私の眼差しは光を捉えていた。海を見つめながら、神々の、救済の光を、その意味さえよくわからないままに、満ち溢れた光。それらの容赦ない束なりに眼差しはもはや倦むしかなない。

私はまばたく。ひとりで、他人に説明の使用のない、鮮明な恐怖に苛まれながら、傍らに美紗子の微笑を見た。...怖い？

言う。その声を、

海が、

聴く。

怖い？

初めてだからね、と美紗子がつぶやいて、声を立てて笑い、彼女は忙しい。馴れない海辺で、海辺の遊び方知らない私の世話をするのに。従兄弟が連れていた子供たちは、その兄弟だけで三人束なって、波が打ち水が撥ねただけでそれを遊びだとして消費する。私は眼差しの傍らに彼らの姿を見遣っていた。いまや、その性別さえ忘れ果てて仕舞いながら。

湾岸道路沿いで、バイクを預けた。狭くはない更地を埋め尽くし、路面をまで占領したバイクの群れを背に、バイク預かりの男は日差しに体を灼いたまま、笑いかけもせずに私たちに一瞥をくれ、彼が何をしようというわけでもない。ただ、突っ立って、バイクの傍らに終日存在していることだけが彼の仕事だった。二十代半ば。まだ若い。

フエは直射する日差しに故意にむずがって、派手にすねてみせ、駐車されたバイクは疎らなほうだった。ほんの100台たらず。地元の人々は朝早くか夕方、日が暮れかかってから出なければ海には出かけない。海辺を歩いているのは、外国人か、遠方かきたベトナム人の、その一部の物好きな人間たちであるにすぎない。

ミーケー海岸。美しい海岸と言われながら、かならずしもそんな気はしない。海岸は所詮海岸にすぎず、ベトナムの中では美しい部類なのかも知れない。大陸の海の、南海の孤島というわけでもないそこは、結局は人にあらされた穢らしさを洗い流し切りさえできない飼い馴らされた海辺に過ぎない。

砂浜は短い。砂には、温度がある。バイクにサンダルを残して、私たちは砂浜を歩きながら、いちいちその当たり前の温度に熱がって見せるフエを笑う。抱きしめてやった彼女の肌を、潤わし始めた汗の気配がある。海は、海にすぎない。あの、初めて海を見たときの記憶から、自分勝手に抜け出せないままに、海を同じ眼差しの中にしか捉えられてはいない自分の意識の限界には気付いていた。あるいは、その固有性には。

外国人を含めて、人々は、疎らに海に集って、何をすると言うでもない時間をただ、浪費する。潮が匂う。空は晴れ上がって、ただひたすらにその、空に固有の青を曝す。すくなくとも、私の眼差しの中では。例えば猫の眼差しにとって、それがどんな色彩を曝しているのかは知らない。風に煽られてフエは髪を掻き揚げて、不意に走り出したフエを追った。フエは、泳ぎもしなくせに海に向い、声を立てて、見て、と。

Anh

海よ。

...biển

まるで、そうつぶやき、初めて見る海におのきながらはしゃいでいるかのように。フエは立ち止まった。その波打ち際で。押し寄せては引く、それ、でたらめで予測不能な浪のわななきに、足をふれられそうになっては逃げ惑い、接近し、逃げ、音。ふたりの耳に、浪の音が聞こえ続けていたことは知っている。その周囲に、彼女にふれもせずに戯れて声を立てた私を振り向いたフエは、...ねえ。戸惑う。

Anh

...海よ。

...biển

フエがその、眼差しいっぱいに曝した深刻な戸惑いに、私は甲高い、乱れた笑い声をくれた。困り果て、懊悩するしかないフエの眼差しを、そして私は彼女を腕に抱きかかえると、海に入ってしまった。腕に、落ちないように必死に気づかいながら、わざと嬌声を立てて暴れるフエを、時には見やりながらも匂う。潮の。そして、彼女の髪の毛、あるいは汗ばんだ、そして、シャツからのぞいた褐色の肌が日差しに触れた。

空は相変わらず、青いままだった。構わずにそのまま海に入り、腰まで浸かって、...先へ。もっと。

先へ。...と、もっと。歩いていく私の腕が感じた彼女の体重は、やがて海の水が拡散し、奪い去っていく。

もはや、胸に近くまで浸って仕舞えばその体重など感じられもしなくなり、腕と胸は、ただ彼女にふれているに過ぎない。そして、フエのしがみついた手は私の首を愛撫する以上の意味をもはや持ち獲なかった。もっと、と。

もっと。歩く私にフエは声を立て、見た。その短く刈った髪の毛の向こうに見えるのは空。浪が打ち、跳ね上がった男は海中でばたつきながらフエを支える。フエの顔を海水が濡らし、海水が嫌いな彼女があわてて手のひらに拭き取るその仕草さが男を笑わせている事をは知っていて...なに？と。

ほら

振り向いたフエは

海が

言った。その、

匂います

雨が降った日。自分が連れ込んだ日本人は、親族たちに酔いつぶされて、彼女の寝室で寝ていた。夕方の一瞬だけの夕立は、ほんの数分の轟音と雨の臭気を撒き散らせるだけ撒き散らしたあとで上がって仕舞い、すでに晴れ上がった空が紅蓮の夕焼けをその、片隅にだけ曝した。フエは、家に帰ってきて、シャッターをくぐった瞬間に底にいたフエに戸惑って、立ちすくんだアンを見つめた。何の必然があるわけでもなく、出会いがしらに、二人は見つめあうよりほかにすべなどなかった。フエは、不意に声を立てて笑って、...なに？

その、眼差しにつぶやかれた気配の意味を、アンは探った。

ややあって、眼をそらし、そのまま自分の寝室ふさぎ込もうとするアンを、フエは追った。フエが結婚する事は事前に、ダットから聴かされていた。自分の手柄か何かのように、娘の幸福を祝福するダットは、連れてくる男が乞食だったとしても自分の手柄にして仕舞うしかない。ダットのために、アンはフエの婚約を喜んでやった。かならずしも喪失感があるわけでもない。姉は、いずれにしてもいつか、誰かと結婚でもしないわけにはいかない。挨拶と煩雑な役所手続きのために、サイゴンからフエを連れてダナンにまで来た男を、アンは見るまでもなく知っていた。あの、色彩のない男の鬚り。

彼がどんな人間なのかは、アンだって知っている。

寝室にダットはいない。どうせ、夕方の早い時間になど、あの男が帰ってくるわけは無い。用もなく友人の家に転がり込んで、適当に見つけた名目にかこつけて、いつものように酒宴を始めて仕舞っているに違いない。

窓越しの日差しが、オレンジ色に、その眼差しに触れた。不意に振り返ったアンが、自分を抱きしめるのにフェは抗わなかった。そうするほかなく、そうするに違いなく、だから、アンはそうするのだ。

姉の体臭が至近距離に匂い、アンがベッドに投げつけるようにして倒したときに、フェは息を詰めた。眼差しの先に、突っ立ったままのアンが居て、想う。なぜ、と、私を愛しているあなたは、と、どうしてそんなに、...彼女は思った。絶望した眼差ししか、と、曝さないのだろう?...と。想う。

フェは、

それ以上のことをする気もないアンは、フェの上に身を預けて、その唇をむさぼり、...愛してる。

言った、その言葉を頬の至近距離に聴くフェの、眼差しの先には、オレンジ色の、あざやかな夕焼けの残像が打ち棄てられて、だれにも見つめられることなく彼女たちをただ照らし出す。

それら、ふれるすべてのものの形態を色彩に、自分の色を名残らせながら。

ザグレウスは想う

雨よ。

...と、フェに

mưa

言われるまでもなく

rơi

それには気付いていた。確かに、と、そう

mưa

想う。私は、いま、

rơi

...と、今、

ở

私は、

biển

濡らされる。私は、...と、雨に、いつか

雨が

私は

降っています

そう思った。

海に

事実、そうだった。

晴れ、少しの雲を白く光らせ、青の色彩を翳らせていたにすぎない、その美しい輝く空は美しい青のきらめきのいっぱいのままに、南部のスコールのような大粒の雨を私たちの肌に叩き付ける。雨は激しい。

鮮明な痛みと、雨粒の重さをさえ感じさせる、それら、ひとつひとつの落下。

空間は不意に降雨の轟音につつまれてそれは、けれども眼を疑うというほどではなかった。確かに、降雨の必然など、その息吹きさえも感じさせない晴れ空ではあっても、ときに私の預かり知らない上空の必然が、大量の雨を降らせることもあるに違いない。

在り獲ないほどの月日がこの惑星に廻り、在り獲ないほどの確率の中に生命体が目醒めたのなら、膨大な時間の中の些事として、ときには在り獲ない雨ごときいくらでも海に降りそそがざるを獲ない。人々は周囲に喚声を立てていた。肌を打つ雨の轟音。一度短く突然の雨を罵った後で、振り向きもしないままに声を立てて笑ったフェを抱きしめた、その私は見上げてひたすら晴れた空に、そこで雨が降るべき固有の必然を探した。



2018.11.5.-11.10.
Seno-Lê Ma

《雨の中の風景》

...underworldisrainy
<http://p.booklog.jp/book/124235/read>

墮ちる天使
<http://p.booklog.jp/book/124278/read>

scherzo; largo
<http://p.booklog.jp/book/124483/read>

墮ちる天使
<http://p.booklog.jp/book/124278/read>

それら花々は恍惚をさえ曝さない

...散文

①

<http://p.booklog.jp/book/125047/read>

②

<http://p.booklog.jp/book/125077/read>

紫色のブルスケ

...散文

①

<http://p.booklog.jp/book/125299/read>

②

<http://p.booklog.jp/book/125358/read>

③

<http://p.booklog.jp/book/125407/read>

わたしを描く女

...散文

①

<http://p.booklog.jp/book/125880/read>

②

<http://p.booklog.jp/book/125956/read>

③

<http://p.booklog.jp/book/126038/read>

seno

lema

ザグレウスは憩う

<http://p.booklog.jp/book/126293>

著者 : Seno Le Ma

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/senolemasaki0923/profile>

ホームページ

<https://senolema.amebaownd.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/126293>

電子書籍プラットフォーム : パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト